

1

「モノグラフ・高校生」 を振り返って

深谷昌志

1. モノグラフの始まり

モノグラフ・シリーズは小学生、中学生、高校生の3シリーズが刊行されてきた。その中で、最も発刊が早かったのは、「モノグラフ・中学生の世界」の1978（昭和53）年4月だった。次いで、1980（昭和55）年2月に「モノグラフ・高校生」、さらに、1981（昭和56）年6月に「モノグラフ・小学生ナウ」が発刊された。それから、現在にいたるまで、20年以上にわたって、「モノグラフ・中学生の世界」は79号、「モノグラフ・高校生」は73号、「モノグラフ・小学生ナウ」は年間12本の時期があったので181本に達し、児童や生徒を対象とした333本の調査レポートを発表してきた。

本シリーズのきっかけは1977（昭和52）年にさかのぼる。現在では、大企業の仲間入りをしているベネッセコーポレーションも、当時は岡山に本社を持つ福武書店という名前の小さな受験産業だった。家庭に配布された国

語や算数（数学）の問題を解いて送ると、赤ペン先生の添削が返送されるという家庭教育教材のシステムを開発し、それが子どもや親の支持を得ていた。

創業者である故福武哲彦社長とお会いした際、赤ペン先生は通信教育の教材なので、目の前に子どもがいない。それだけに、きちんとしたマーケットリサーチをして、難易度や子どもの充足感を分析してほしいという依頼を受けた。

福武哲彦社長の熱意に押される感じで、マーケットリサーチを引き受けることにしたが、今から25年以上昔のことなので、研究者として、企業の内部調査を手がけるのに抵抗もあった。そこで、マーケットリサーチをする代わりに、子どもを対象とした調査を実施しているので、その報告書を印刷してほしいと頼んだ。

2. モノグラフの運営

福武哲彦社長は、子ども調査の説明を聞いて、すぐに関心を示してくれた。そして、そうした研究活動なら積極的に支援しようと確

約してくれ、1か月もしないうちに、モノグラフの骨格が固まった。

① 研究者や現場の教師を中心とした同人会組織を作り、同人会で、調査テーマの決定や調査票の作成、調査結果の分析、報告書の作成を行う。

② 福武書店の教育研究所は、調査の実施や調査結果の配布などを行う。

③ 調査結果は、結果配布後、同人と研究所とで自由に利用できることにする。

④ 同人会は研究ベースで運営するので、福武書店から調査関係の実費と会合費、報告書の原稿料を支援してもらうが、同人の日当や交通費、資料費などは要請しない。

こうしてモノグラフは、福武哲彦社長と深谷昌志との信頼関係に基づいて発足し、その後、20年以上にわたって、継続されることになった。ここまで永く続けられた成功の鍵は、ベネッセコーポレーション（福武書店）と同人会との関係の持ち方だったように思う。

同人会サイドからすると、テーマ設定から調査票の作成、データの分析など、研究ベース（原稿料と会合費以外無償）で行うので、

精度の高い知的なデータを一般企業に提供する感じがする。また、調査にかかる実費を負担してもらえるので、積極的に意欲的な調査に取り組める。さらに同人と福武書店との共同研究の形をとっているので、研究プロジェクトに参加し、良質のデータをまとめることができれば、研究者としての資産を入手できることにもなる。

福武書店からすると、調査研究が研究ベースで行われるので、コスト的に安くすむ。そうはいっても、モノグラフを印刷し、全国規模で報告書を配布するので、かなりの支出が必要になる。しかし、研究者と現場の教師で構成された研究同人が報告書を作成しているという認識が定着するにつれて、モノグラフを安心して利用する雰囲気が広まり、マスコミも結果を取り上げるようになった。その結果、社会的に役立つデータを提供する企業として、福武書店の企業イメージや知名度が高まるという効果をもたらした。このPR効果をカウントすれば十分にペイできるという計算も成り立つわけである。

3. 「モノグラフ・高校生」の成果

それでは「モノグラフ・高校生」の成果を振り返ってみよう。

① 高校生を対象とした調査を定着させた

現在では、高校生を対象とした調査は当たり前になっているが、モノグラフが刊行された当時、高校生の問題は理論的に論じられることが多く、実証研究はあまり試みられていなかった。しかし、モノグラフ調査が広まるにつれて、高校生を対象とした調査の有効性が認められ、様々な形の高校生調査が実施されるようになった。モノグラフは、高校生調査の先駆的な役割を果たしたと考えている。

② 高校生調査の形式を確立した

モノグラフでは、巻末に集計表と同時に、

調査票を添付してきた。これも、当時としては画期的な試みだが、調査の透明性を確保し、他の研究者や教師が追跡調査を可能にすることを目的としていた。特別号の編集にあたって、古いモノグラフを読み直してみた。現在のレベルからすると、調査票のワーディングに手直したい項目が目につく。モノグラフの調査を通して、ワーディングも含め、調査票の形式を確立してきた感じがする。

③ 高校生からの視点を提起できた

モノグラフの結果は、予想した以上にマスコミに取り上げられた。そして、モノグラフのデータが我々の手を超え、様々な形で情報が社会的に広まった。そして、高校生からの視点に立った見方が広く定着したように思われる。

④ 研究者と現場教師とが連携する1つの形を作った

モノグラフ作成にあたり、現場の教師の持つ問題意識と研究者の方法論的な技法とを合体させる目的で同人会を結成した。具体的に、小学校と中学校、高校と3チームの同人会を編成したが、高校の同人会には、研究者や現場の教師の他に、特に博士課程の大学院生の参加を求めた。モノグラフの場合、高いレベルの実証研究を目指したからである。

特別号作成にあたり、創刊当時の院生の名前を確認してみた。大学院生として、耳塚寛明氏（現・お茶の水女子大学教授）や樋田大二郎氏（現・聖心女子大学教授）、荻谷剛彦氏（現・東京大学教授）などが参加している。いずれも、現在の教育界をリードする一線級の研究者だが、若い時代にこうした人たちが研究同人として高校生調査に携っていた。これらの教授たちのその後の研究をみると、どこかに高校生調査の痕跡が感じられる。そうした意味では、モノグラフが質の良い調査レポートを生み出したことは確かだが、若手の研究者を育て、教育界に貢献したのも目に見えにくい功績であろう。

⑤ 企業と研究者との共同研究に1つの形を作った

現在でも、企業と研究者との共同研究は難しい。理想を追求する研究者と現実的な利益を求める企業とでの間に一致点を見いだしにくい。そうした意味では、すでにふれたような枠組みで、20年以上にわたって、プロジェクトを組んできたのは奇跡に近い。

⑥ 昭和から平成にかけての高校生についてのドキュメントを残せた

例えば、1980年代の高校生が何を考えていたかは、今になると復元できない。そうした意味では、「モノグラフ・高校生」は、1980年から2005年まで、四半世紀にわたって、研究者の良心と現場教師の熱意に支えられて、高校生の心を追い求めてきた。こうしたドキュメントは、現在より、むしろ、これから先ますます貴重な資料になっていこう。歴史的に意味のあるこうしたプロジェクトに参加できたことは研究者冥利につきる。それと同時に、これまで、モノグラフを支えてくれたベネッセコーポレーション（福武書店）の諸氏、特にベネッセ未来教育センター（ベネッセ教育研究所）のスタッフに感謝したいと思う。

4. モノグラフ調査の限界

モノグラフ・シリーズの調査は、企画の初期から、問題提起型の調査を心がけていた。何人かの研究者が力を揃え、民間企業が全力を挙げてサポートしてくれるといっても、所詮は小さな民間のプロジェクトにすぎないから、できることに限界がある。

① 調査サンプルの偏り

社会調査の場合、どの場合であってもサンプルの選定が問題になる。小学生・中学生のモノグラフ調査も、どの学校で調査をするかが調査結果に微妙な影響を及ぼすことが予想される。しかも、高校生を対象とする調査

の場合、在籍する高校によって高校の意味が異なるので、調査サンプルの選び方がさらに大きな問題になる。特に、高校生の場合は、全日制高校と定時制高校、普通高校と職業高校、公立と私立、さらに、偏差値の高い高校と低い高校、都市の高校と地方の高校とがある。そして、どの高校をサンプルにとるかによって、データに開きが生じる。

高校全体を圧縮した形のサンプルをとるとするのは、言うは易く、行いにくい。地方の高校といっても、東北か九州か、東北でも、例えば、岩手県の都市か山村かのように、サンプル選びはますます多様になる。結局、モ

ノグラフでは、公立の中堅レベルの高校をサンプルにとることが多かった。進学校は受験の邪魔になるのでアンケートの実施を敬遠し、進路多様校は生徒指導の問題を抱えているので、アンケートなどしている余裕はない。そうした意味では、「モノグラフ・高校生」は公立の中堅レベル高校のデータという限界がある。

② アンケートの限界がある

モノグラフはアンケートをもとにした報告書という形式を守ってきた。年3本の報告書を出すので、テーマ設定、調査の実施、報告書の執筆を並行する感じになる。研究者の場合、何年間かをかけて1つのテーマに取り組むのが一般的だ。もちろん、本モノグラフでもテーマ設定にあたり、ヒアリングを行い、プリテストを実施するなどを繰り返してきた。そして、短期間に集中して研究を深めてきた。しかし、1つのテーマは単年度で終わるのを原則とし、追跡調査をすることはなかつ

た。また、過去にアンケートに面接調査を加える方法も行ってみたが、基本的にはアンケートの枠を超えることはなかった。

③ 事実の提示にとどめた

モノグラフ作成にあたり、調査結果を正確に提示することを心がけた。そして、結果から学んだことを大きく主張することを控えた。調査結果をどう考えるかを、読者に委ねるのが本筋で、同人としては、問題の提起にとどめるようにした。

こうした限界はあるものの、モノグラフは四半世紀にわたって、高校生の心の内を記録してきた。繰り返しになるが、そうした歴史的なドキュメントの作成に関与できたことを研究者として冥利につきる。ここまでモノグラフを続けてこられたのは、読者の励ましとベネッセコーポレーション担当者のお蔭である。心から感謝している。

2

青年としての高校生

岩田 考(1節)・西島 央(2節)

1. アイデンティティというリスク
～〈自立〉の新しい形へ～

フリーター、ニート、パラサイト・シングル、ひきこもり、少年犯罪の凶悪化。先鋭的な消費の担い手として持ち上げられる一方で、パッシングされる若者。そのようなパッシングには、「アイデンティティという確固とした自己を確立できず、いつまでもおとなになれないイマドキの若者たち」などという見方が共通に横たわっているように思われる¹⁾。果たして本当にこのような見方は妥当なのだろうか。ささやかな試論ではあるが、本節では、高校生の自己をめぐる意識を手がかりとして、青年期の課題とされてきた「自立」の意味を問い直したい。

1) 高校生にとっての「自分らしさ」

① 自分らしく生きる

冊子版においては、この部分に浜崎あゆみ「Trauma」の歌詞の一部をJASRACの許諾を受け引用したが、著作権の問題によりウェブ版では割愛する。引用部は、「自分が自分であるために、自分の幸せの基準にしたがって、すべてを選びたい」というような内容である。

これは、少し前になるが、1999年に163万枚あまりを売り上げた浜崎あゆみの10枚目のシングル『A』に収められている「Trauma」の一節である。浜崎あゆみは中高生を中心に10代から強く支持されている歌手である。ファンが彼女を支持する理由としてしばしばあげるのは、彼女の書く歌詞への共感である。奇抜とも思えるファッションくらいしか知らない我々おとなにとって、この事実は意外である。しかし確かに、浜崎のファンのウェブページは、自分なりに歌詞を解釈し、自分を重ね合わせ、自らの気持ちを延々と綴るというスタイルが少なくない²⁾。他のアイドル、例えば「モーニング娘。」などでは、あまりみられない光景である。

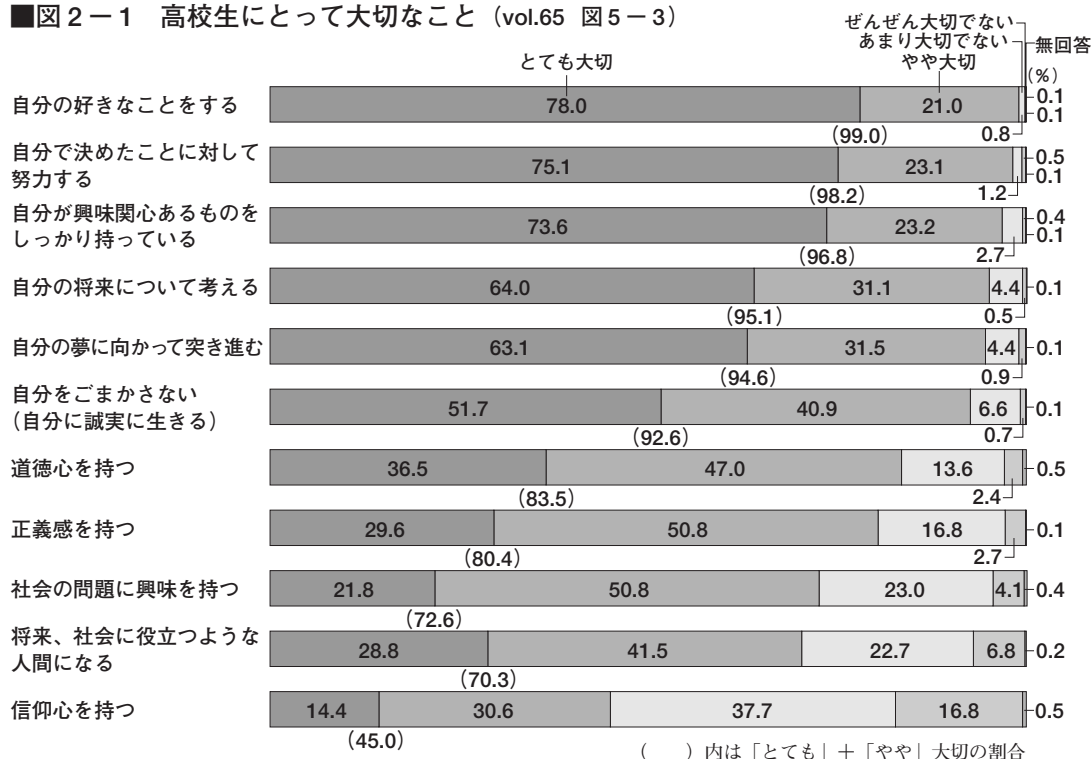
もちろん、この歌詞が若者の意識を代表すると単純に考えているわけではない。そして、この歌詞が示唆することも、それほど特別なことではない。「幸せの基準は他から与えられるものではなく自分の中にある」ということ、それだけである。「豊かな社会」で育った世代にとって、我々おとなが少なからず前提としてきた物質的に豊かになるという「幸せの基準」が、意味を喪失していてもそれほど不思議なことではない。

しかしそれでもなお、高校生の意識をみると、このような自分へのこだわりの強さという点は注目に値する。図2-1は、vol.65「まじめさの構造」(2002年)で、11の項目について、どの程度大切だと思うかを尋ねたものである。「自分の好きなことをする」や「自分で決めたことに対して努力する」は、ほぼすべての高校生が「大切(とても+やや)」と答えている。

②「自分らしさ」の呪縛

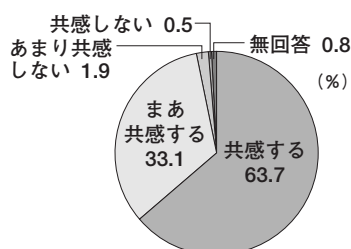
このような調査結果をみると、2003年に出版された村上龍の『13歳のハローワーク』がミリオンセラーを達成したこともうなずけよう。この本の帯には、「好きで好きでしょうがないことを職業として考えてみませんか?」とあり、就職状況の厳しさに不安を抱く親たちだけでなく、自分の好きなことを大切にする若者の意識も巧みに捉えているからである。

■図2-1 高校生にとって大切なこと (vol.65 図5-3)

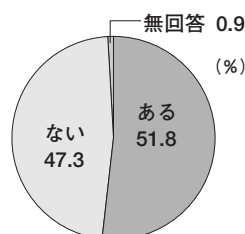


■図2-2 好きなことを仕事にする (vol.73 から)

「自分の好きなことを活かして将来の職業を選ぶ」という考え方に共感するか (N=1926)



将来の職業を選ぶ際に活かしたい「好きなこと」があるか (N=1864)



サンプルは、「自分の好きなことを活かして将来の職業を選ぶ」という考え方に「共感する」+「まあ共感する」と回答した人のみ (N=1864)。

確かに、図2-2に示したように、「自分の好きなことを活かして将来の職業を選ぶ」という考え方に共感する高校生は9割を超えている（「共感+まあ共感」する割合）。ただし、その約半数は、活かしたい「好きなこと」がないと答えている。村上に言わせれば、そうした若者が多いからこそ、幼いうちから考えさせることが重要なのだ、ということになるのかもしれない³⁾。

しかし、事態はそれほど単純ではないようだ。表2-1に示したように、あることが好きだと思えるような自分というものの自体が、流動的で不確かなものという側面がある⁴⁾。「自分らしさがある」としている者でも、「状況によってでてくる自分というものは違う」し、「自分がどんな人間かわからなくなることも」も少なくないのである。

「自分の基準」の絶対さを主張しつつも、「Trauma」という碇しか、確からしさを見いだせない浜崎の歌詞自体にも、そのことがあらわれている。しかし、このような歌詞に共感する若者の姿を、一昔前のように、「世間の基準を押しつけられ、自分らしくいることができず苦しんでいるのだ」などと解釈することは適切でないように思われる。何かそこには違いがあるようにみえる。歌詞の言葉とは裏腹に、「世間の基準」と葛藤を起こすような自分の中にある幸せの基準の確かさを感じることができないのだ。つまり、浜崎の歌詞への共感とは、「自分らしさ」、そして自分の中にあるはずの幸せの確かな基準の不在ということを逆照射しているように思われる。

しかし、現代は「自分らしさ」と無縁でいることを許さない社会だ。たとえそれがどんなに不確かなものであっても。2003年、200万枚を超える大ヒットを記録したSMAPの歌う「世界に一つだけの花」は、このことをよくあらわしているように思われる。槇原敬之が作詞したこの歌は、「すべての人が生まれながらに自分らしさを持っているのだから、その自分らしさを大切にしよう」と囁きかける。「No.1を目指し争うのはよそう、みんな特別なOnly oneなのだから」と。

「素の自分」というものを肯定し、No.1というような他者との比較や努力の結果としての「自分らしさ」に拘ることからの解放を歌っている。しかし、「素の自分」というかたちではあるが、結局は「自分らしさ」へと若者を駆り立てている。もはや「自分らしく」生きるということは、規範にさえなっていると言えるかもしれない。規範化してしまえば、「自分らしく」あることの快楽は消滅し、むしろ「自分らしさ」や「自分の好きなこと」の強調は苦痛に転化する可能性すらある。なぜなら、快楽とは「規範への侵犯にこそ宿るもの」（大澤 [2002:190]）であるのだから。「みんなが特別なOnly one」であるという歌詞への共感も、その兆候を示唆していると言えるかもしれない。

2) 「自分らしさ」を感じる時

①「何か」に一生懸命なとき

前項でみたように、「自分らしく」いることは、それほど簡単なことではないのかもしれない。

■表2-1 「自分らしさ」の不確かさ (vol.60から)

		(行%/実数)			
		状況によってでてくる自分というものは違う		自分がどんな人間かわからなくなることがある	
		肯定	否定	肯定	否定
自分には自分らしさというものがあると思う	肯定	80.7 (932)	19.3 (223)	63.5 (733)	36.5 (422)
	否定	84.9 (550)	15.1 (98)	76.0 (496)	24.0 (157)

肯定は「とても」＋「まあ」そう思う割合 否定は「あまり」＋「まったく」そう思わない割合

れない。本項では少し視点を変えて、高校生がどのようなときに「自分らしさ」を感じているのかをみてみることにしよう。

表2-2は、vol.60「高校生の自我像」(2000年)の「どんなときに一番『自分らしい』あるいは『自分はこれだ』とを感じるか」という質問に対する自由記述の結果をまとめたものである。最も多い回答は、「自分の好きなことに没頭しているとき」や「やりたいことに一生懸命になっているとき」であった。

ただし、「好きなことに没頭しているとき」という回答が、我々おとなが想定するほど、好きなことが一貫性を持ち、それに向けてひたむきに努力するといったものとは必ずしも言えないという点に注意する必要がある。むしろ、「おもしろいから、そうしたいから、そうすることが好きだから」というコンサマトリーな(即時充足的な)志向のあらわれと解釈の方がよいように思われる。というのは、「好きなこと」の具体的な記述に比べ、抽象的な表現が多用されており、それが何を入れてもよい空白として使用されているからである。「何かに一生懸命なとき」という表記の多さもこのことを示唆している⁵⁾。

宮台真司[2000]の言葉を借りれば、何かへの没入で得られる「強度」によって(そのことが将来や社会的に役立つというような「意味」によってではなく)、「自分らしさ」を確認していると言えるかもしれない。

②「泣き」を求める

しかし、常に一生懸命になる「何か」がみつかるとは限らない。そのような若者は、どのようにして日々のなかで自己を確認しているのだろうか。次に、その可能性の1つに目を向けてみたい。

「泣きながら一気に読みました。」

ご存じの方も多いかもしれないが、これは片山恭一の小説『世界の中心で、愛をさけぶ』の帯につけられた女優の柴崎コウのコピーである。この小説は300万部以上もの売り上げを記録し、映画化やドラマ化などもされ、2004年にはセカチュウ現象と呼ばれるブームまで巻き起こした。

筆者に小説の善し悪しを評価する能力があるわけではないが、しばしば指摘されるように、その設定は美少女が白血病に冒されるという非常にベタなものである。それでは、なぜこの小説が売れたのだろうか。要因を確定することはできないが、その1つは、「確実に泣ける」ということが、このコピーによって示されたことにあるのかもしれない。

精神科医の香山リカ[2002]は、このような「泣ける物語」を求めて本を読み、映画をみるというような傾向が若者を中心に広がっていることを自らの臨床経験から指摘している。ささいな事柄でも条件反射のごとく「泣く」ことによって自己を確認しているというのだ。このような傾向が若者一般に広まってい

■表2-2 自分らしさを感じるとき (vol.60から)

	件数	記入者 (N=1219) における割合 (%)
「自分の好きなことに没頭しているとき」 「やりたいことに一生懸命になっているとき」	229	18.8
「友だちと一緒にいるとき」「友だちと話しているとき」「友だちと遊んでいるとき」	164	13.5
「部活動をしているとき」	73	6.0
「自分の考え方や行動が他人と違っていたとき」	60	4.9

注) 重複した回答あり。

るのかどうかは留保が必要である。青少年研究会が行った調査では、「感動して泣くためにビデオやマンガなどのあるシーンをくり返しみる」ことがあると回答したのは約25%であった（高橋 [2004]）。

しかし、香山に限らず、このような傾向を指摘する議論は多くみられる。例えば、近年の若者論で注目されている東浩紀 [2001] の「動物化」という議論も重なり合う部分がある。「動物化」した若者とは、「萌え」⁶⁾という言葉に象徴されるように、他者を必要とせず瞬時に機械的に欲求を満たす若者たちである。刺激に対しては条件反射的ではあるが、それを用いる水準ではコントロールされた感情の消費である点は共通する。

岩木秀夫 [2003] は、このような若者を企業にとって都合のよい感情消費者であると指摘し、「ゆとり教育」がそのような消費者を生みだすことを危惧している。そのような危惧を全面的に否定するつもりはない。しかし、輝かしい未来を期待できない「終わり無き日常」の中で生きる1つの術として、このような行動を捉えることも可能のように思われる。一生懸命になる「何か」が見いだせない場合、そのような感情消費が、たとえつかの間であったとしても、自己の確認を可能にするある種の「強度」をもたらしているかもしれないからである。

3) Number one でも Only oneでもなく

① 不安・不満を投射するおとなたち

これまでみてきた高校生の自己をめぐる意識からすると、「アイデンティティという確固とした自己を確立できず、いつまでもおとなになれないイマドキの若者たち」という若者バッシングに共通した見方は正しいようにみえる。確かに、高校生の自分や自分らしさというものは、それへの強いこだわりがみられる一方で、非常に不確かな側面を持っている。

しかしながらこのような見方は、やはり半分は正しくない。なぜなら、問題とされるパラサイト・シングルや、フリーター、少年犯罪

の凶悪化など、そのような批判自体が必ずしも実態を捉えていない場合が多いからである。

最も典型的なのは、少年犯罪の凶悪化という批判である。多くの論者が指摘するように、長期的なスパンでみた場合、少年の凶悪犯罪は増加していない（例えば、広田 [1999]、パオロ・マッツァリーノ [2004]⁷⁾）。パラサイト・シングルにしても同様である。国立社会保障・人口問題研究所 [2001] は、自らの生活を楽しむ一方で社会保障など社会的責任に無頓着であるという懸念があてはまらないことを明らかにしている。また、苦米地伸 [2004] によれば、「親と同居し、リッチな生活をする未婚者」（山田 [1999: 21]）という意味でのパラサイト・シングルの存在自体が幻に近いのだ⁸⁾。フリーターやニートの問題にしても、それを単に若者の就業意識の低下など若者の問題とみなすことが不適切なのは、様々な論者が指摘しているところである（例えば、玄田 [2002]、中西 [2004]）。

若者に問題がないとは言えない。しかし、センセーショナルな報道などに影響を受けた実態を無視した過度なバッシングは、我々おとなたちにとって自らの社会への不満や将来への不安に対するある種のカタルシスにはなっても、問題の解決に結びつくとは思えない。

② アイデンティティというリスクー〈自立〉の新しい形へ

輝かしい未来を描くことが難しい、この成熟した社会では、「好きなこと」に夢中になるということを、教育は利用せざるを得ないかもしれない。学力を保障するためにも、「自分の好きなことを大切にする」というような若者の意識を利用して、動機づけを調達するシステムは必要であろう。ただしその際にも、新自由主義的な政策が前提とするような「強い個人」を想定することは多くの問題を生みだす可能性がある。

アイデンティティという概念を定式化したE.H.エリクソンの言葉もこのことを示唆している。エリクソンによれば、アイデンティ

ティは「今も生きている過去の現実性と、前途有望な未来の現実性を連結させるもの」(Erikson [1968=1982:441])である。しかし、今や15~24歳の若者の完全失業率は10%を超え、非正規雇用比率は2割を超えている。非正規雇用の1つの典型とも言えるフリーターの平均年収は首都圏でも150万円程度である(リクルート・ワークス研究所 [2001])。中西 [2004] も指摘するように、そのような水準では経済的に「自立」して、通常の生活を維持することは困難である。企業の非正規雇用の活用が拡大していくなか、「前途有望な未来」など描きようもない若者は少なくない。

そもそも我々おとなもアイデンティティと呼ばれるような強い自己を保持していると言えるのであろうか。もしそう言えるとしたら、輝かしい未来が約束されているように思われた特殊な時代を生きたおかげなのかもしれない。あるいは、リストラされた中高年のアイデンティティの危機からすれば、企業など組織に依存することによってそう思えただけなのかもしれない。

社会学的にみても、現在の社会で確固とした自己を保持することは困難である。アンソニー・ギデンズが指摘するように、現代社会では我々のいかなる知や生き方の基準も常に改訂にさらされている(Giddens [1991])。その中で、自己は絶えず選り直し再構成されていく一連の過程として捉えられる。それは、自己が偶発的・恣意的なものとして、つまり常に別様なものとしての可能性を持つということでもある。アイデンティティの確立、それは近代の夢だったのかもしれない。

このような中で、アイデンティティを確立せよと過度に強調することは、「自分らしさを追求すること自体が、逆に、自分らしさを確定することを妨げる」ような「自分らしさのパラドクス」(芳賀 [1999])という事態をもたらす可能性もある。そして、それは岩木 [2004] が危惧していた感情消費にみられる権力(環境管理型権力)の台頭を導く可能性すらある。ジョージ・リッツァ [1996=1999:

172] が指摘するファーストフード店の椅子のように、その堅さによって行動を制御されるのと、自己の確定を心理テストに全面的に委ねるのに、それほど隔たりはない。

ライフコースの多様化はしばしば指摘されることだが、理念水準での多様化の形態とその実態(やそれを支える仕組み)との解離は深刻である。そして、一度選択されたものが変更されたり変更せざるを得なくなったりすることへの配慮も不十分である。そのような中では、自立ということの意味も問い直される必要がある。新自由主義的な改革が求めるような「強い個人」を前提とするのではなく、組織に依存した「自立」を否定しつつも、他者への依存(他者との共存)を認める必要があろう。また、一度達成されれば永遠に続くというようなものではなく、自己と同様に常に暫定的なものとして捉えていくべきかもしれない。

③ 平凡という第三の道

ナンバーワンであることを目指す若者を否定するつもりもないし、オンリーワンであろうとする若者を否定するつもりもない。しかしそれらと同じく、ナンバーワンでもオンリーワンでもなく平凡であることも否定されるべきではないだろう。「自分らしく」ある自由を手放すことなく、そのような自由からある程度あるいは時として自由になることを可能にするような余地を残しておくことも不可能ではないだろう。

平凡であることが「負け組」であるかのように恐怖を煽らなければ、活力のある社会は実現できないのだろうか。特別個性的な自分でもなくても、平凡であることも許される社会。好きで好きでしょうがない仕事でなくても、その仕事にほどほどに(他のすべての生活を犠牲にするのではなく)一生懸命取り組んでいれば評価されるような社会。そんな活力ある社会を描いていくことは不可能なのだろうか。多くの平凡な我々おとなたちにはそうした社会を築いていく責任があるように思われる。若者にアイデンティティの確立を求める前に。

【注】

- 1) 本来であれば、このこと自体検証すべきところであるが、紙幅の関係からここでは省略する。岩田 [2005a] を参照。
- 2) このような傾向は、NHK『クローズアップ現代』『自分を歌う少女たち』(2001年1月放映)の中でも取り上げられた。ただし、近年は、若者からの支持の強さも、このような傾向も弱まっている部分があるかもしれない。
- 3) 『13歳のハローワーク』には、何も好きなことがないということを想定した章がある。また、見つけるべきものは、「本当の自分自身、ではない。そんなわけのわからないものではない」(村上 [2003:375])とされている。この手の本ではあまりみられない「ホステス」や「ホスト」のような職業を取り上げているなど、非常に興味深い点が多い。
- 4) 本稿では言及できなかったが、この「自分らしさ」の不確かさをアイデンティティの未確立や自己拡散という観点のみから理解するのは不適切である。自己の多元化という観点をふまえる必要がある。この点については、岩田 [2005b] や、「モノグラフ・高校生」vol.60の第4章、vol.65の第5章を参照のこと。
- 5) 詳細な分析については、「モノグラフ・高校生」vol.60の第4章を参照のこと。
- 6) ある対象に、条件反射のごとく、魅了され、激しく心が動くような偏愛をさす。当初は主に漫画、アニメ、ゲームのキャラクターやアイドルが持つ外見や行動上の特徴など、かわいらしいもの、いじらしいものに対し用いられていたが、現在では広範囲に用いられるようになってきている。
- 7) また、少年の凶悪犯罪の中で唯一短期的には増加傾向が顕著な強盗も、その基準に着目すると、凶悪化を単純に支持するものとはいえないことがわかる(鮎川 [2001]、土井 [2004])。
- 8) パラサイト・シングルが問題であるという姿勢に変わりのないものの、その造語者である山田昌弘 [2004] ですら、「貧乏パラサイト」が主流になったと指摘している。

【参考文献】

- 鮎川 潤 2001 『少年犯罪—ほんとうに多発化・凶悪化しているのか—』平凡社新書
 東 浩紀 2001 『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会—』講談社現代新書
 東浩紀・大澤真幸 2003 『自由を考える—9・11以降の現代思想—』日本放送出版協会
 土井隆義 2004 『<非行少年>の消滅—個性神話と少年犯罪—』信山社出版
 Erikson, Erik H. 1968 *Identity: youth and crisis*, W. W. Norton & Company, Inc.=1973 (→1982) 岩瀬庸理訳『アイデンティティ—青年と危機—』金沢文庫
 玄田有史 2001 『仕事のなかの曖昧な不安—揺れる若年の現在—』中央公論新社
 Giddens, Anthony 1991 *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press.
 広田照幸 1999 『日本人のしつけは衰退したか—「教育する家族」のゆくえ—』講談社現代新書
 岩木秀夫 2004 『ゆとり教育から個性浪費社会へ』ちくま新書
 岩田 考 2005a 「若者のアイデンティティはどう変わったか」浅野智彦編『検証・若者論』(仮題)勁草書房(6月刊行予定)
 2005b 「多元化する自己のコミュニケーション」岩田考ほか編『みんなぼっちの世界2』(仮題)恒星社厚生閣(7月刊行予定)
 片山恭一 2001 『世界の中心で、愛をさけぶ』小学館
 香山リカ 2002 『若者の法則』岩波新書
 国立社会保障・人口問題研究所 2001 『世帯内単身者に関する実態調査報告書』
 宮台真司 2000 『自由な新世紀・不自由なあなた』メディアファクトリー
 村上 龍 2003 『13歳のハローワーク』幻冬舎
 中西新太郎 2004 『若者たちに何が起きているのか』花伝社
 大澤真幸 2002 「自由な労働者？」金子勝・大澤真幸 2002 『共同取材 見たくない思想的現実を見る』岩波書店
 パオロ・マッツァリーノ 2004 『反社会学講座』イースト・プレス
 リクルート・ワークス研究所 2001 『非典型雇用労働者調査2001【フリーター編】』
 Ritzer, George 1996 *The McDonaldization of society*, Pine Forge Press.=1999 正岡寛司監訳『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部
 高橋勇悦(研究代表) 2004 『都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析』平成13・14・15年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))研究成果報告書
 苦米地伸 2004 「『パラサイト・シングル』とは誰のことか？」高橋勇悦(研究代表)『都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析』平成13・14・15年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))研究成果報告書
 山田昌弘 1999 『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書
 2004 『パラサイト社会のゆくえ—データで読み解く日本の家族—』ちくま新書

2. 「自分らしくない自分」と「自分らしい自分」の狭間

1) はじめに

最近、柴田淳というシンガーソングライターがお気に入りだ。彼女の歌の歌詞は、私の考え方や行動のしかたそのまま、まるで頭の中やふだんの生活の様子を覗かれているようだ。これまでお気に入りのシンガーソングライターといえば、「こうなりたい!」とか「こんなのもありか!」と、自分の考え方や生き方の方向性を示してくれるような歌を歌う人ばかりだったが、柴田淳の歌は、「あ、こうしなかったんだ」「こんな気持ちだったんだ」「自分はこうだったんだ」と、私自身の言葉ではうまく表現できない、私自身の今の考え方や生き方を、それがどんな気持ちのときであれ、そのとおりに表現してくれる。だから、聴いているとなんだか自分らしくいられるようでとても心地よい。

ところで、30代の私ですら、人の歌の言葉を借りてようやく自分の考え方や行動のしかたを自覚したり表現したりしているというのに、今の高校生は、「自らの意見や考えをもち、論理的に表現したり、議論したりする力、社会に対する認識を深め、自己の在り方生き方について考え、主体的、自律的に学ぶ力を身につけること」(文部省(1999) p.134)、つまり、社会とのかかわりのなかでのアイデンティティの確立と「個性」や「自分らしさ」を表現することを、10代後半にしてすでに強く求められている。

このようなことが求められる背景には、高校生はアイデンティティを確立していないとか、自分で表現する力がないといった見方があるのだろう。だが、そういった見方は本当に正しいのだろうか。いや、それ以前におとなたちが高校生に確立するように望むアイデンティティや人間像には、「自ら」「自己」「個性」「自分らしさ」などと言っておきながら、一定の範囲に収まるある種の決まった型を無自覚のうちに想定してしまっていない

だろうか。

本節では、「青年としての高校生」がどのように自分自身と向き合っているのかを、「表現すること」と「他者との関係の取り方」の2つの観点から考えていきたい。

2) 音楽による自己表現

音楽は、自分を表現する代表的な方法の1つだ。高校生の音楽行動や音楽に対する意識を調査したvol.63「電子メディアの中の高校生」(2001年)によれば、「自由に楽器を演奏する」21.5%（「毎日のように十よく」する割合、以下同様）、「曲をつくる」3.5%と、主体的・創造的な音楽行動の頻度は低いが、「家でCDなどを聴く」80.4%、「音楽番組を聴く」69.5%と、高校生のほとんどが日常的に音楽鑑賞をしている。確かに音楽鑑賞には「“ながら聴き”をする」44.5%も含まれるから、一見受動的であり創造的でない音楽行動にみえるかもしれない【vol.63 図3-3】。しかし、よく考えれば、誰もが芸術家やスポーツ選手のように自分を表現する力を豊かに持っているわけではない。私たちは、彼らが生み出す音楽や絵画や文章やパフォーマンスを借りて、自分の考え方や行動のしかたを表現するのがふつうだ。その借り方にこそ、高校生の主体的・創造的な考え方や行動のしかたがあらわれていると言えないだろうか。

では、高校生にとって音楽とはどのようなものなのだろうか。「音楽がなくなってしまうたらどうなると思うか」を尋ねた結果が図2-3である。「とても十やや」そう思う割合が高い順に、「感性がなくなる」65.3%、「やる気がなくなる」63.2%、「ストレスがたまる」61.9%となっていて、高い支持を得た項目はないものの、「あまり変わらない」に否定的な回答が7割を超えていることから、いろいろなことを感じ取ったり気持ちを高めたりストレスを解消したりと、高校生は様々

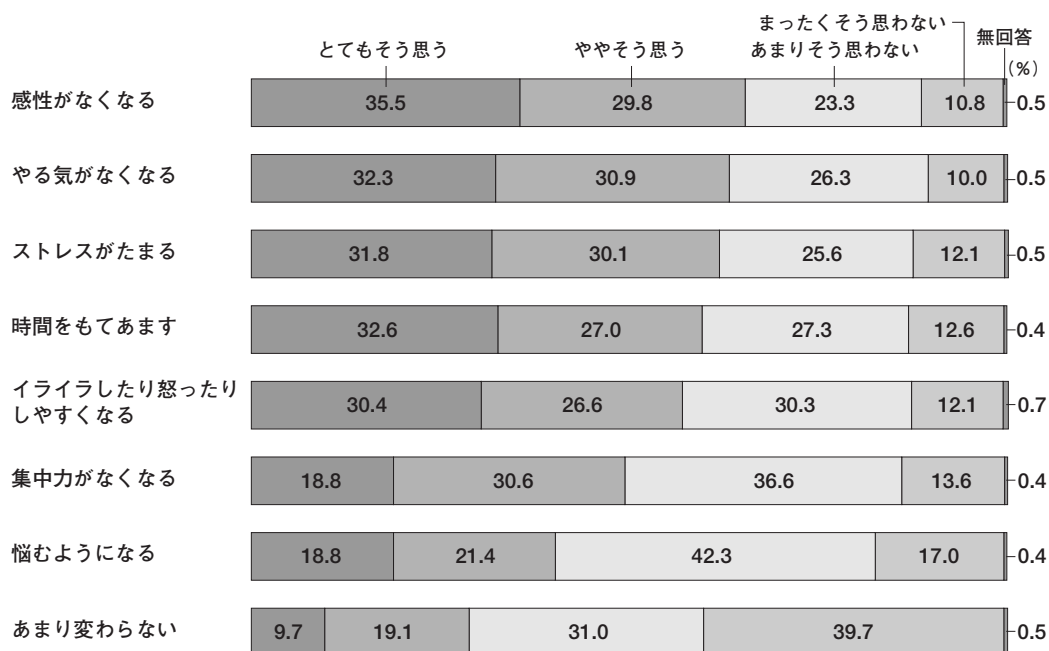
な感情表現を音楽に委ねているようすがうかがえる。

その一方で、「どんなときに音楽を聴きたくなったり聴きたくなかったりするのか」を尋ねたところ、「音楽を聴きたくない」割合が高かったのは、「集中しているとき」の45.6%に続いて、「疲れて休みたいとき」32.6%、「悩んでいるとき」26.2%だった【vol.63 図3-8】。疲れたり悩んだりといった負の感

情は、高校生にとって音楽をもってしても支えきれない感情なのだろうか。またはその感情を表現するのにぴったりの音楽がまだ見つかっていないのだろうか。

だが、いずれにせよ、この結果から高校生は負の感情を表現できないと批判するのは簡単だが、表現できるほどの感情しか想定されていないとしたら、それはあまりにも予定調和的すぎる人間像のように思える。

■図2-3 音楽がなくなってしまうらどうなると思うか (vol.63 図3-9)



3) ヒーローという存在

芸術家やスポーツ選手は、私たちが自身ではうまく表現できない考え方や行動のしかたを音楽や絵画や文章やパフォーマンスで代弁してくれる存在だ。高校生の生き方のモデルやあこがれの存在＝ヒーローについて調査したvol.44「高校生のヒーロー観」（1995年）によれば、ヒーローと呼べる人が「いる」者は44.2%、「いない」者が50.5%だった【vol.44 図3-1】。

では、なぜヒーローと呼べる存在のいる高校生が半数に満たないのだろうか。彼らのヒーロー像やヒーローとのかかわり方をみてみよう。高校生のみるヒーロー像は、「世代をこえて存在するもの」43.2%、「自分たちの世代に共通のもの」20.0%、「共通の趣味・関心を持つ人同士のもの」18.5%、「自分1人だけのもの」15.7%などとなっている【vol.44 巻末集計表】。また、ヒーロー像別にヒーローとのかかわり方についてみたのが表2-3である。どのヒーロー像でも「心の中だけであこがれている」かかわり方が4割を超えている。ヒーローを「共通の趣味・関心を持つ人同士のもの」とみる高校生は「その人についての情報を集める」「服装や言葉づかいなどをまねる」かかわり方を、「自分1人だけのもの」とみる高校生は「その人に直接会ったり近づく」「生き方そのものをまねる」か

かわり方をとる傾向が強い。趣味や関心をもとにしたヒーローは共通の趣味・関心を持つ人同士で情報収集し共有され、自分1人だけのヒーローとは1対1の直接的な深い関係をとろうとしている。

このように、高校生にとってヒーローは、世代をこえて存在する近づきがたい特別なものとしてだけでなく、多様な捉えられ方をされていて、日常生活の様々な場面にあらわれ、自分の表現を代弁する役割を担う存在になっている。ということは、半数以上の高校生が確固たる自分の日常生活や表現方法を見つけていないからヒーローもいないということなのだろうか。確かに、友人関係とヒーロー観の関連をみてみると、ヒーローがいる方がいないよりも（69.3%＞63.4%）、ヒーローを必要とする方が必要としないよりも（69.2%＞60.6%）数ポイントほど友人関係が良好だ（「とても＋わりと」うまくいっている割合）という【vol.44 表4-2・表4-5】。

だが、ここからヒーローを持たない高校生の人間関係の不十分さを指摘するのは簡単だが、その背後には、ヒーローにも友人にも頼らない自己は望ましくなく、自己を確立していく過程で豊かな人間関係の上に共有される人間像＝ヒーローを持つことが望ましいという考え方が透けてみえてならない。

■表2-3 ヒーローとのかかわり方×ヒーロー像（vol.44 表3-5）

	（％）			
	自分1人だけのもの	共通の趣味・関心を持つ人同士のもの	自分たちの世代に共通のもの	世代をこえて存在するもの
心の中だけであこがれている	47.8	45.2	44.4	43.2
その人についての情報を集める	32.0	46.9	29.7	28.9
服装や言葉づかいなどをまねる	15.3	19.2	10.8	8.6
その人に直接会ったり近づく	30.5	22.6	17.0	15.4
生き方そのものをまねる	28.1	15.9	14.3	17.7

「とても」＋「わりと」そうの割合
—— は最大値

4) 友人関係の持ち方

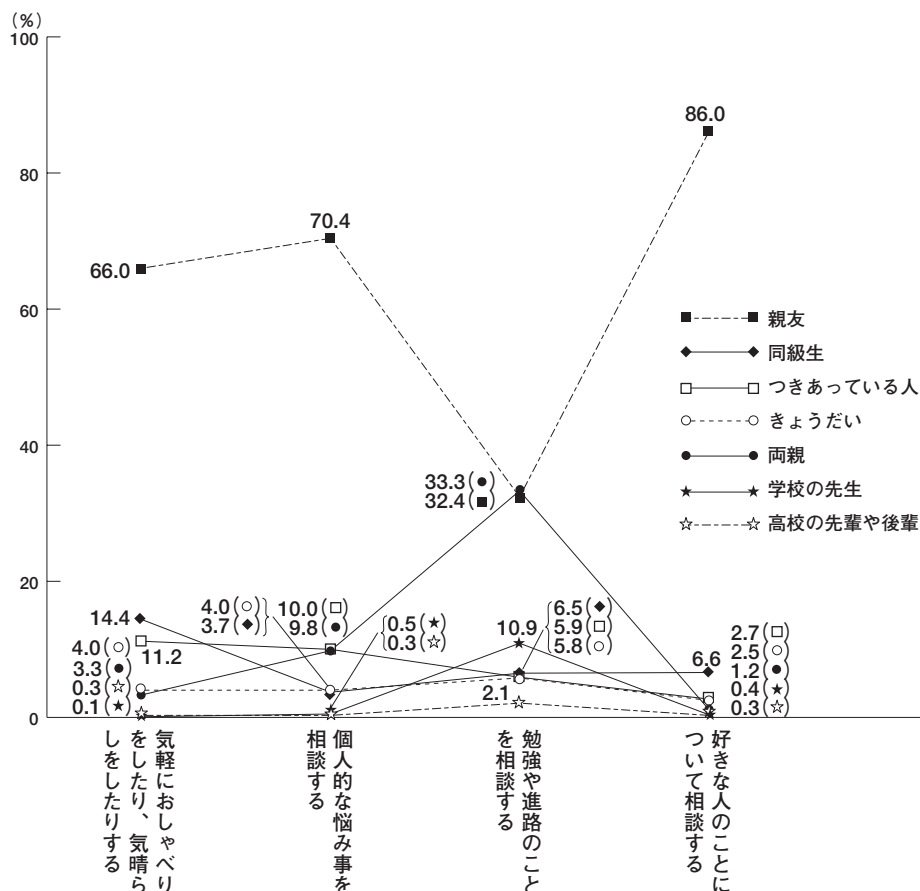
私たちが自己を認識するとき、それは他者との関係の上で成り立つことが多い。その他者は家族やヒーローだったりもするが、高校生にとって最も重要な他者は友人だ。高校生の人間関係の持ち方について調査したvol.56「高校生の他者感覚」(1999年)によれば、様々な他者の中で友人グループが自分への理解が最もあり(「非常に十まあ」わかっている割合85.7%)、最も親しみがある(「とても十やや」親しみがある割合93.6%)相手である【vol.56 表2-12・表2-13】。

その友人と、彼らは「テレビの話」78.5%、「異性の話」78.5%、「マンガ・雑誌の話」

73.6%、「趣味の話」71.0%をし、「放課後や休日にも会う」79.8%、「ノートやCDなど、物の貸し借りをする」86.3%などの一方で、「個人的な悩み」59.5%や「お互いの家族の話」38.3%などの内面に立ち入った話はあまりしない関係を築いている【vol.56 表2-8・表2-10】。

次に、友人の数と親友の数を比べてみると、友人が1桁しかないのは17.2%にすぎず、30.0%が50人以上いる一方、親友が2桁以上いるのはわずか8.0%で、1人が9.3%、2人が17.4%、3人が19.0%、親友がいないのは7.1%だった。友人は何十人もいるが親友と呼べるのは数人だけと、親友と友人はしっかり区

■図2-4 誰を一番頼りにしたいか (vol.56 図4-3)



別されているようだ【vol.56 図4-5】。

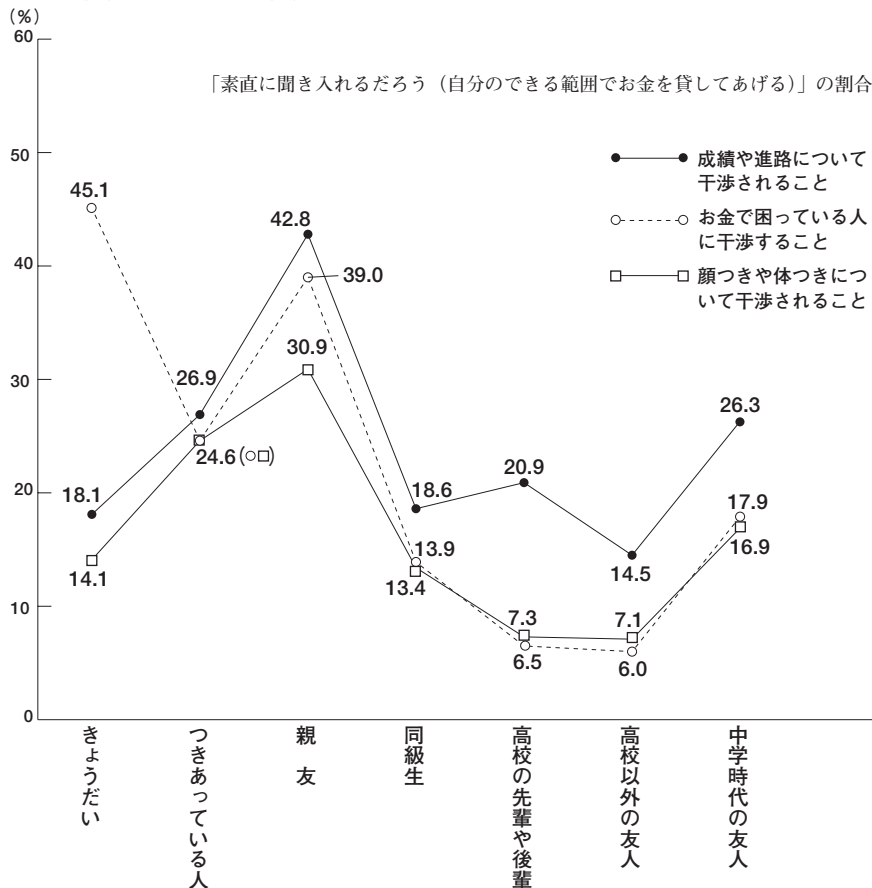
では、その友情の区別の基準は何だろうか。「どんなことができれば『親友』か」を尋ねたところ、高い順に「本当の自分を見せることができること」71.5%、「お互いに悩みを話せること」69.1%、「気が合うこと」68.8%が親友の条件だった。親友とは、ふつうの友人には見せない内面を見せて、頼ったり頼られたりできる関係だと考えているようだ【vol.56 図4-6】。

ところが、実際には図2-4・図2-5のように、確かに親友は他のどんな他者よりも頼ったり頼られたりしたい存在だし、干渉すること・されることへの許容度も高いが、そ

れでも「個人的な悩み事を相談する」のは70.4%、干渉への許容度は3～4割にとどまっている。彼らは本当の親友をまだ見つけられていないということだろうか。

そしてこの結果を、例えば携帯電話の普及と絡めて、今の高校生は最も重要な他者である親友とですら内面に立ち入らない希薄な人間関係しか持てなくなっていると批判することもできるだろう。しかし、対面状況でお互いの悩みを涙ながらに全部見せ合って、最後は夕日に向かってみんなで走れば全部解決するような人間関係が、本当に濃密な関係だとは限らない。

■図2-5 干渉すること・干渉されることへの許容度 (vol.56 図4-4)



5) 悩みの相談相手と自己

アイデンティティを確立していく高校生の時期、彼らは様々な悩みを抱え、それらを解決しながら自分探しをしている。高校生の悩みや自分探しなどについて調査したvol.60「高校生の自我像」によれば、彼らの悩みは「軽い悩み、悩みを抱えることが心地よいもの」と、「いろいろなことが絡み合って一層深刻な抱えきれない悩みとなつて深みにはまっていって種類の高い悩み」の2つがあるという。

では、その悩みを彼らはどうやって解決しているのだろうか。友だち関係、容姿やスタイル、口臭や体のにおい、成績や進路、将来の目的など不安や悩みを誰に相談するかを尋ねたところ、ほとんどの項目で圧倒的に「友だち」に相談する割合が高かった。だが、「自分の口臭や体のにおいが気になるとき」と「生きる目的が見つからない」は「誰にも相

談しない」割合が一番高かった【vol.60 表6－8】。さらに、表2－4から「今の自分が好きか」という自己受容の高低と悩みの相談相手との関係をみてみよう。自己受容が高い（今の自分が「とても好き」）高校生は、ほとんどの項目で「友だち」に相談する割合が一番高く、またどの項目でも自己受容の低い（今の自分が「まったく好きでない」）高校生よりも10ポイント内外「友だち」に相談する割合が上回っている。一方、自己受容の低い高校生は、半分以上の項目、それも自分の進路や将来にかかわることといった「重い悩み」で「誰にも相談しない」割合が一番高く、またどの項目でも自己受容の高い高校生よりも10～25ポイントほど「誰にも相談しない」割合が上回っている。友だちに相談することで悩みが解決できる自己受容の高い高校生がいる一方、自己受容の低い高校生は「重

■表2－4 不安や悩みを誰に相談するか × 今の自分が好きか (vol.60 表6－10)

	今の自分			とても好き			まったく好きでない		
	相談相手	友だち	親	誰にも相談しない	友だち	親	誰にも相談しない		
友だちとのトラブル		<u>77.8</u>	5.4	13.2	<u>64.4</u>	2.4	26.0		
友だちからいじめられたとき		<u>51.8</u>	15.1	19.9	38.6	10.6	<u>42.5</u>		
異性の友だちができない		<u>64.1</u>	0.6	28.1	<u>50.2</u>	1.0	44.9		
異性の体への興味・関心		<u>69.9</u>	1.2	24.7	<u>51.2</u>	1.0	41.5		
自分の髪型や服装が似合わない		<u>57.5</u>	8.4	24.6	<u>54.6</u>	5.3	29.5		
自分の容姿やスタイルやダイエット		<u>51.8</u>	13.9	24.7	<u>44.7</u>	6.7	39.4		
自分の口臭や体のにおいが気になるとき		26.1	18.2	<u>44.8</u>	16.3	16.8	<u>55.3</u>		
やりがいのある打ち込めるものが欲しい		<u>55.7</u>	10.2	23.4	38.3	5.8	<u>48.1</u>		
生きる目的が見つからない		<u>41.6</u>	14.5	32.5	33.8	8.6	<u>49.8</u>		
成績が落ちた		<u>43.7</u>	21.6	20.4	32.7	13.9	<u>42.8</u>		
将来、何をしたらいいのか迷う		32.9	<u>37.1</u>	16.2	29.6	23.8	<u>31.6</u>		
親の希望と異なる進路選択を考えると		<u>39.2</u>	18.7	18.7	33.6	18.6	<u>43.4</u>		

(%)

——は最大値

い悩み」を誰にも相談することなく、ますます深みにはまっていつているのだろうか。

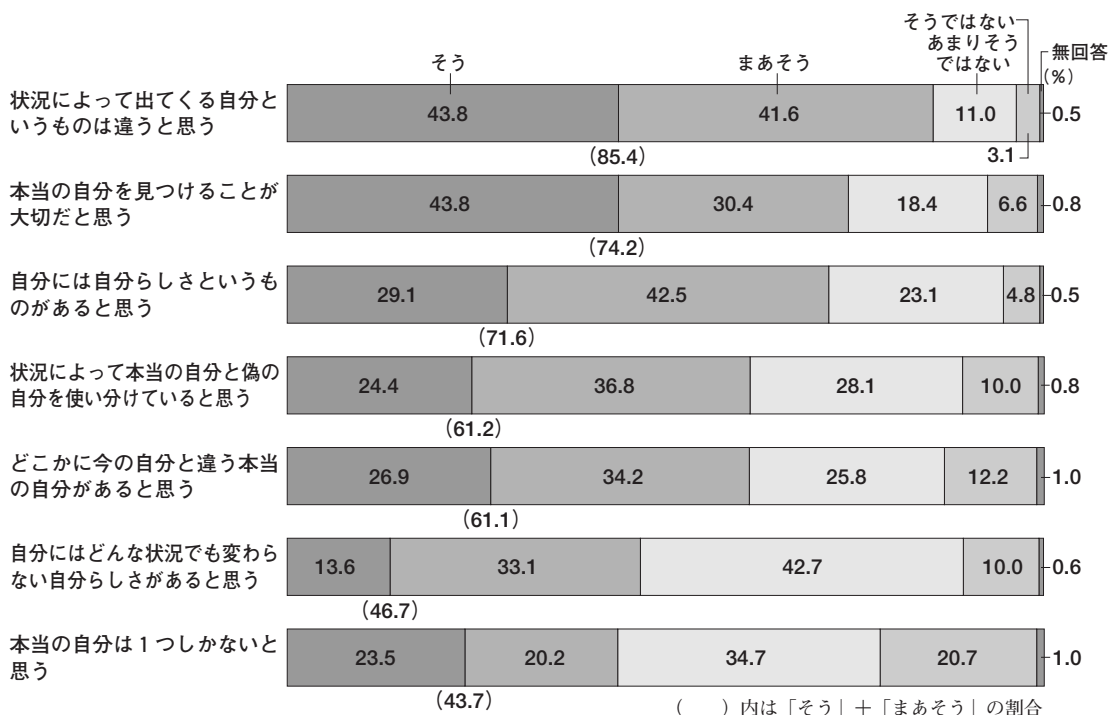
高校生が、抱える悩みを誰かと相談しながら解決し、自分探しをしていくものと考えられているならば、悩みを誰にも相談しないのは望ましくなく、アイデンティティの確立を妨げていることになるかもしれない。しかし、アイデンティティが確立すると悩むことがなくなるわけではないし、そもそも誰にも相談できない悩みを持っていない人などいないのではないか。むしろ悩みを誰かに相談するときは、自分の中である程度の結論をつけた後ということがよくある。そう考えると、自己受容が低く誰にも相談できない高校生の方が、ずっとずっと深く自分探しをしているのかもしれない。

6) まとめ

このようにみえてくると、今までおとなたちは、どこかで一定の範囲に収まるある種の決まった型の望ましいアイデンティティや人間像を想定して、それと実際の高校生との距離を測って、彼らのことをアイデンティティが確立していないとか、自分で表現する力を持っていないと言ってきたように思えてくる。そのような想定のもとで求められている「自ら」「自己」「個性」「自分らしさ」とは一体何なのだろうか。

vol.65「まじめさの構造」(2002年)では、図2-6のように「自分」や「自分らしさ」について尋ねている。彼らの7割(「そう+まあそう」の割合)が「本当の自分を見つけることが大切だと思う」「自分には自分らしさ

■図2-6 「自分」や「自分らしさ」(vol.65 図5-4)



さというものがあると思う」と答えている一方で、「状況によって出てくる自分というものは違うと思う」者は8割を超え、「本当の自分は1つしかないと思う」者は4割強にとどまっている。さらに「自分には自分らしさというものがあると思う」と「自分にはどんな状況でも変わらない自分らしさがあると思う」を両方とも肯定する高校生は4割と、非一貫した「自分らしさ」を持っていたり、自分らしさを持てていなかったりという高校生が半数に上っている【vol.65 表5-7】。

だからこそ、高校生の時期からアイデンティティを確立したり自分で表現する力をつけたりする努力をしなければいけないと考えることもできよう。しかし、むしろこの結果は、おとなたちから望まれるアイデンティティの持ち方や自分で表現する方法と、個々の場面

で自身が感じる「自分らしさ」や表現する方法との狭間で高校生たちがとまどっている姿のようにみえる。だとしたら、高校生たちは、アイデンティティの確立と自分で表現する力の獲得を目指せば目指すほど、「自分らしくない自分」を表現し、「自分らしくない自分」で他者とかかわり、「自分らしい自分」を見つけられない自分にとまどい、自分は自分をやっていていいのかと悩み、アイデンティティの確立と自分で表現する力の獲得から遠のいていくのではないだろうか。彼らが「自分らしい自分」を希求し、そこにたどり着けるようにするには、おとなたちが彼らに望むことを改めて考え直すと同時に、おとなたち自身が「自分らしい自分」にたどり着けているのか、振り返ってみる必要があるのではないだろうか。

【引用文献】

文部省（1999）『高等学校学習指導要領解説 総則編』東山書房

※冊子版においては、関連する歌詞を引用している部分があるが、著作権の問題によりウェブ版では割愛する。

3

社会の中の高校生

大野道夫(1節)・浜島幸司(2節)

1. 「戦後社会」の定着と変貌

1990年代の高校生は、戦後生まれの第1世代＝「団塊の世代」の子どもたちにあたる、「団塊ジュニア」の世代といえよう。また当時の社会はバブル経済が崩壊し、会社、学校などの戦後社会が形成した様々なものが問い直されていた。したがってこの節では、その「戦後社会」の高校生たちへの定着と変貌についてみていくことにしたい。

1) 「戦後民主主義」の定着と変貌

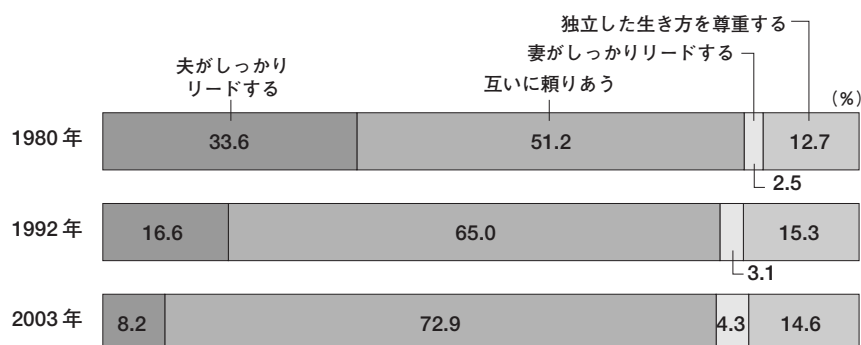
① 平和主義、男女平等などは定着

まず戦後も二世代を経て、「戦後民主主義」はそれなりに定着している。例えば、その平

和主義をみると、「戦争をしない」に賛成（「賛成＋どちらかといえば賛成」の割合）が87.4%であった。また戦争から連想することについての自由回答でも、「死」「反対」「こわい」などの否定的イメージが65.6%で、「参加したい」「時には必要」などの肯定的イメージは0.5%であった（その他に「アメリカ」「第2次大戦」「原爆」などの自由回答があった【vol.69 p.48】）。

また男女平等についても、図3-1のように、結婚後の夫婦のかたちは「互いに頼りあう」という男女観の広がりがみられる。

■図3-1 結婚後の夫婦のかたち（vol.70 図4-2から）



② 生徒会へは2割弱が積極的に参加

ただし、高校生の身近な「社会参加」を「かなり＋やや」やっている割合でみると、「生徒会活動への参加」は2割弱（17.0％）で、「文化祭などの学校行事への参加」39.9％などと比べると少なくなっている。また「クラス内の話し合いへの参加」も2割弱（19.8％）である【vol.47 図4・表8】。

これらの学内やクラス内の「社会参加」が高校生にとって基本的に重要であるものの、次に現在の高校生の新しい「社会」との関係についてみることにしたい。

2) 新しい「社会」との関係

① 環境問題への関心が強い

現在の高校生のまわりには、新しい「社会」問題が起こっている。その1つとして環境問題をあげることができる。現在の環境問題の特徴は、1960年代の公害問題と比べると、加害者と被害者の関係が非常にあいまいになっているところにある。しかし、その一方で高校生が身近な生活の中で、環境問題へ「参加」できる、という特徴もある。

まず環境問題に対する行動を表3-1でみると、「学校の教室や施設の無駄な点灯は消すようにしている」「暑くてもクーラーの使用は控える」などの電気やクーラーのムダ使

いに対しては半数以上が、そして「分別用のカゴがなくても、ごみを分別して捨てるようにしている」については46.5％が行動している。

また社会全体のシステム化に対しても、「農薬を使った形がよく、安い野菜」19.1％よりも「有機農法の形が悪く、やや高い野菜」80.1％を、「マニュアル通りの対応しかしないが、便利なコンビニ」43.0％よりも「ときどき間違いがあったり時間がかかったりするが、店員と気軽に話せる店」56.4％、そして「ロボットのペット」8.3％よりも「動物のペット」90.9％などの、システム化、機械化されたものよりも、手触りのある、非システムなものを好む傾向がみられた【vol.71 表2-1】。

3) 電子メディアの「社会」

① 様々な場面での使い分け

また高校生がメッセージを受信し発信できる「社会」の1つとして、インターネットの電子メディアの「社会」をあげることができる。周知のようにインターネットは双方向性、匿名性、利便性のあるメディアとして青少年を中心に急速に普及し、一方で様々な社会的事件も起きている。

しかし、高校生に様々な場面でのメディア

■表3-1 ふだんの環境行動×学年・性（vol.71 表4-1）

	全体	学年別		性別	
		1年	2年	男子	女子
公園や街路樹などの季節の自然の変化が気になる	63.6	65.7	61.4	62.2	65.5
パソコン、携帯電話などのツールが使えないと不自由で困る	60.4	59.8	61.4	57.4	63.9
学校の教室や施設の無駄な点灯は消すようにしている	54.2	55.2	53.1	51.7	57.1
暑くてもクーラーの使用は控える	50.8	49.0	53.3	51.3	50.6
分別用のカゴがなくても、ごみを分別して捨てるようにしている	46.5	45.4	48.1	43.1	50.3
水道の水を飲むとき不安に思う	40.9	42.4	39.1	38.3	43.8
栄養バランスを考え、人工食品よりは自然食品を選択する	35.5	33.5	38.3	34.9	36.3
散歩やガーデニングなどで自然と直接ふれあう	19.6	18.7	20.7	18.1	21.2

「よく」＋「かなり」感じる（する）割合

の使い方についてきくと、表3-2にみられるように、「好きな人に告白する」「ケンカした友だちと仲直りする」ときは、「直接会って話す」（「告白」70.6%、「仲直り」53.1%）が圧倒的に多く、「PHSや携帯電話で話す」（「告白」7.1%、「仲直り」7.9%）、「PHSや携帯電話でメールを送る」（「告白」6.0%、「仲直り」19.2%）は少なくなっている。また

「友だちを遊びに誘う」ときも、「親しい友だち」の場合は「直接会って話す」34.8%が最も多いが、「あまり親しくない友だちを遊びに誘う」場合は「PHSや携帯電話でメールを送る」36.8%が最も多くなっている。このように多くの高校生は、電子メディアをそれぞれに使い分けているようである。

■表3-2 次のようなとき、どのような手段を使うか × 学年・性 (vol.63 巻末集計表)

(%)

		全体	性別		学年別	
			男子	女子	1年	2年
遊びに誘う 親しい友だちを	直接会って話す	34.8	33.5	37.2	32.4	38.4
	友だちに頼む	0.5	0.9	0.1	0.7	0.3
	PHSや携帯電話で話す	15.5	21.3	10.1	14.7	16.8
	家の電話で話す	15.8	17.3	14.9	16.6	15.6
	手紙を書く	0.6	0.6	0.6	0.7	0.5
	PHSや携帯電話でメールを送る	29.8	24.6	35.8	33.6	26.7
	パソコンでメールを送る	0.7	0.8	0.7	0.4	1.1
	その他	0.7	1.1	0.4	0.9	0.6
あまり親しくない友だちを遊びに誘う	直接会って話す	18.3	20.0	18.2	18.4	19.8
	友だちに頼む	15.2	20.4	11.2	15.5	16.1
	PHSや携帯電話で話す	8.6	12.5	5.5	9.2	8.7
	家の電話で話す	9.4	9.8	9.9	10.3	9.3
	手紙を書く	1.3	0.6	2.0	1.0	1.6
	PHSや携帯電話でメールを送る	36.8	29.3	47.0	40.0	36.4
	パソコンでメールを送る	1.0	0.3	1.7	1.0	0.9
	その他	5.6	7.1	4.6	4.6	7.1
好きな人に告白する	直接会って話す	70.6	75.5	74.0	72.8	76.8
	友だちに頼む	0.7	0.6	0.9	0.9	0.6
	PHSや携帯電話で話す	7.1	8.6	6.4	7.4	7.6
	家の電話で話す	3.0	3.3	3.1	3.2	3.2
	手紙を書く	2.9	1.9	4.4	3.3	2.9
	PHSや携帯電話でメールを送る	6.0	5.5	7.2	8.5	4.0
	パソコンでメールを送る	0.2	0.3	0.2	0.5	0.0
	その他	4.1	4.4	3.8	3.3	4.8
ケンカした友だちと仲直りする	直接会って話す	53.1	62.6	46.8	53.4	56.0
	友だちに頼む	1.4	2.5	0.5	1.6	1.3
	PHSや携帯電話で話す	7.9	9.2	7.1	8.7	7.5
	家の電話で話す	6.4	4.9	8.3	8.2	4.9
	手紙を書く	6.3	0.9	12.0	5.4	7.7
	PHSや携帯電話でメールを送る	19.2	16.5	23.0	20.4	19.1
	パソコンでメールを送る	0.7	0.6	0.8	0.7	0.6
	その他	2.1	2.8	1.7	1.5	3.0

② コミュニケーションの変化

またこのようなインターネットをはじめとしたメディアの広がりにより、高校生の中でコミュニケーションの変化がみられる。それは図3-2に示されるような、名前や属性から本音へ段階的にコミュニケーションが形成される「同心円モデル」から、恋愛などのある部分について、短期的に本音のコミュニケーションが形成される「即時モデル」への変化としてみられる。これらの変化は様々なハンドルネームを使つてのネット上でのコミュニケーションなど、すでに多くの高校生が行っていると思われる。

したがって、今後はインターネットという送信・受信段階では相手の顔も声もわからない新しいメディアの可能性と限界を学習するメディア・リテラシー教育がより一層重要になってくるだろう。

③ 受信・送信する身体・路上というメディア

高校生が、様々な情報を受信・発信する場合として考えた場合、路上や自身の身体も重要なメディアとなってきている。

まず路上については、表3-3に示されるように、現在でもそれなりに「恥の文化」はあるものの、「道や駅前の広場でもものを食べ

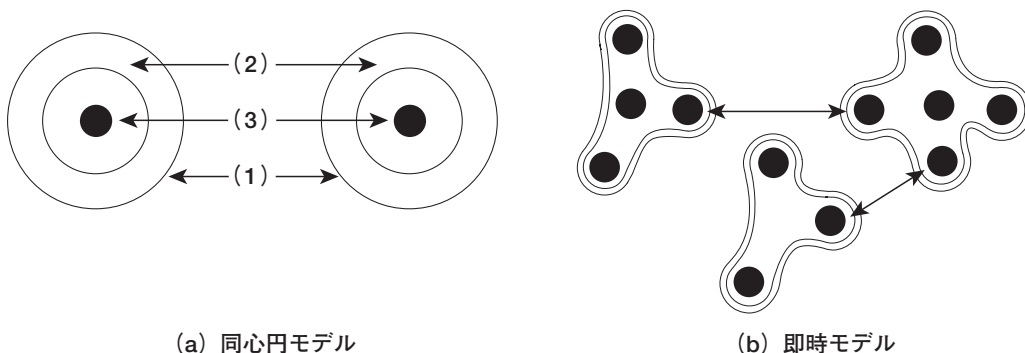
る」が「ぜんぜん恥ずかしくない」44.5%、「道や駅前の広場に座る」が「ぜんぜん恥ずかしくない」27.1%となっている。このような路上で見る・見られることに対する感覚の変化は、そこでバスケット、ダンス、パフォーマンスなどをするアメリカのストリートカルチャーの影響と思われる。

また自分の身体について「してみたいこと（とても十かなり）」も、「髪を染める」が36.6%、「ダイエットをする」が44.9%になっている。

このように自分の身体を「加工」の対象とし、見る・見られるものと考えられるのも、比較的新しい傾向と言えよう【vol.51 表2-11】。

このように彼・彼女らは、髪型、ボディ、Tシャツなどでそれなりの主張を行い、路上でのパフォーマンス、ライブ、フリーマーケットなどで他者と交流している。これらの身体・路上も、ちょうどかつての日本の家の縁側のように、情報を受信もでき、送信もでき、他者と交流するメディアとして、今後高校生と「社会」との接点を考えるにあたって重要になってくる、と言えるだろう（なお、ボランティア活動も重要な社会参加の場だが、これについては2節での考察にゆずりたい）。

■図3-2 親密さの2つの模式図 (vol.63 図2-4)



注) この模式図は、2001年6月30日に大妻女子大学で行われた研究会において、浅野智彦と同人会メンバーでもある岩田考が、「大学生のコミュニケーションと意識に関する調査」(青少年研究会)に関する共同発表を行った際に、若者論の代表的論者の一人である小谷敏らの質疑に対して浅野が提示した図を参考に岩田が作成したものである。

■表 3-3 恥の文化 (vol.56 表 5-1)

(%)

		とても 恥ずかしい	やや 恥ずかしい	あまり 恥ずかしくない	ぜんぜん 恥ずかしくない
休み時間に教室の床に座る	全体	7.8	18.9	34.6	38.7
	男子	7.1	16.1 △	31.4 △	45.5 ▽
	女子	8.4	21.5	37.5	32.6
休み時間に教室で靴下をはきかえる	全体	10.7	30.0	29.8	29.4
	男子	7.2 △	23.1 △	30.4	39.4 ▽
	女子	13.9	36.1	29.3	20.6
休み時間に教室で化粧をする	全体	26.4	27.6	25.4	20.6
	男子	28.8 ▽	21.1 △	23.0 △	27.1 ▽
	女子	24.3	33.2	27.4	15.1
休み時間に教室でものを食べる	全体	3.2	9.0	26.7	61.1
	男子	4.1	9.8	24.1 △	62.0
	女子	2.4	8.3	29.0	60.3
休み時間に教室でプライベートな話をする	全体	3.7	21.9	33.2	41.2
	男子	4.5	21.0	31.3	43.1
	女子	2.9	22.7	34.9	39.5
電車の床に座る	全体	51.2	27.3	11.5	10.0
	男子	41.1 △	28.8	14.4 ▽	15.7 ▽
	女子	60.4	25.9	8.8	4.9
電車の中で靴下をはきかえる	全体	49.7	29.9	10.5	9.8
	男子	40.3 △	33.1 ▽	12.4	14.1 ▽
	女子	58.2	27.0	8.8	6.0
電車の中で化粧をする	全体	42.3	29.2	15.8	12.6
	男子	42.7	25.0 △	15.7	16.6 ▽
	女子	42.0	32.8	15.9	9.3
電車の中でものを食べる	全体	15.3	32.5	28.1	24.1
	男子	17.3	28.5 △	25.4 △	28.9 ▽
	女子	13.5	36.1	30.6	19.9
電車の中でプライベートな話をする	全体	10.1	25.7	35.5	28.7
	男子	11.6	25.1	31.0 △	32.3 ▽
	女子	8.7	26.3	39.5	25.5
道や駅前の広場に座る	全体	22.1	25.1	25.8	27.1
	男子	19.0 △	23.5	22.0 △	35.5 ▽
	女子	24.9	26.4	29.2	19.5
道や駅前の広場で靴下をはきかえる	全体	38.6	30.3	15.2	15.8
	男子	31.1 △	30.6	16.5	21.8 ▽
	女子	45.3	30.1	14.1	10.5
道や駅前の広場で化粧をする	全体	36.3	29.5	18.3	15.9
	男子	35.0	26.5 △	17.0	21.4 ▽
	女子	37.4	32.0	19.4	11.2
道や駅前の広場でものを食べる	全体	6.5	16.4	32.5	44.5
	男子	6.4	12.7 △	29.7 △	51.2 ▽
	女子	6.6	19.8	35.1	38.5
道や駅前の広場でプライベートな話をする	全体	6.8	17.3	35.9	40.0
	男子	7.5	16.7	32.3 △	43.5 ▽
	女子	6.1	17.8	39.2	36.8

4) ソフトなナショナリズム

それでは最後に、高校生と社会との関係をナショナリズムの視点からみていくことにしたい。

スポーツのナショナルチームの範囲を高校生に聞いてみると、それは表3-4のようになる。

表にみられるように、「日本のチームの監督に外国人がなってもいいと思う」が78.6%、「日本のチームに外国人の選手が入ってもいいと思う」が58.3%で、その入る割合は「何人でも入ってよい+半分くらい+2、3割くらい」が67.9%になっている。しかし「日本の選手も、どんどん外国で活躍してほしい」と思う者が83.2%いる一方で、「外国で活躍している日本選手も、オリンピックなどの国際的な試合では日本のチームにもどってきてほしい」も74.9%で、「日本のチーム」に対する揺れ動く気持ちがみられる。

また、国全体についても、「たくさんの外国人が日本に住む」49.8%、「外国に住む日本人が多くなる」55.9%に「賛成（賛成+どちらかといえば賛成）」が半数前後の一方で、「（ヨーロッパのように）アジアの国と通貨などを統一する」に「賛成」は21.3%になって

いた【vol.69 表6-3】。このように現在の高校生には、「ナショナルなもの」に対して揺れる、それなりにソフトな意識がみられる。

5) 終わりに代えて

～やわらかいアイデンティティと
やわらかい社会との回路～

現在の高校生のアイデンティティは弱くなったと言われる。確かにコミュニケーションの変化により、「自分がみつからない」「居場所がみつからない」という声を聞く。しかしそれはアイデンティティがやわらかくなったということでもあり、その積極的な面としては障害者、外国人などにやさしい、ということがあげられる。

また社会については、「戦後民主主義」はある程度定着しつつ、ソフトなナショナリズムや、環境、電子メディアなどの新たな「社会」と「社会問題」の場が生まれつつある。そして社会との接点を考える場合に、身体や路上などのメディアが重要な接点になってくる。高校生のやわらかく弱いアイデンティティに見合った社会との回路を、環境問題、メディア・リテラシーなどの教育を通じておとなたちも模索していく必要があるだろう。

■表3-4 日本のチームの範囲 × 性 (vol.69 表2-2)

	(%)		
	全体	男子	女子
日本のチームの監督に外国人がなってもいいと思う	78.6	75.7	81.6
日本のチームに外国人の選手が入ってもいいと思う	58.3	49.6	67.5
外国人の選手がどれくらい入ってもいいと思うか※			
何人でも入ってよい	26.9	32.8	22.6
半分くらい	4.4	5.1	3.9
2、3割くらい	36.6	33.6	39.8
1割くらい	31.0	28.4	33.7
日本の選手も、どんどん外国で活躍してほしい	83.2	82.9	83.6
外国で活躍している日本選手も、オリンピックなどの国際的な試合では日本のチームにもどってきてほしい	74.9	74.2	75.7
団体競技で、日本のチームと外国のチームの試合で外国を応援したことがある	18.9	23.5	14.0
個人競技で、日本人と外国人の試合で外国人を応援したことがある	25.7	25.0	26.5

※以外は複数回答

2. 将来への明るいイメージはどこからくるのか ～90年代後半の高校生の社会観～

1) はじめに

青少年の絡んだ犯罪・事件がマスコミを賑わすたびに、おとなたちは青少年の心がわからないと問題にする。そして、たいがい「青少年には社会規範がないからそうなったのだ」と嘆く。「道徳心がない」「風紀が乱れている」「マナーが悪い」「公私の区別がついていない」「常識に欠く」と。

しかし、公式統計を時系列的にみれば、青少年の犯罪が近年急増して、凶悪化しているわけではないことが明らかにされている。むしろ、昔の方が凶悪であり、現在はそれほど多くない。ごく一部に、おとなたちに嘆かれるような常識を欠いた行為をする青少年もいるものの、大概どの年齢層にもそのような人間は一定数存在するものだ。青少年だけを悪者にするのは不公平ですらある。

青少年は巷で嘆かれるように社会を知らないのか。それとも、おとなの嘆きの方がウソなのか。本節ではその手がかりとして、社会意識・社会観というものをういていこうと思う。青少年の中に、高校生は中核的存在（15～18歳）として位置し、これらの問題は「モ

ノグラフ・高校生」のバックナンバーで追証可能である。今回、使用する調査データは以下の3つである。1997年から2000年にかけて行われた調査で、対象は平均的な高校生を代表したものだ。この調査結果をみていくことで、平均的な高校生が、社会とどのように関わっているのか、どのように将来の日本を生きていこうとしているのかわかる。

- ① vol.53「社会とのスタンス―高校生の社会意識―」〈1997年〉
 - ② vol.59「高校生の描く21世紀像」〈1999年〉
 - ③ vol.62「消費者としての高校生」〈2000年〉
- 〈 〉内は調査実施年

2) 社会の感じ方

表3-5は、高校生の考える「とても大切」なもの、「とてもうれしい」と感じるものの順位である。vol.53では「社会意識の広がり」とある。「とても大切」は抽象的な聞き方、「とてもうれしい」は具体的な聞き方で、高校生の順位に差はあるものの、彼らが大事だと思えるものとして、「友だち」「家族」「自分」

■表3-5 社会意識の広がり (vol.53 図7-1 から)

			(%)		
抽象的 次のことがどの くらい大切なか	「とても大切」	順位	具体的 次のことがどの くらいうれしいか	「とてもうれしい」	順位
友だち	76.9	1	友だちが好きな人とつきあう	37.7	7
家 族	67.0	2	家族の病気が回復した	56.4	3
自 分	66.1	3	いい成績をとった	61.9	1
地球・人類	54.5	4	核兵器全廃	52.2	4
宇 宙	48.2	5	—	—	—
国（日本）	27.4	6	日本金メダル ※1	26.5	8
クラス	26.6	7	クラス優勝 ※2	58.4	2
地 域	23.3	8	地元優勝 ※3	39.1	5
学 校	12.5	9	学校優勝 ※4	39.1	5

※1 オリンピックで日本が金メダルをとったとき

※2 クラスが合唱祭などで優勝したとき

※3 地元代表のチームが優勝したとき

※4 学校の野球部などが優勝したとき

50%以上にアミかけ

「クラス」といった「身近な社会」を優先している。その次に、「地球・人類」「学校」「地域」「国」といった「大きな社会」がくる。「大きな社会」というのは、日常生活とは遠いイメージとして受けとめられているのかもしれない。

このように高校生の社会イメージは、まず身近なものを中心として、そこから「大きな社会」という広がりをもっていることがわかる。なるほど、この結果をみると、高校生の社会意識は身近なものへと特化し、関係が内閉化したものとなって困るという声が聞こえてきそうだ。

それでは、「大きな社会」への興味関心は低いといえるのであろうか。

3) 社会意識は低いのか？

表3-6は、その当時の社会の出来事について、「賛成」か「反対」かについてみたものである。結果をみてもわかるように、彼らの回答はきわめて常識的である。「お年寄りの在宅介護」「臓器移植の推進」「安楽死の公認」「外国人労働者（単純労働）の受け入れ」に対して70%以上が「賛成（とても十かなり）」を表明する。一方、「死刑制度廃止」「クローン人間の研究開発」に対して60%以上が「反対（やや十ぜったい）」を表明する。

これらの質問には、現状規範としての人

権・倫理の基準がなければ、容易に「賛成」、「反対」との回答をすることはできないはずだ。賛否の基準が明確であるというこの結果から、高校生が何に価値を置いているのかがみえてくる。

表3-7は、社会的活動への参加意欲である。すべての項目で「参加したい（ぜひ十なるべく）」という回答が50%を超えている。社会的活動（地域ボランティア・福祉ボランティア・環境ボランティア・平和活動）への希望がある。新たな社会参加の場に期待している。

気になるところといえば、現在活動中の高校生が少なく、この希望が実践を伴っての回答ではないことだ【vol.53 巻末集計表】。しかし、高校生が「大きな社会」に対して、全くの無関心ではないことはわかる。

4) 堅実な将来像

将来展望については、どのように考えているのか。表3-8が、「10年後」「30年後」「50年後」の将来の身近な生活（「友人」「仕事」「家庭」「趣味」「地域」）について、「できている」と思うかを尋ねたものである。

まず、すべての項目で「10年後」から「できている（きつと十たぶん）」と回答する割合が70～80%と高い（「友人」>「仕事」>「家庭」>「趣味」>「地域」の順）。ほとん

■表3-6 社会の出来事への賛否（vol.53 表3-2）

	(%)				
	とても 賛成	かなり 賛成	小計	やや 反対	ぜったい 反対
お年寄りの在宅介護	43.9	46.0	89.9	7.6	2.5
臓器移植の推進	43.5	45.8	89.3	9.0	1.7
安楽死の公認	30.9	49.0	79.9	16.8	3.2
外国人労働者（単純労働）の受け入れ	26.6	50.2	76.8	20.2	3.0
物理・数学の成績優秀者の飛び級制	21.4	34.8	56.2	27.2	16.5
夫婦別姓の採用	18.0	33.8	51.8	34.3	13.9
死刑制度廃止	12.1	23.1	35.2	40.6	24.3
クローン人間の研究開発	9.8	14.4	24.2	35.5	40.3

50%以上にアミかけ

どが将来の身近な生活は明るいものと考えている。彼らは充実した20代を過ごせるようだ。

「30年後」も大きな変動がない。「家庭」と「地域」の割合が増えている。40代は居住空間を中心とした充実した生活が送れていると考えている。

「50年後」は、「仕事」が下がる。おそらく、定年退職している年齢の頃と考えているからだろう。それに対して「趣味」が増えている。60代は、仕事を終え、趣味や人づきあいを大切にしたい悠々自適な生活を送れると考えている。

高校生の将来の身近な生活は、「10年後」から明るいイメージしている。そのモデルとして、自分の家族、メディアからの情報があるのだろう。今という社会から、彼らなりに、どうやって生きていよいか、そう考えての結果である。

現在の社会に対する評価のあり様が、将来への動きと大きくかわってくる。時代を変えるエネルギーは、何が現代の問題なのかを問い、どのように解決したらよいかを悩むことにあるからだ。歴史的にみても、これが社会変動の要因となっている。

■表 3－7 社会的活動への参加意欲－参加意欲は高い（vol.53 図 3－5 から）

(%)

	ぜひ参加 したい	なるべく参加 したい	小計	あまり参加 したくない	ぜったい参加 したくない
在日外国人との交流会	23.1	43.2	66.3	26.2	7.5
福祉ボランティア	14.6	49.1	63.7	28.0	8.4
身近な環境の保全活動（清掃や植樹）	13.6	49.9	63.5	29.4	7.1
海外の環境保全活動	19.0	41.1	60.1	31.8	8.1
漂着重油の除去作業（災害ボランティア）	15.2	42.8	58.0	33.3	8.7
海外の平和維持ボランティア	18.2	39.7	57.9	33.1	9.0

50%以上にアミかけ

■表 3－8 あなた自身の将来の生活（vol.59 巻末集計表）

(%)

	10年後		30年後		50年後
気の合う多くの友人を持っている	88.4	→	88.5	→	87.8
自分に合った仕事をしている（50年後は「続けている」）	84.8	→	82.8	↓	54.2
幸せな家庭生活を送っている	79.0	↑	88.6	→	85.6
趣味の面で満ち足りた生活を送っている	78.3	→	78.7	↑	88.5
地域の人たちと親しくつきあっている	73.9	↑	80.0	→	84.8

左の値と比べて±5ポイント⇒→ +5ポイント⇒↑ -5ポイント⇒↓
「きっと」+「たぶん」できている割合

表3-9は、将来残したいと思う「決まり」「風習」「慣習」がどういうものを尋ねたものである。ここから、高校生が現在よいと思っているもの、今後必要だと思っていること（逆に、必要ないと思っていること）がわかる。

全体の6割以上が残したいと思うもの（「とても十まあ」として「中学や高校の修学旅行」83.2%、「不燃ゴミ・可燃ゴミやビン・カンの分別回収」82.9%、「憲法第9条で示されている平和の理念」81.1%、「お米中心の食生活」75.8%、「敬語」62.3%、「町内の盆踊りや祭り」61.9%、「年賀状や暑中見舞い状のやりとり」61.8%である。多方面にわたる社会生活を肯定し、今後残していきたいと思っているのである。

一方、「残したくない（あまり十まったく）」と思うものは少ない。「結婚式に関連したしきたり」25.0%、「現在のお葬式のやりかた」21.7%が2割を超える程度である。むしろ、

「どちらでもよい」項目の方が多い。少なくとも、現在の社会慣行には同意しているといえそうである。現在、よいと思う「決まり」「風習」「慣習」を、これからも残していきたいと考えているようである。

金銭と生活に関しても、明るい、かつ常識的なイメージである。表3-10のように、「とても十まあ」そう思う割合でみていくと、「まじめに働けば、ふつう程度の暮らしはできる」が95.1%と圧倒的である。働きさえすれば、今のような暮らしはできると楽観視している。「悪いことをしない限り、大金を手にはできない」は、23.8%と少ない。「お金の豊かさより、心の豊かさを大事にしたい」84.6%だが、「何としても、大金を手にはしたい」62.2%とも考えている。「まじめ」に働けば、「ふつう」の生活が送れるという安定した金銭イメージを持っている。

具体的にやってみたい仕事について、その憧れは、将来の身近な生活イメージと比べれ

■表3-9 将来残したいものと残したくないもの（vol.59 表5-4 から）

	(%)		
	残したい (とても十まあ)	どちらでも よい	残したくない (あまり十まったく)
中学や高校の修学旅行	83.2	14.7	2.1
不燃ゴミ・可燃ゴミやビン・カンの分別回収	82.9	14.1	3.0
憲法第9条で示されている平和の理念	81.1	15.7	3.2
お米中心の食生活	75.8	22.0	2.2
敬 語	62.3	27.3	10.4
町内の盆踊りや祭り	61.9	31.4	6.7
年賀状や暑中見舞い状のやりとり	61.8	27.1	11.1
飲酒・喫煙は20歳を過ぎてからという法律	45.4	35.5	19.1
中学や高校の制服	44.7	44.5	10.8
結婚式に関連したしきたり	28.7	46.3	25.0
現在のお葬式のやりかた	27.7	50.6	21.7
「くん」「さん」で男女を区別する呼び方	19.6	69.4	11.0

50%以上にアミかけ

30%以上にアミかけ

20%以上にアミかけ

ば、そう高いとはいえない(表3-11)。この中で一番「やってみたい(とても+まあ)」と回答する「芸術やスポーツに関する仕事」でも61.3%である。ただし、最も少ない「マスコミに関する仕事」でも40.0%である。この中で仕事の人気ランキングをつけるとすると、「芸術やスポーツ」>「海外」>「最先端技術」>「医療・福祉」>「動物や植物」>「宇宙」>「教育」>「環境問題」>「マスコミ」と

なる。

全体的に、群を抜いて「やってみたい」と思う仕事もない反面、「やってみたくない」と思う仕事もない。これは高校生の興味が分散しているともみることできるし、可もなく不可もなくといった、「ほどほど」の仕事へのかかわり方があるともみることできる。

■表3-10 金銭と生活 (vol.62 表4-9から)

(%)

	とてもそう 思う	まあそう 思う	小計	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
まじめに働けば、ふつう程度の暮らしはできる	55.8	39.3	95.1	4.2	0.8
お金の豊かさより、心の豊かさを大事にしたい	31.3	53.3	84.6	12.7	2.7
何としても、大金を手にした	28.3	33.9	62.2	34.1	3.7
悪いことをしない限り、大金を手にはできない	7.0	16.8	23.8	45.9	30.3

50%以上にアミかけ

■表3-11 将来やってみたい仕事 (vol.59 表1-9から)

(%)

	とても やってみたい	まあ やってみたい	小計	あまりやって みたくない	ぜんぜんやって みたくない
芸術やスポーツに関する仕事	26.0	35.3	61.3	24.4	14.3
海外での仕事	23.3	36.4	59.7	26.1	14.2
最先端技術に関する仕事	24.5	32.8	57.3	27.2	15.5
医療・福祉に関する仕事	24.4	28.7	53.1	28.8	18.1
動物や植物に関する仕事	16.8	33.4	50.2	34.3	15.5
宇宙に関する仕事	16.9	33.1	50.0	31.4	18.6
教育に関する仕事	16.9	31.3	48.2	29.1	22.7
環境問題に関する仕事	10.0	35.9	45.9	37.7	16.4
マスコミに関する仕事	13.5	26.5	40.0	32.5	27.5

50%以上にアミかけ

5) まとめ

まとめよう。「青少年の社会意識が希薄」というのは妥当な見方なのかどうか、過去の調査結果をみてみた。すると、確かに彼らの社会意識は、まず「身近な社会（友だち・家族・自分・クラス）」が大切で、「大きな社会（地球・人類・学校・地域・国）」とはスタンスが異なるというものであった。

しかし、「身近な社会」への興味・関心だけではなく、彼らの社会的出来事（時事問題）への賛否の基準は明確だ。同様に、社会的活動への参加意欲は高い。「大きな社会」に対して「無関心」とはいえない。むしろ、現状に対して前向きともいえるくらいだ。

要するに、高校生の社会意識はしっかりしており、中でも現状の社会規範に肯定的で、「ふつう」の生活ではあるけれども、将来は明るくできる（身近な生活では特に）と考えているということだ。社会に対してあきらめているわけでない。熱心とはいいいくいのもの、「身近な社会」に対しては、将来イメージがかなり明るいものとなっていることが特徴的だ。

それでは、将来の身近な生活が明るいとお向きにみるのはどうしてなのだろうか。社会状況は長引く不況から脱していない。そうであるにもかかわらず、高校生の将来イメージが暗くならず、明るいのはなぜだろうか。

このあたりが90年代後半の高校生たちの社会意識を解明するポイントなのかもしれない。高校生が不安や不満を抱きながらも、将来生活をかなり前向きに捉え、現状の社会を肯定するのはどうしてなのか。視点は正反対だが、2つの考え方がある。

① 不安の抑圧：順応＝思考の停止

経済不況を筆頭に、明るい話題はあまりない。先のことをあれこれ悩むから不安がよりいっそう増大していく。そこで、山積する将

来の課題については、思考を一時停止するという選択が取られる。「いまーここ」に没入して、嫌なことは考えない。現状社会への順応に徹することで、将来も「なんとかなる」と楽観視できるようになる。将来的にみれば、問題は解決されないのだから、単なる現実逃避でしかない。だが、現状と将来の不安を回避するための方法としては機能する。

② 不満の転換：反抗＝希望の強調

青少年へのバッシングは「凶悪犯罪」のほかにも多々ある。おとなたちが、おとなたちの社会を維持するために青少年を悪者にした社会問題をつくりあげた。仮に青少年がおとなたちに正攻法で立ち向かったとしても、相手にされない。だから青少年たちは、（おとなたちにはないやり方で不満を表明する）おとなの予想する「暗い社会」を裏切って、前向きに社会とかかわろうとすることを意識的に選んでいるのだ。おとなたちにはできなかった希望のある（かつ、実現可能な）社会を自分たちの時代には作り上げたいという対抗の意味が隠れている。身近な将来生活を明るくみるのはおとなへの反抗なのだ。

将来の社会がどうなるかは、わからない。しかし、90年代の後半という時代を過ごした高校生たちの今後の人生を注目していこう。近い将来、彼らが社会の中心を担う層であるから。

【付記】

筆者は、1998年4月よりモノグラフ高校生同人会に参加させていただくことになりました。調査や報告書のイロハを教えてもらったこの場所がなくなってしまうのは、本当に残念です。多くの皆様のお力添えで、現在に至るまで、参加・執筆することができました。どうもありがとうございました。

4

進路意識の変化と現状

小原孝久(1・2節)・武内 清(3節)

本章1節と2節では、高校生の進路意識の変化と現状について、vol.49「高校生の競争観と共生観」(1997年)、vol.57「大学受験の『現在』」(1999年)、vol.70「高校生は変わったのか(2)」(2004年)の分析を活用しながらまとめてみたい。

まず、数年来いわれている受験競争の緩和化を高校生はどのように受け止めているのか、また今の高校生はどのような基準で大学

選択をしているのかを検討してみる。次いで、高校生の進路意識は、親の学歴、学校ランク、性別、成績などによって微妙に違いがみられるので、その分化傾向についても探ってみたい。なおその際、生徒の適切な進路選択がはかられているか、生徒の自己実現や自分探しという新しい流れがどのように現れているか、教育の機会均等が目指されているか、などの点に特に注目して検討を進めたい。

1. 受験競争の緩和化

1) 受験に対する競争心は低下傾向にある

18歳人口の減少、大学の入学定員の拡大などによって大学合格率は高まり、受験競争の深刻化は数字の上でも緩和されつつある。また、豊かな社会の実現やゆとり教育という考え方の浸透などから、教育現場における競争心も低下傾向にあるといえよう。さらに、「学歴社会」の崩壊や不況等による一流企業の倒産などという現象は、高校生の一流大学を目指すという考え方を薄れさせているのではない。以上のような社会的・教育的背景をもとに、高校生の受験に対する競争心は一般的に低下していると考えられる。

vol.49では、「高校生の競争観と共生観」というテーマで、高校生の競争に対する考え方をいろいろな側面から調査分析した。その中

で、特に受験や学歴にかかわる調査結果をみてみよう。その分析でわかることの1つは、「受験競争は、他人との競争である」と考える高校生(27.0%)より、「受験競争は、自分との戦いである」と考えている高校生(71.5%)が多いということである(表4-1)。この調査では高校生の競争心を多方面から尋ねているが、受験に限らず一般的にも、競争心よりも助け合いや協力を大切に考えている傾向が読み取れる。高校生は受験を他者との競争とはあまり考えておらず、その意味で受験に対してそれほど強い競争心を持っているわけではないといえる。

2つ目は、親より高いレベルの教育を受けたいという気持ちがそれほど強くないという結果である(表4-2)。親より「高いレベ

ル（長い期間）の教育を受けたい」と答えた高校生は、35.6%にすぎなかった。高学歴社会が浸透している中、みんながそれほど高い学歴に価値を求めているわけではないということもよくわかる。以上、高校生の受験に対する競争心の低下が読み取れる。

2) 必死に一流大学を目指すという傾向は少なくなっている

また、必死に一流大学を目指すという傾向も少なくなってきたのではないかと。高校生の勉強時間の減少、学力の低下などがいわれ、あるいは学びからの逃走などという指摘もあるが、そのような大きな流れの中で、今の高校生は、一流大学というよりも、自分の

学びたい専門領域や自分に合った大学という選択をしているようである。

vol.57では、「大学受験の『現在』」というテーマで、高校生の大学受験に関する考え方をいろいろな側面から調査分析した。その中で、進学における希望の強さを、希望する学部の有無との関係で尋ねた質問項目が、特に興味深い結果を示していた（表4-3）。それによると、「あなたはどちらに入学したいですか」という問いかけに対する回答は、「就職の実績」35.4%よりも「希望する学部」64.6%を、「有名な大学」16.6%よりも「希望する学部」83.4%を、「偏差値の高さ」13.7%よりも「希望する学部」86.3%をそれぞれ重視するというものであった。この調査では、

■表4-1 あなたの考えはどちらに近い × 性 (vol.49 巻末集計表)

	全体	男子	女子
受験競争は、他人との競争である	27.0	32.0	22.1
受験競争は、自分との戦いである	71.5	66.2	76.6
高校の勉強は将来プラスになる	81.9	79.8	83.8
高校の勉強は将来プラスにならない	16.1	18.0	14.5
学校では、競争に勝ち抜く力をきたえたい	17.1	25.1	8.9
学校では、お互いに助け合う心を育てたい	79.8	71.9	88.0
生きていく上で競争は大切である	20.1	29.0	11.1
生きていく上でお互いに助け合うことは大切	78.0	68.8	87.2

■表4-2 親より高いレベル（長い期間）の教育を受けたい × 性 (vol.49 巻末集計表)

	全体	男子	女子
同じ程度の教育を受けたい	13.0	13.9	12.3
高いレベル（長い期間）の教育を受けたい	35.6	37.6	33.6
低いレベル（短い期間）の教育で十分	2.6	2.5	2.6
どちらでもよい	46.7	43.7	50.0

■表4-3 進学意識における希望の強さ × 性 (vol.57 表4-1)

	全体	男子	女子
〈希望する学部と就職実績〉			
就職の実績はよくないが、自分の希望する学部	64.6	66.3	62.7
就職の実績はよいが、自分の希望とは異なる学部	35.4	33.7	37.3
〈希望する学部と有名大学〉			
あまり有名ではないが、自分の希望する学部	83.4	79.5	88.0
有名大学の自分の希望とは異なる学部	16.6	20.5	12.0
〈希望する学部と偏差値〉			
偏差値55の大学の自分の希望する学部	86.3	83.2	89.8
偏差値60の大学の自分の希望とは異なる学部	13.7	16.8	10.2

数値は、回答者における割合

この他にも様々な面から大学選択における基準や動機を尋ねているが、高校生は、「偏差値」「有名度」「伝統」などよりも、「希望する学部」「学びたいカリキュラム」「取得できる資格」などを判断の基準としてより重視しており、必死に一流大学を目指すという傾向は薄れてきているといえよう【vol.57 図4-3】。

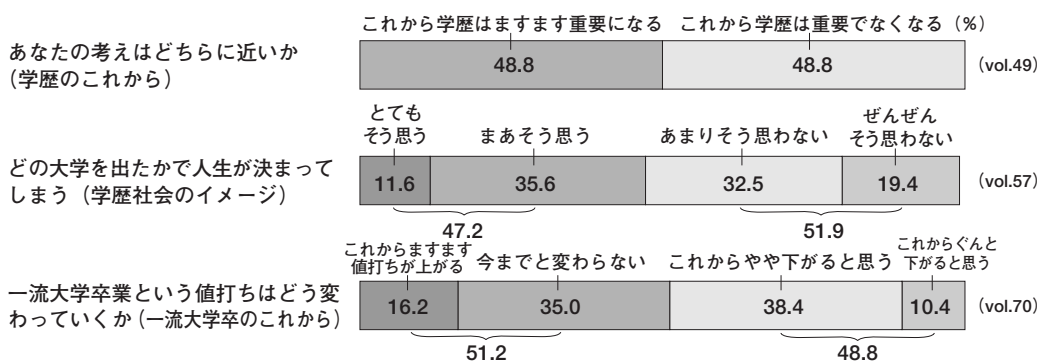
3) 「学歴社会」意識は崩壊しているのか？

学歴社会の「崩壊」という言い方がされて久しいが、本当にそうなのだろうか。高校現場に身を置く者としては、このような言い方は必ずしも当を得ていないのではないかという感想を持つ。あるいは、学歴社会「信仰」

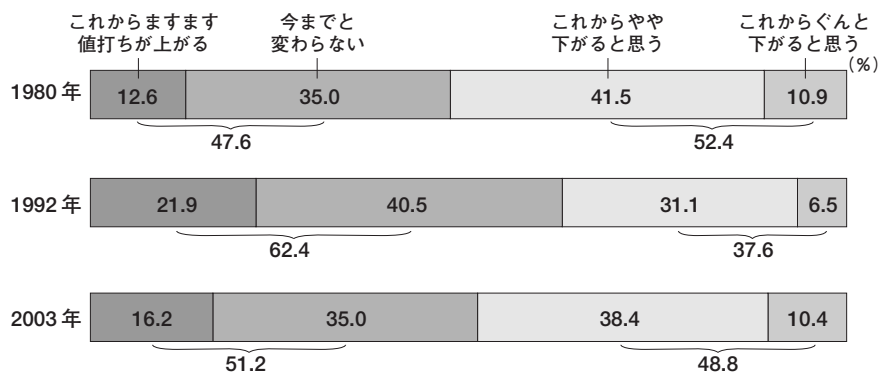
は、形を変えて続いていると言った方がよいのではないか。

「モノグラフ・高校生」では、「学歴」「学歴社会」「一流大学」などについて、いろいろな場面で高校生に尋ねている (vol.49、vol.57、vol.70、その他)。図4-1は、高校生に学歴社会や一流大学について尋ねたものであるが、例えば1番目の「これから学歴はますます重要になる」48.8%、「これから学歴は重要でなくなる」48.8%をはじめ、肯定的な見方と否定的な見方がほぼ拮抗しているのがよくわかる。また図4-2は、「一流大学卒の値打ち」を時系列で尋ねたものであるが、肯定的な回答（これからますます値打ちが上がる）の比率は1980年

■図4-1 学歴（学歴社会）をどう考えているか (vol.49・vol.57・vol.70 巻末集計表)



■図4-2 一流大学を卒業したという値打ち 3時点の変化 (vol.70 図2-4)



(47.6%)、1992年(62.4%)、2003年(51.2%)であり、肯定的な回答の比率は決して低下はしていないのである。

高校現場でよく耳にする言い方に、次のようなものがある。「自分の希望や個性を尊重して考えるのが大切。でも大学(4年制大学)へ行った方が、あるいはよりレベルの高い(＝偏差値が高い)大学へ行った方が、自分の希望や可能性をより実現しやすいし、人間関係もより恵まれたものになるのではないか」。自らの高校での経験から、このような言い方やアドバイスをする高校教師は多いと思われるし、進学校ではその傾向はさらに強いといえよう。また親についても、もう少し自分の子どもへの期待や望みが加えられたう

えで、同じような言い方をしているのではないか。そしてこのような教育現場や家庭での見方は、結果的には、高校生の受験に対するアスピレーションを高めているのかもしれない。このように考えてくると、「学歴社会」意識は崩壊しているのではなく、「個性の尊重」「自分らしい進路」「自分探しのための大学」などの言葉に包まれながら、特に進学校を中心に、形を変えて継続しているといえるのではないか。

以上、一方で、高校生の受験に対する競争心や必死に一流大学を目指すという考え方が低下傾向にあるということ、他方で、「学歴社会」という考え方は形を変えて続いているのではないかということが指摘できよう。

2. 高校生の進路意識の変化と現在

1) 進路指導や選抜方法の多様化と大学選択基準の変化

近年、大学の入学選抜の多様化には著しいものがある。一般入試だけでなく、推薦入試(指定校制と公募制、自己推薦制)、AO入試(アドミッション・オフィス入試)、帰国子女入試など選抜方法は多様化し、受験生は個人にあった入試方法を選択できるようになっている。これに対し高校現場の進路指導も、

「生徒の興味・関心」や「自分探し」を尊重し、受験重視から多様な選択、生徒の意向尊重へと向かっている。

このような中、高校生の大学の選択の基準はどのように変化してきたのか。vol.70は1980年、1992年、2003年の調査を比較検討したものであるが、その中で取り上げた「志望大学を決めるときに大事に考えること」の時系列の様子をみてみよう(表4-4)。2003年を

■表4-4 志望大学を決めるときに大事に考えること 3時点の変化(増減表)(vol.70 表2-3)

(%)

	1980年	1980年→1992年	1992年	1992年→2003年	2003年	1980年→2003年
就職状況がよさそうだ	73.4	—	75.6	↑	84.3	↑
授業料が安い	74.1	—	69.8	↑	81.3	↑
入学するのが難しい	74.3	—	75.8	—	71.8	—
優秀な教授陣がそろっている	57.2	↓	50.3	—	52.6	—
世間的に名前が知られている	65.7	—	62.9	↓	48.1	↓
受験科目が少ない	52.8	—	50.7	↓	40.3	↓
その大学が家から通える範囲にある	39.4	↓	31.7	↑	38.6	—
伝統のある大学である	51.8	↓	44.1	↓	30.5	↓

「とても+まあ」大事に考える割合
5ポイント差以内は“—”とした

↑↓は前回と比較して5ポイント以上の増減をあらわす
各項目はそれぞれ、3時点での最大値にアミかけをした

中心にみた場合、志望大学を決めるときに多かった理由は、「就職状況がよさそうだ」84.3%（「とても＋まあ」大事に考える）、「授業料が安い」81.3%、「入学するのが難しい」71.8%の順であった。また時系列でみると、増加している理由は、「就職状況がよさそうだ」「授業料が安い」があげられ、減っているものとしては、「伝統のある大学である」「世間的に名前が知られている」「受験科目が少ない」などの項目であった。これらのことから、大学の伝統や名声といったものに代わり、就職状況や授業料などの実質的な要素をより大事に考える傾向がみられ、高校生の大学選択基準も時代と共に変化していることがわかる。

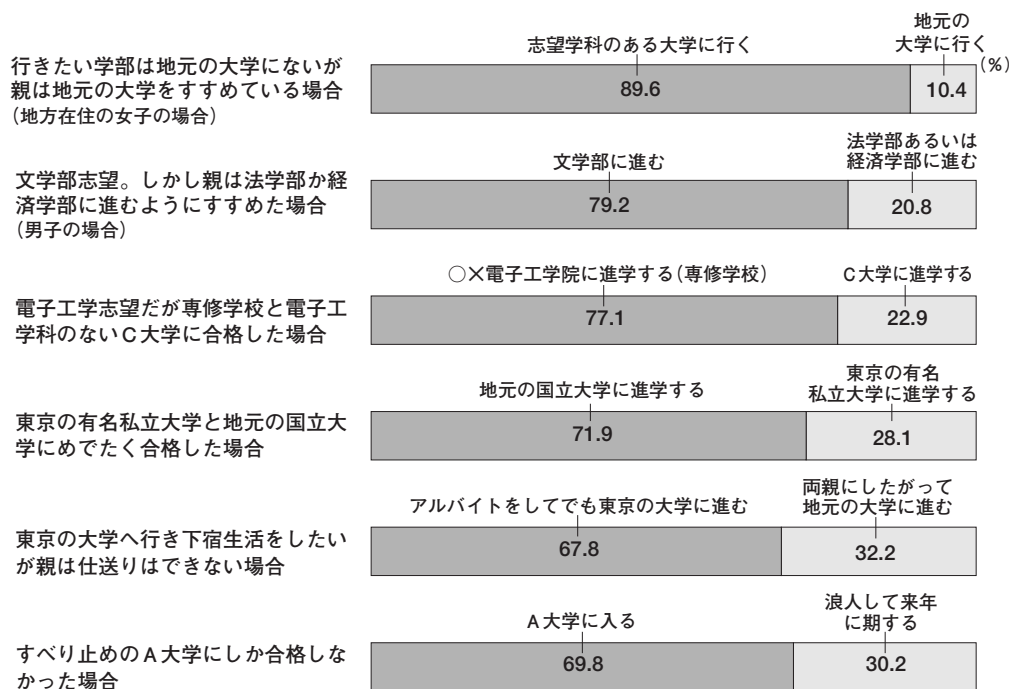
2) 自分の希望を尊重

次に、「自分らしい選択」という観点から、高校生の大学選択の様子をみてみよう。同じくvol.70に、ある状況を想定し、「あなたなら

どうするか」と大学選択の基準を尋ねた質問項目がある（図4－3）。高校生たちの選択の結果は、「行きたい学部のない地元の大学に行く」10.4%より「（地元を離れることになっても）志望学科のある大学に行く」89.6%（地方在住の女子の場合）、「将来のことを考えた親のすすめる法学部あるいは経済学部に進む」20.8%より「自分が志望している文学部に進む」79.2%（文学部志望の男子の場合）、「志望学科のないC大学に進学する」22.9%より「志望学科のある〇×電子工学院に進学する（専修学校）」77.1%などであった。

これらから、親元を離れたり親のすすめと違って、自分の志望する学部や学科を優先したいと考えている様子が見え、また専門の勉強のためには大学にこだわらないという高校生の考え方もわかる。総じて今の高校生は、自分の希望を尊重した大学選択、自分らしい大学選択をしているといえよう。

■図4－3 あなたならどうするか（vol.70 巻末集計表）



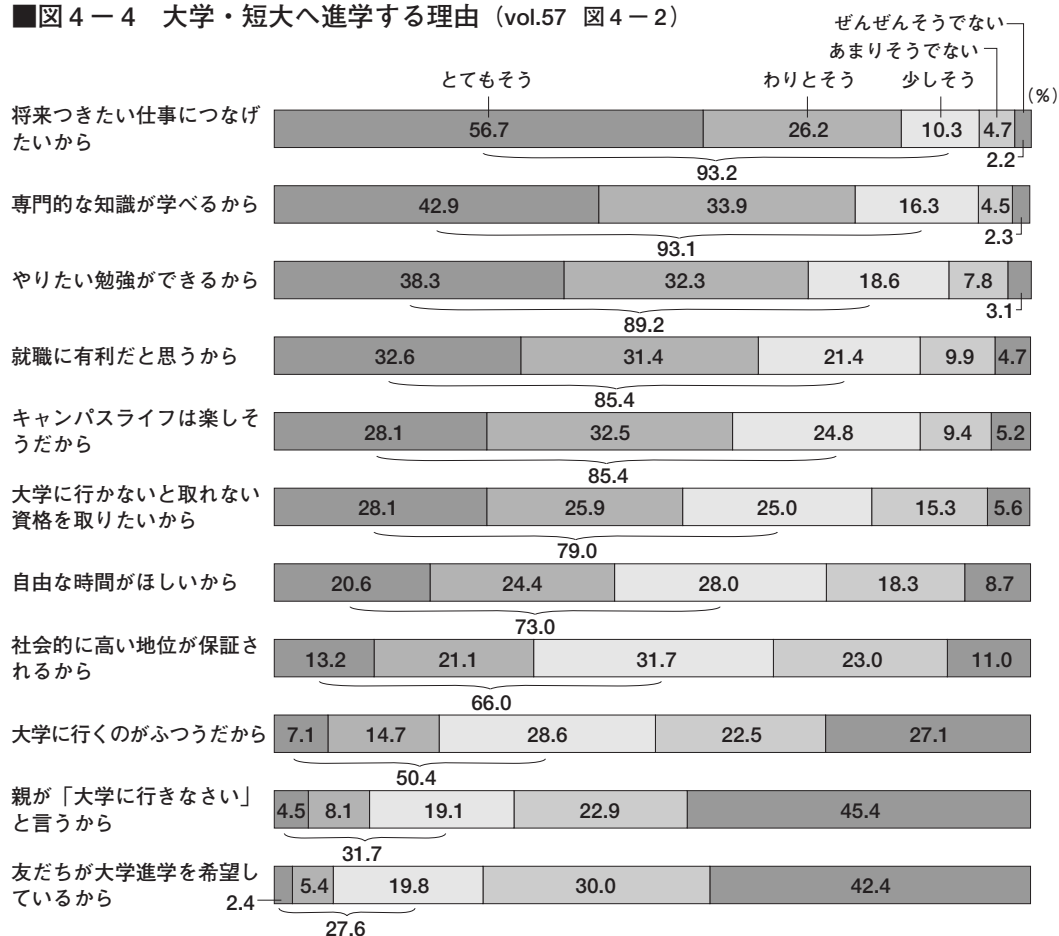
3) 堅実な進路選択理由

また、「堅実な進路選択」という観点から、高校生の大学選択の様子をみてみよう。vol.57は「大学受験の『現在』」(1999年)というテーマであったが、その中で大学や短大へ進学したい理由を尋ねている(図4-4)。これを見ると、多くの高校生が進学理由として選ぶものは、「将来つきたい仕事につなげたいから」93.2%、「とても十わりと十少し」その割合)、「専門的な知識が学べるから」93.1%、「やりたい勉強ができるから」89.2%などがあげられる。また比較的少ないものには、「友だちが大学進学を希望しているから」27.6%、「親が『大学に行きなさい』と言うか

ら」31.7%などがみられた。このような結果から、今の高校生がかなり堅実な進路選択をしている様子がうかがえる。

これまでの「モノグラフ・高校生」をもとに、主に高校生の大学選択の実態を振り返ってみた。そこからうかがえる高校生の実態は、選抜方法の多様化の中で、大学の伝統や名声などよりも就職状況や授業料など実質的な要素をより大事に考えている姿であり、また他方で、まわりの意見や世評などよりも自分の希望を尊重した大学選択をしている姿であった。そのような意味で、高校生はかなり堅実な大学選択をしているということがいえるのではないかな。

■図4-4 大学・短大へ進学する理由 (vol.57 図4-2)



注) 数値は、回答者における割合。回答率は、小数点以下第2位を四捨五入したため、合計が100.0%にならないことがある。

3. 進路意識の分化構造

前節まで、大学入試の多様化が進むなかでの、最近の高校生の進路意識の特質を考察してきた。現代の高校生が、大学の偏差値や社会的名声よりは、就職状況や授業料といった実質的要素を重視し、また自分の興味関心にそった学部学科選びをするといった堅実な選択をするような傾向があることが明らかになった。

さらに、本節では、高校生の進路意識の分化の様子を考察する。高校生の進路意識は全体で1つの方向へ変化しているわけではなく、様々な社会的要因によって分化している。ここでは親の学歴、学校ランク、性別、成績などによる分化を考察する。

主にvol.57「大学受験の『現在』」(1999年)のデータから考察する。

1) 親の社会階層の影響

高校生の進路意識を分化させている第1の要因は、親の階層的要因である。親の学歴(F:父親大卒、f:父親大卒以外、M:母親大卒、m:母親大卒以外)*を指標にしてみると、次のような差異が明らかになった。

第1に、難関大学進学希望者は、FM47.9%>Fm43.1%>fM36.1%>fm34.7%と、高学歴層に多い(表4-5)。

第2に、希望の大学に入れなかったとき、浪人して来年再受験するのはFM24.9%>Fm23.6%>fM16.4%、fm17.7%と、高学歴層に多い(表4-6)。

第3に、大学選択の際、大学で取れる資格を重視するのはfm52.9%>FM46.9%と、低い学歴層に多い(表省略)。

■表4-5 進路意識 × 親の学歴 (vol.57から)

							(%)
親の学歴	難関4年制大	一般4年制大	短大	専門学校	就職	その他	N
fm	34.7	43.9	6.0	9.0	3.7	2.7	1041
fM	36.1	41.6	6.6	9.1	2.6	4.0	274
Fm	43.1	39.9	5.4	7.1	2.0	2.5	552
FM	47.9	40.9	3.5	4.3	1.0	2.3	1157
平均	41.4	41.8	5.0	6.9	2.3	2.6	3024

*大卒→「短大・高専」と「大学(大学院)」・大卒以外→「中学」と「高校」
p<0.001

■表4-6 浪人忌避 × 親の学歴 (vol.57から)

							(%)
親の学歴	浪人	第2志望の大学へ	入学するが再受験	専門学校	就職	その他	N
fm	17.7	57.2	1.7	8.2	7.7	7.5	897
fM	16.4	59.2	0.4	7.1	9.7	7.1	238
Fm	23.6	55.2	2.6	5.6	6.7	6.3	496
FM	24.9	58.5	2.0	5.5	3.7	5.5	1082
平均	21.5	57.5	1.9	6.6	6.1	6.4	2713

*大卒→「短大・高専」と「大学(大学院)」・大卒以外→「中学」と「高校」
p<0.001

第4に、授業料の安さを重視するのもfm43.0%＞FM38.6%と低い学歴層である。高学歴層は、資格や授業料の額をあまり気にしない（表省略）。

第5に、将来社会的評価の高い職業に就くことができると考えているのは、高学歴層であり、低い学歴層ではない（「とても無理」の割合；「弁護士」FM46.8%＜fm59.2%、「役所の部長」FM33.0%＜fm41.2%）（表省略）。

2) 学校格差・学業成績

学校格差と学業成績も、高校生の進路意識を分化させるのに働いていることが、表4－7からわかる¹⁾。

進学校のAランク校で成績上位の生徒は、難関大学を目指し、学校の授業にまじめに取り組む、授業への満足度が高く、部活動や友人への満足度も高く、学校生活全体が楽しいと感じている。自我像も明るい。受験のためにいろいろなことを犠牲にしているわけでは

■表4－7 学校格差・成績による分化（vol.57 表6－1）

(%)

	Aランク 成績上位 (358名)	Bランク 成績中位 (493名)	Cランク 成績下位 (201名)
第一志望の高校に入学(確実に)	73.1	57.8	24.5
学校へ行くのが楽しい(とても十わりと)	56.0	53.0	27.4
授業に満足(とても十わりと)	67.6	37.2	18.4
部活動に満足(とても十わりと)	47.3	48.5	26.3
友だちに満足(とても十わりと)	76.1	80.5	70.1
高校生活全般に満足(とても十わりと)	54.1	48.9	24.4
授業中内職やいねむり(とても)	14.8	9.9	22.5
努力型(とても十少し)	41.7	38.8	21.5
みんなから信頼されている(とても十少し)	36.0	25.1	24.0
友だちが多い(とても十少し)	42.5	43.5	51.5
通信添削利用中	30.5	23.6	5.1
4年制大学志望	97.8	90.8	43.7
難関4年制大学志望	85.4	27.8	11.6
第一志望に入れないとき、浪人する	37.5	15.5	10.1
一浪すれば難関大学へ合格できる(きっと)	49.9	22.2	24.8
有名大学より希望する学部を選択	83.9	75.9	83.1
偏差値より希望する学部を選択	82.6	77.8	89.2
希望する学部より就職実績重視	39.9	31.0	46.5
大学の研究施設や設備重視(とても)	50.6	32.2	28.8
大学で取得できる資格重視(とても)	45.2	47.4	56.8
大学の受験科目重視(とても)	33.8	29.3	47.5
キャンパスのきれいさ重視(とても)	18.6	24.1	37.3
大学進学理由：勉強(とても)	53.5	38.0	27.6
大学進学理由：専門知識(とても)	53.2	42.3	39.7
大学進学理由：就職に有利(とても)	33.5	28.9	47.4
大学進学理由：自由な時間(とても)	12.4	16.7	37.9
大学進学理由：キャンパスライフを楽しむ(とても)	20.0	24.4	36.2
大学に入って：研究・ゼミ(ぜひしたい)	22.6	8.9	10.3
大学に入って：アルバイト(ぜひしたい)	56.3	67.1	76.3
将来の目標を持っている(とても十やや)	63.9	54.0	61.3
自分の部屋の掃除(いつも自分で)	36.0	45.1	55.6
父親(大学卒)	59.2	46.6	30.5
母親(大学・短大卒)	50.1	42.3	32.4

ない。大学選択の理由も、就職や遊びのためというのではなく、専門の勉強のためという明確な問題意識を持っている。親に頼り自分の身の辺の自立に欠けるという問題はあるが、自分の将来についてもしっかりと目標を持っている生徒たちである。

それに対して、非進学校のCランク校で成績下位の生徒は、勉強に熱心に打ち込んでいるわけではない。部活動への参加も中途半端である。現在の高校が第一志望の学校でなく、学校生活全体があまり楽しくない。高校卒業後は入れる大学や短大、場合によっては専門学校や就職してもよいと考えている。大学に行くとしても、それは勉強のためというよりは、就職に有利にするためであったり、自由な時間にアルバイトをしたり遊んだりするためである。

Bランクの高校で成績中位の生徒は、ほとんどの項目で、Aランク成績上位の生徒とCランク成績下位の生徒の中間の値を示す。ただし、「部活動に満足」や「友だちに満足」は、3つの中で一番高い。

3) 男女差

第3の分化は、男女差によるものである。男子に比べ女子の方が大学進学動機に積極的な姿勢がみられる。女子に多いのは、「やりたい勉強ができる」(女子45.6%>男子31.9%)、「専門的な知識が学べる」(女子49.7%>男子37.1%)、「資格を取る」(女子35.9%>男子21.3%)、「将来の仕事につなげたい」(女子64.6%>男子49.8%)などである。また「大学の知名度」より「自分の希望する学部」を優先するという者も女子に多い(女子88.0%>男子79.5%)【vol.57 p.72】。

しかし、第一志望の大学・短大に入れなかったとき、「浪人する」は男子28.3%に対して女子14.9%と少ない【vol.57 p.71】。女子には浪人忌避の傾向があり、女子の浪人は将来の就職にも結婚にも不利に働く面もあるようだが、この女子の浪人忌避規範の存在が、浪人しないと難関大学には入れないという高校教育や入試の仕組みとあいまって、女子の低い4年制大学進学率や難関大学への進学率の低さを作り出しているのであろう。現在、18歳人口の減少の中で、4年制大学への現役入学率が上がれば男女差は縮小し、4年制大学や難関大学に進学する女子も増加するであろう。

4) 希望した高校か

第4に入学した高校が第一志望の高校かどうかによる違いがある。現在通っている高校に入学するのをどの程度希望していたか別に、現在の学校生活の満足度をみたのが、図4-5である。

授業、友だち、部活動、先生、高校生活全般とすべてにわたって、希望した高校に入学した方が、入ってからの学校生活に満足度が高いことがわかる。

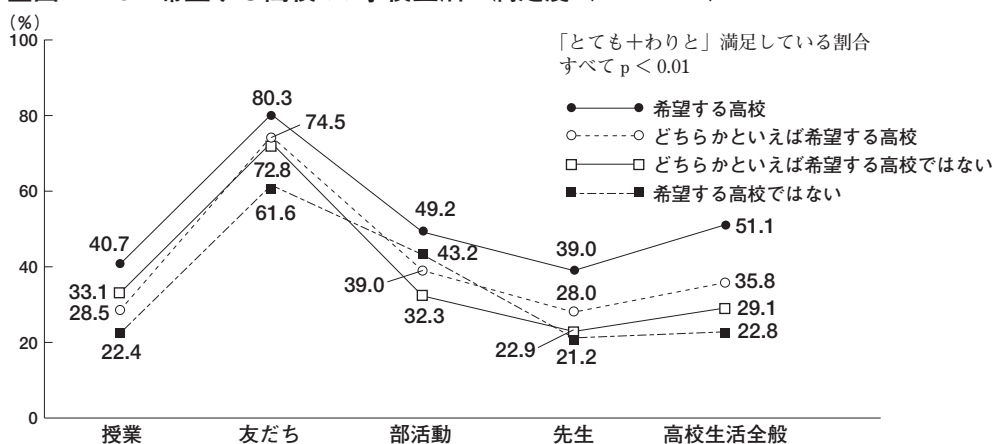
学校グループ別にみても、同様なことがいえる。例えば「高校生活全般」に関する満足度は、Aランクの「希望する高校ではない」人の満足度が11.5%であるのに対して、Bおよ

びCランクの「希望する高校」に入った生徒の満足度は、それぞれ53.2%と48.7%と、Aランクの不本意入学者より高くなっている(図4-6)。

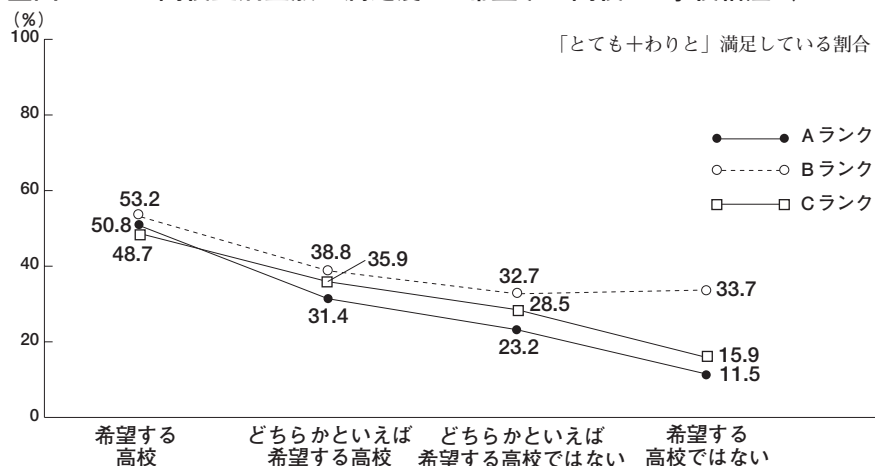
つまり、学校ランク差より、入学の時の気持ちや、入ってからの学校生活への満足度を規定していることがわかる。その学校の特徴などに惹かれ希望して入れば、たとえそれがCランクの高校であっても、学校生活への満足度は高くなるのである。

以上のように、親の階層、学校格差、成績、男女差、入学時の志望等によって、高校生の進路意識は分化している。

■図4-5 希望する高校 × 学校生活の満足度 (vol.57 から)



■図4-6 高校生活全般の満足度 × 希望する高校 × 学校格差 (vol.57 から)



5) まとめ

これまでみてきたように、高校生の進路選択について、従来と変わらない面と、時代と共に変化している面を以下6つにまとめてみよう。

① 18歳人口の減少、大学の入学定員の拡大によって、大学合格率は高まり、受験競争の深刻化は緩和されつつある。豊かな社会の実現、学歴社会の「崩壊」、一流企業の倒産、ゆとり教育の浸透という社会的・教育的背景もあって、高校生の競争心は低下傾向にある。受験は他人との戦いというよりは自分との戦いと考えている。

② 高校生は学歴の価値を認めているが、学歴の価値を絶対と思っているわけではない。学歴のある方が、自分の希望や可能性をより実現しやすいと冷静に判断している。

③ 大学を選択するにあたっては、「偏差値」「有名度」「伝統」などより、自分に合った大学や学部を選ぶようになっている。「就職状

況」や「授業料」といった実質的な要素も重視するようになっている。

④ 学校格差や学業成績によって、高校生の進路意識や進路は大きく違い、分化している。進学校の成績上位者は昔ながらの学歴意識を持ち、受験を目指してよく勉強し、非進学校の成績下位者は、勉強時間が少なく、部活動にも参加せず、高校生活をあまり楽しんでいない。

⑤ 女子は現役で大学に入学する意向が強い。男子に比べ女子の方が、大学進学動機は積極的である。男子は女子の変化に伴い、変化を余儀なくされている。

⑥ 生徒の自分探し・自己実現の達成が重視される中、自分で選択した高校に入った生徒の高校生活満足度は高い。生徒の選択を尊重しつつ、生徒に合った進路選択がなされるべきであろう。同時に、生徒の「自主的な選択」が、生徒の将来の進路を閉ざすことのないように、注意が必要である。

【注】

- 1) 学校格差は、高校入学時の学力や大学進路実績などによってA B Cの3つのグループに分けた。4年制大学進学希望者の平均はAランク校で93.5%、Bランク校は87.8%、Cランク校54.9%である。Aランク校は有名大学への進路実績が多く、Cランク校は有名大学への進学実績は少なく、Bランク校はその中間である。学業成績は、現在のクラスでの成績を上中下の3つに分けた。高校生を学校格差(A B C)と成績(上中下)の組み合わせで9つのグループに分けて検討した。そのうち、A校上位とB校中位とC校下位の3つのグループの数字を表4-7に示す。

5

学校や教師のあり方について

蒲生眞紗雄(1節)・穂坂明德(2節)

1. 高校生の学校観

臨教審の答申以来、いろいろな形で教育改革が矢継ぎ早に進められてきた。「基礎・基本の重視」「考える力」や「生きる力」を身につける新しい学力観、ゆとり教育の充実等々である。ただし、教育を受ける側の生徒たちの要望をくみ取った施策ばかりとはいえない。完全学校週5日制も含めて戦後の教育を再編成しようという意図もみてとれる。

こうした中で、本節は、生徒の側から学校の役割や教師に求めるものは何かを探ってみたい。25年間の中で、学校や教師は生徒の期待に応えることができたのだろうか。今後どのような方向を志向すべきなのかを考えてみたい。

1) 生徒が期待する学校の機能

高校進学率が97%を超える中で高校卒業後の進路指導(進学と就職、ただし、全日制普通科の多くでは進学指導が中心であった)をどのように充実させるかは高等学校の重要な機能であった。もちろん、現在もその機能が失われたわけではない。しかし、大学数の増加や定員増、AO入試など多様な入試機会に伴う大学入試の平均的な平易化は顕著であり、フリーターの増加(フルタイムで働けない若者層の増加をも意味する)などは、従来

の高校の機能だけを墨守していたのでは生徒たちの期待に応えられなくなってしまうことを示しているといえよう。

表5-1は、25年間の「モノグラフ・高校生」の調査の中で、高校生活の各場面での満足感や充足感を尋ねたものを集めた結果である。全日制の普通科である点は共通するが、調査地域、公立・私立の別、調査対象人数などは同一ではない。したがって厳密な意味での経年比較とはいえないが、概略としての高校生活の満足・充足感の変遷の有無を探ることとはできるといえよう。

まず言えることは、ほとんどの項目で1980年代より1990年代の方が、1990年代より2000年代の方が満足感・充足感が増しているという点である。特に「高校生活の充足感」は四半世紀を通じて増加(1982年20.7%→2002年62.4%)していることがわかる。一方で、「友だちとの関係」に最も高い満足感・充足感を示す傾向に変化はなかった。また、授業への満足感は、1980年代の20%台に比して1990年代後半から2000年代が30~40%台と確かに増加している。教育改革の中で進められてきた教師たちの授業改善への取り組みが、生徒たちに若干でも評価された結果と取れなくもない。

そして、高校生活の満足感・充足感が増加した背景には、受験競争の平易化や多様なタイプの学校の存在など外的な社会の変化とそれに対応する教育改革のいくつかが生徒たちにも受け入れられた結果の反映ともいえる。また、生徒たちが最も求めている「友だちとの関係」や「部活動」への満足感・充足感の増加も大きく影響しているといえよう。

ここから読み取れるものは、高校の機能として生徒が期待しているものは進路指導の充

実もさることながら、友人関係や部活動などの人間の生き方にかかわる機能ではないだろうか。それは、将来どのような生き方をすべきなのかとか、どう社会とかわりを持って自分のアイデンティティを確立すべきなのかといった、真の意味での自分の生き方を探るためのサポート役を高校と高校教師は担うべきなのではないだろうか。つまり、広い意味での生涯学習の視点が、今後より求められているといえよう。

■表5-1 「モノグラフ・高校生」における高校生活の満足・充足感の変遷

(%)									
vol. (調査年)	vol.1 (1979)	vol.9 (1982)	vol.12 (1983)	vol.36 (1992)	vol.46 (1995)	vol.48 (1996)	vol.57 (1999)	vol.61 (2000)	vol.68 (2002)
尺度	「とても」+ 「かなり」 満足している	「とても」+ 「かなり」 充足している	「とても」+ 「かなり」 充足している	「とても」+ 「かなり」 満足している	「とても」+ 「かなり」 充足している	「とても」+ 「かなり」 充実している	「とても」+ 「わりと」 満足している	「とても」+ 「かなり」 満足している	「とても」+ 「わりと」 満足している
[選択数]	[6]	[6]	[5]	[6]	[6]	[5]	[5]	[5]	[5]
友だちとの関係	38.4	59.5	63.0	47.1			76.4	65.2	79.9
放課後の余暇の生活	23.3			25.9					
先生との関係	11.1	8.5	12.3	15.5			33.4	18.6 ^{※1}	
現在の学業成績	4.7			4.6			13.4		
授業を受けているとき		24.6	21.0				33.7	30.4 ^{※2}	40.4
部活動		40.3	36.0				40.5	41.6	52.0
高校生活の充足感		20.7			19.7	26.8	42.7	46.2	62.4
進路相談							17.0		
高校の雰囲気								49.8	

※1 先生の教え方 ※2 「とても」+「かなり」充実している

vol.1 「高校生の描く未来像—その進路と大学選択—」1980年（9都道府県の進学校9校 4,582人）

vol.9 「高校生活の意味」1983年（3都県の公立・私立14校 3,536人）

vol.12 「高校部活動、いま」1984年（都内の公立・私立9校 2,584人）

vol.36 「高校生は変わったのか—1980年調査と比較して—」1992年（15都府県の高校 2,354人）

vol.46 「文系・理系と高校生」1996年（4県の公立校 2,390人）

vol.48 「高校生白書」1997年（2県の高校 1,989人）

vol.57 「大学受験の『現在』」1999年（全国の公立12校 4,266人）

vol.61 「高校生が『学校』で身につけるもの—『特色のある学校』と対比させて—」2001年（3都県の公立5校 1,522人と首都圏の公立・私立の特色4校 803人）

vol.68 「高校生にとっての土曜日—『完全学校週5日制』のもたらしたもの—」2003年（3都県の公立4校 1,387人）

2) 生徒が求める授業と現実

表5-2は、1990年代から2000年代に至る生徒の授業中の態度の変遷と2000年調査の特色のある学校の授業中の態度とを比較した結果である。

授業中の態度の変遷では、「ボーッとしている」「いねむりをする」などの消極的な授業態度の生徒が増加している一方で、「先生の話をも熱心に聞く」という積極的な授業態度の生徒が徐々に減少していることがわかる。授業に対する意欲や集中度が最近の生徒たちは低下しているのではないかという職員室での会話は、この数値によって裏づけられたともいえる。

ただし、特色のある学校と比較すると先生の話をも熱心に聞き、先生に質問する積極的な授業態度の生徒は、普通高校の生徒より10ポイント前後多いことがわかる。特色のある学校の多くは習熟度別や多展開、少人数などの授業形態を導入している。こうした多様な授

業形態をとることによって生徒の意欲が引き上げられることを、この数値は如実に物語っているといえる。

また、生徒たちは現在毎週30時間余の授業を受けている。3年間では80～90単位前後の授業を受けている。そうした多くの勉強の中で、生徒たちはどのような内容を身につけることが大事だと思っているのだろうか。12項目について調査した結果が、図5-1である。「とても十かなり」大事な割合をみていくと、「簡単な英字新聞が読める」59.2%、「高齢者介護のやり方を身につける」55.9%、「日本語の字幕なしで外国映画がわかる」43.5%、「日本国憲法の基本的人権を理解する」42.1%などに強い関心を示している。実用的なもの、社会的なものへの関心度や欲求度が高いともいえる。それは、生徒たちも現代の日本のおかれている国際化の必要性や高齢化社会への対応を早急に迫られている状況を強く認識しているからでもあろう。

■表5-2 「モノグラフ・高校生」における授業中の態度の変遷と特色校との比較

vol. (調査年)					(%)			
	vol.33 (1991)	vol.46 (1995)	vol.61 (2000)	vol.65 (2001)	vol.61(特色のある学校)			
	「いつも」+ 「わりと」 そうしている 〔5〕	「いつも」+ 「わりと」 そうしている 〔5〕	「いつも」+ 「わりと」 そうしている 〔5〕	よくある 〔4〕	F校	G校	H校	I校
尺度 〔選択数〕					単位制	コース制	国際学科	中高一貫
ノートをしっかりとする	81.3	74.0	75.2	72.1	65.8	75.1	75.5	70.8
先生の話をも熱心に聞く	58.4	> 55.9	> 40.6		47.0	54.1	54.3	54.2
ボーッとしている	26.6	< 28.7	< 36.2		41.0	28.0	26.5	29.9
いねむりをする	20.8	< 25.5	< 29.7	25.1	29.9	31.2	20.0	29.1
となりの人などとおしゃべりをする	22.2	13.5	23.4	17.0	9.5	26.3	20.5	31.4
「内職」をする	17.0		12.6	10.3	14.5	10.4	13.5	22.8
マンガや雑誌を読む	4.9	3.5	11.9	4.7	6.0	4.6	5.2	4.9
先生に質問する	3.8		7.3	5.1	4.3	16.8	25.1	21.5

vol.33 「高校生の教科観」 1991年（4都県の公立10校 2,111人）2年のみ

vol.46 「文系・理系と高校生」 1996年（4県の公立高校7校 2,390人）1～3年

vol.61 「高校生が『学校』で身につけるもの—『特色のある学校』と対比させて—」 2001年（3都県の公立高校5校 1,522人と首都圏の公立・私立高校4校 803人）1～3年

vol.65 「まじめさの構造—外見で判断しないでほしい—」 2002年（3都県の公立・私立4校 1,355人）1～3年

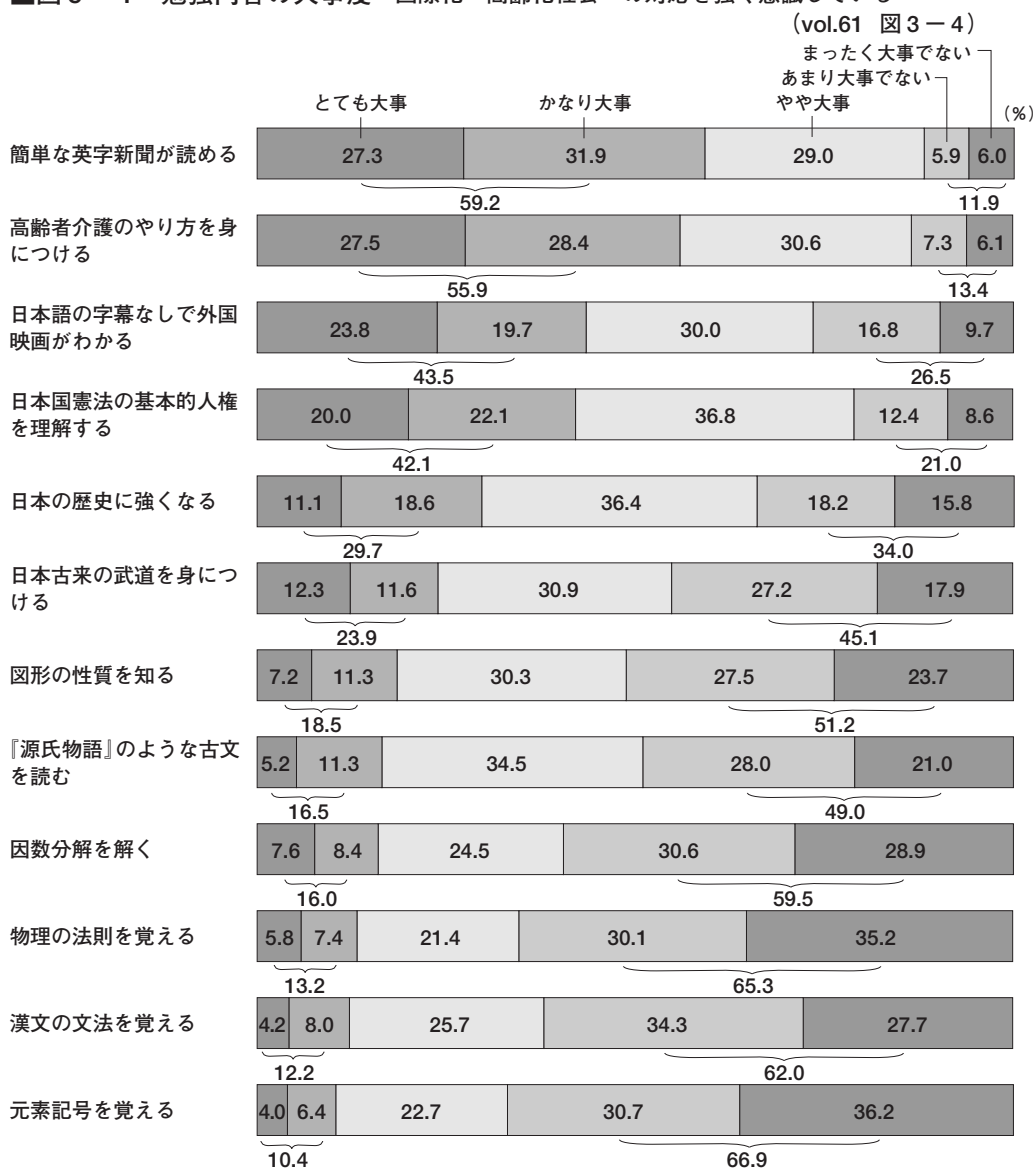
その一方で、漢文や古文のような実用的ではないが、日本人の教養としては基礎・基本ともいうべき大切な内容だと教師側が思っている項目には、関心度が低いという結果が出た。

この調査結果を踏まえると、もちろん、基礎的・基本的な科目をおろそかにしていいとは思わないが、今後とも一層進むであろう国際化・高齢化社会という日本の避けて通れな

い現状に対応したカリキュラムを編成することも、高校教育の緊急を要する課題といえよう。それは、生徒が求めている授業内容とも合致するのであるから。

ところで、生徒が意欲的に授業に参加できるようになるためには、特色のある学校との比較データを考慮すると、次のような工夫が必要ではないだろうか。

■図 5-1 勉強内容の大事度—国際化・高齢化社会への対応を強く意識している



[授業に積極的に参加できる要因]

㉔ 勉強内容…生徒が大事と考えている勉強内容を含んだ科目を選択科目などとして多数作る必要がある。

㉕ 教師…教え方に満足している生徒の授業に取り組む意欲は高い【vol.61 表3-3】。科目によって生徒が自由に教師を選べるような工夫が必要である。

㉖ 習熟度別の授業や少人数の多展開授業を大規模に取り入れることが必要である。そのためには教員定数の増員と施設の増設などが必要となる。21世紀を担う生徒を育成するために、今こそ教育投資への金を惜しむべきではないと思うがいかがであろうか。

㉗ 教師の教授能力を高めること。その最良の方策は、教師自らが研鑽を積むことはもちろんだが、生徒が教師に対して質問責めにしたくなるほど下調べをすべきではないだろうか。生徒の質問に窮することは教師の恥辱以外の何ものでもない。「生徒の質問に立ち往生することが最近はなくなったなあ!」という会話を職員室でよく耳にするようになったのは筆者だけだろうか。生徒たちの奮起に期待し、丁々発止の授業ができたらいいなと思っている。

以上の提言が本当に実現する日の近からんことを願っている。

3) 生徒が望む教師像

図5-2は、「次のような授業のとき、あなたは熱心に授業に取り組みますか」という設問に対する回答結果である。「はい」の割合をみていくと生徒たちの多くが、「受験にかかわる教科の授業」83.6%に熱心に取り組んでいるのは当然であるが、「自分の興味のある教科の授業」97.2%や「熱心な先生の授業」81.1%を求めているのである。言い換えるならば、授業に対する更なる工夫や熱意を教師に強く求めているといえるのではないだろうか。

さらに、「やさしい先生の授業」67.4%よりも「こわい先生の授業」81.0%に熱心に取り組むと答えていることは、授業にあつては

やさしさよりも高い教養を身につけて時に厳しく注意できるような威厳を持った教師をこそ求めている証拠といえよう。そのような教師は、時流に流されることなく授業以外の場面でも的確にアドバイスできる頼りになる存在といえよう。

ところで、先述のように高校生活への満足感・充足感をそれなりに持つ生徒が増加したのは、かつての高度経済成長期の高校生のよう遮二無二がんばる生徒（受験勉強時間の四当五落）や大志をいだく生徒、教師を含めたおとなに徹底的に反抗する生徒などと異なる状況を示している。むしろ、マイペースで、自分なりのこだわりを大事にする生徒たちが多数を占める現状では、受験一本槍や「部活命」的な教師にはなじめないのは当然といえよう。

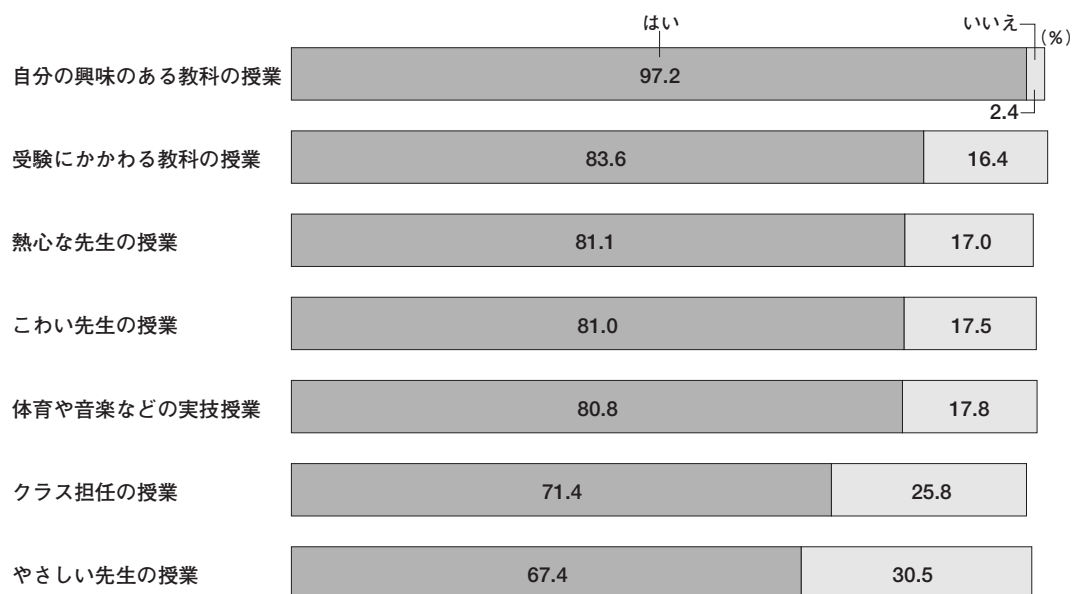
国際化・高齢化社会の到来に対応して学校の機能も従来より変わらなければならない。教養を重視し、人間の生き方とはどうあるべきかなどを指導できる教師が求められているのではないだろうか。そうした人材を育てるためには、教師にも「ゆとり」を保障し、種々の教養を身につけるための自主的研修の機会を保障すべきであろう。例えば、自己啓発のために有給で授業を長期間離れて、大学院などで研修できる機会などを多くの教師に認めるべきだと思う。研鑽を積んだ「ゆとり」のある教師こそ、多様な生徒とのコミュニケーション能力を高めることができ、厳しさと情熱を持って生徒たちを受け入れることができるのである。

一方で、今日の風潮は、正・不正の価値判断よりも、利益になるか否かといった利害の判断を重視する考え方が優先されるようになったと感じる。教育の世界にあっても戦後の平等規範が後退し、新自由主義の「自己責任」論的議論がなされるようになっていく。何でも新しい考え方が時代の流れに沿っていると考えるのはどうだろうか。時には、戦後民主主義の教育の理念に立ち戻ってみることも必

要ではないのだろうか。「正義とは何か」「平等とは何か」といった時代が変わろうとも伝えるべき事項を真摯に持ちつづけることで

きる教師も必要であろう。生徒が望むか否かにかかわらず、そのような教師であり続けたいと思うのは筆者だけだろうか。

■図5-2 どのような授業に熱心に取り組むか (vol.65 図2-1)



2. 教育改革と高校教師の職能課題

1) 高校教育の政策的課題と学校・教師

戦後教育の総決算をスローガンに臨時教育審議会が1984年に発足した。以来20年が経過した。この間のわが国の高校教育の改革の足取りをたどりながら、学校と教師に問われている課題についてみておきたい。

戦後新制高校は1948（昭和23）年に発足した。小学区制、総合制、男女共学制の高校三原則を基本理念とし、地域の中の高校としてスタートした。高校進学率は1950（昭和25）年には42.5%にすぎなかった。持続的な拡大を示しながらも70%台に乗るのは1965（昭和40）年である。社会における高校の性格や機能は進学率の上昇とともに変容した。1970（昭和45）年82.1%、1974（昭和49）年90.8%と高校進学率は急カーブを描き、膨張を遂げている。現在は97%台で推移する状態である。現在に至る高校改革は、こうした量的拡大に伴う質的変容が現れたす1970年代に始まるとみてよいであろう。そうした契機となったのが1971（昭和46）年の中教審答申「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」（いわゆる「四六答申」）であり、教育課程の多様化、個人の特性に対応する教育方法の開発、6・3制度の見直し・学校体系の先導的試行などが示された。

こうした流れは、臨教審答申における6年制中等学校や単位制高校の創設、修業年限の弾力化などの提言につながっていく。改革の背景として日本社会の都市化や核家族化の進展で家庭の教育力の低下や地域連帯感の希薄化が指摘され、一方進学率の急上昇により多様な生徒を受け入れることになり、高校教育の質的変容が迫られていたことがある。また、受験競争の過熱化や校内暴力、いじめ、登校拒否、学級崩壊などの教育社会一般の抱える問題の深刻化が広範な社会問題にもなってきた。

こうして1990年代に入って、高校改革は本

格化する。第14期中教審答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革」（1991年）は高校改革問題を正面から取り上げ、「今日の高等学校は、一部の者が進学する学校から国民的教育機関へとその性格を変え、多様な生徒を受け入れ、なおかつ、彼らの半数以上を大学・短期大学・専修学校等へ進学させるという役割を担っているのである」¹⁾と社会における高校教育の性格、機能の変化を指摘した。そして改善策としては、1. 総合学科の新設、2. 新タイプの学校の奨励、3. 単位制の活用や課程間、高校間（普・職）の連携、4. 特定分野の能力伸長者への例外支援措置、5. 高校や大学の入試制度の改善などが提言され、実行を強く促した。答申に沿って「高校教育改革推進会議」を文部省内に設置し、具体的方策を示しながら、全国的な高校改革が推進された。学校制度の複線化構造として、中高一貫教育の導入を図るため、1998年に「中等教育学校」の創設に関する学校教育法の改正も行われている。間髪をいれずに多くの改革が、教育制度の根幹にかかわる構造改革として着手されており、高校教育の現場はその対応に追われている。諏訪は自らの教員体験を通して次のように述べている。「80年代後半にS県では、高校の差別化・個性化を図るために、普通科のコース設置や転科が県教委の指導のもとに強力に推しすすめられた。私ものっぺらぼうな普通科が生徒達の実態に合わないことは痛感していたので、校長の指導を受けて外国語コース設置の検討をすすめ、教員の支持を経て1990年に設置する運びとなった。（中略）だが、制服の改定等を含みリニューアルプランが地域に波風を立てたのはわずか2、3年だった。すぐに外国語コースは応募者が定員を割りはじめ、かえってお荷物に転化した。一部伝統校の数学科と一部の体育科を除いて、全県的に同じ状況であった。（中略）『転科・コース制』への熱は

なんら総括（反省）されずにひっそりと打ち切りになり、次は『単位制』熱の時代に入った。数年後にほとんどのコースが普通科にもどった（県が認めた）。²⁾

高校の在籍者数は1990年の約560万人をピークに生徒減少期に入った。完全学校週5日制が2002年度から実施され、「ゆとり」の中で「基礎学力の向上」と「生きる力」を育てる教育が標榜されている。高等学校教育における改革の方向は、「多様な生徒の実態に対応して、各学校が生徒それぞれの個性を最大限に伸長させるため、生徒のニーズを探り、学習の選択幅をできるかぎり拡大して、多様な特色ある学校づくり」³⁾に向けられている。

このようにみえてくると、高校生徒数の急増から減少という大きな社会的インパクトを受けて高校改革が進められたことがわかる。しかしながら、教育の法制度上の改革や教育行政による改革を実効あるものにするのは、各学校の具体的な教育指導のあり方であり、またそれを担う校長や高校教師の意識と指導力に負う部分が大きい。そうした点で高校改革を受け止める学校現場においては、行政レベルとかなりの温度差がみられたことは確かなようである。

2) 教師の教育観と教職に対する意識の変容

では、高校教師は、授業や日常の生徒とのかかわりの中に何を求め、教師としての在りようを考えてきたのであろうか。高校教育の多様化とともに、教師に求められる指導技術や資質能力などの面にも大きな変化が現れている。高校間格差が広がるほど、学校や教師に対して教育内容や教育方法の多様性や選択性、またそのための創意工夫が要請されてきた。そうした変化に高校教師はどう応えようとしてきたか。1983年と2002年の約20年間のインターバルを置いた、高校教師の意識調査(vol.10「高校教師の教育観とライフサイクル」(1983年)、vol.67「教育改革期の高校教師」(2002年))をもとに分析を進める。この20年間は述べてきたように、まさに日本における戦後の高校教育改革の始点と着地点にほぼ重なる時期といえよう。両調査とも全日制普通科の教師を対象にしたサンプルであり、全国規模の調査である。ここでは高校教師の授業や教育指導の方法、生徒観、教職意識などの側面の変化を中心にみていきたい。

① 授業の指導方法

まず、表5-3は授業を行うときにとる指

■表5-3 授業の指導方法 (vol.10・vol.67から)

	とでもしている		かなりしている		あまりしていない		まったくしていない	
	1983年	2002年	1983年	2002年	1983年	2002年	1983年	2002年
板書に気をくばっている	18.1	14.4	56.7	57.9	23.4	26.4	1.8	1.3
手作りの資料を使った授業をしている	13.2	20.4	40.3	35.5	40.8	38.9	5.7	5.2
宿題や課題を出している	8.4	13.1	42.3	36.2	42.9	43.3	6.4	7.3
ノートのとり方を指導している	7.1	7.1	41.9	32.4	44.7	52.4	6.3	8.1
教科書の順序にこだわらず授業を進める	8.7	10.6	35.1	28.4	45.3	49.3	10.9	11.6
小テストをたびたびしている	10.5	13.3	32.8	28.9	43.7	40.2	13.0	17.6
脱線して授業が終わることもある	2.1	1.0	16.1	9.8	61.8	61.7	20.0	27.4

vol.10「高校教師の教育観とライフサイクル」1983年（全国の全日制普通科高校の教師 1,843人）

vol.67「教育改革期の高校教師」2002年（全国の公立・私立高校の教師 774人）

導方法のスタイルを比較したものである。高校生の量質における20年間の変容は、教師の指導スタイルにどのような変化をもたらしたか。教師としての授業の基本的な配慮事項といえる「板書に気をくばっている」のは、「とても十かなり」している割合でみると、ともに7割以上で大きな変化はみられない。しかしながら、指導技術の細部においては教師の授業スタイルに変化がみられる。教師が「とてもしている」と答えた割合を比べると、「手作りの資料を使った授業をしている」(1983年13.2%＜2002年20.4%、以下の比較も同様年次)、「宿題や課題を出している」(8.4%＜13.1%)、「小テストをたびたびしている」(10.5%＜13.3%)というように、単にチョーク片手に板書とトークで済ますような指導法ではなく、準備にも時間を要する手作り資料

を用意し、宿題や小テストの実施などきめ細かい指導に力を入れる教師の割合が増加している。その反面、「とても十かなり」している割合でみても「教科書の順序にこだわらず授業を進める」や「脱線して授業が終わることもある」というような、授業の定型にとらわれない教師は少なくなっている。教師自身が授業を教授理論に即して、基本どおりの順序で進行・展開することを強く意識するようになってきているようだ。また、授業で教える内容が多かったり、基礎的な理解を徹底させるのに精力が向けられるために、授業そのものに余裕がなくなり、興味深い脱線授業などがやりづらくなっているのかもしれない。この20年間の確かな傾向として、授業方法としてきわめて合理的で、効率的な指導技術の採用が高まっているようである。

■表5－4 生徒観（1983年）（vol.10 表Ⅲ－4から）

(%)

	とても多い	かなりいる	少しいる	ほとんどいない
家で毎日、予習・復習をする	8.0	32.9	47.0	12.1
ノートをきちんととる	22.0	63.5	14.2	0.3
クラブ・部活動に打ち込む	5.3	53.3	40.5	0.9
自分の意見をはっきりもっている	1.3	25.1	61.9	11.7
学校の規則に反発を感じている	3.4	29.6	57.3	9.7

② 生徒観

次に、教師の目に映る生徒の姿から、生徒観の変化を探ってみたい。質問の表現や回答尺度に多少の違いがみられるが、ニュアンスや内容はほぼ同様の質問とみなしてよい。表5-4は1983年調査、表5-5は2002年調査の結果である。回答尺度の差異を考慮しながらも、教師が生徒に対して持っている、生徒像のおおよその特徴傾向の変化をみることはできる。

③ 授業に対してまじめな生徒が増えている。予習、復習などの勉強にまじめに取り組む割合は増加した。逆に、生徒の不熱心さを厳しくみるような教師は減少し、よく予習復習する生徒が「少しいる＋ほとんどいない」（1983年）59.1%から、「3分の1くらい＋ほとんどいない」（2002年）43.0%というよう

にかなり明確に減ってきている。

④ 部活動に打ち込む生徒の姿はやや減少してきている。

⑤ 自分の意見をはっきり持って、発言できる生徒は少なくなっている。むしろ「ほとんどいない」とみる割合が多くなっている。

⑥ 校則に対しては従順な生徒が多い。1983年に校則に反発する生徒が多いとみた教師の割合は33.0%、しかし2002年では校則を守る生徒が半分以上とみる教師は95.5%の高い割合である。

すなわち以上の生徒観の変容は、まじめでおとなしく、従順な高校生が増え、逆に勉強以外の部活動に熱心であったり、時に学校や教師に反抗する、自己主張型の高校生が減ってきたことを意味している。

■表5-5 生徒観（2002年）（vol.67 巻末集計表から）

(%)

	ほぼ全員	7割くらい	半分くらい	3分の1くらい	ほとんどいない
授業の予習復習をする生徒	2.9	21.4	32.7	30.1	12.9
授業中、熱心に授業を受ける生徒	15.2	46.6	27.1	10.7	0.4
部活動に入って活動する生徒	3.9	36.7	41.4	17.2	0.8
自分の意見をみんなの前で発言できる生徒	1.8	15.2	29.2	40.0	13.8
規則を守る生徒	14.3	62.5	18.7	4.3	0.3

③ 教職観

では、自らの教師としての仕事を客観的にどのようにみているのか。20年間における生徒観のずれは、教師としての仕事にもあらわれてくる。表5-6は、高校教師の職業評価を倫理性、職務内容、社会的、経済的な評価などの側面から比較している。教職観の変容の特徴傾向を要約してみよう。

㉑ 「生徒と接する喜びのある仕事だ」と「とてもそう思う」割合は32.4%→49.5%というように、生徒に寄り添う気持ちを持つ教師が増えている。

㉒ 職務遂行に要求されるのは高度な専門的知識や体力であるとみている。とりわけ、高校教師の仕事が「体力のいる仕事だ」と「とてもそう思う」教師は26.7%→35.6%とおよ

そ9ポイントの上昇である。

㉓ 以前よりは「時間にゆとりのある仕事だ」とは思えなくなっている。

㉔ 社会的な尊敬度にあまり変化はみられないが、「経済的に恵まれた仕事だ」と感じている。

近年の教職観の特質は、人間味のある教師としての資質が要求され、しかも時代の変化に対応できる高い専門性も備えなければならないという、柔軟性のある幅の広い資質が求められている。一方において、学習指導にもまして生徒指導面の仕事内容の増大が、教師生活のゆとりを奪っている現実がうかがわれる。高校教師の仕事に「体力」の必要性を強く感じさせるのも、その表れであろう。

■表5-6 教職観 (vol.10 表Ⅱ-11・vol.67 表3-1 から)

	(%)									
	とてもそう 思う		まあそう 思う		あまりそう 思わない		ぜんぜんそう 思わない		なんとも いえない	
	1983年	2002年	1983年	2002年	1983年	2002年	1983年	2002年	1983年	2002年
精神的に気苦労の多い仕事だ	43.1	43.7	46.1	45.8	4.2	2.2	0.6	0.4	6.0	7.9
生徒と接する喜びのある仕事だ	32.4	49.5	53.8	42.2	2.6	1.9	0.3	0.4	10.9	6.0
体力のいる仕事だ	26.7	35.6	52.1	49.9	6.8	3.6	0.7	0.4	13.7	10.5
専門に関して高度の知識が必要な仕事だ	25.1	30.9	52.0	53.8	7.9	4.8	1.0	0.1	14.0	10.4
社会的に尊敬される仕事だ	7.0	5.9	42.2	41.2	15.8	14.0	1.8	2.6	33.2	36.3
時間にゆとりのある仕事だ	2.1	1.9	17.4	10.4	35.6	36.8	25.1	30.6	19.8	20.3
経済的に恵まれた仕事だ	0.6	4.0	11.6	36.0	44.7	21.2	15.4	6.0	27.7	32.9

3) 高校教師の力量形成と教職の課題

教育改革の必要性が叫ばれ、現実には教育の構造的な改革が進んでいる。職業としての高校教師を取り巻く環境は、この20年間の教職観の変容をみてもわかるように、多くの注文が課せられ厳しさを増している。教師の悩みや不安、ストレスを訴える声が教育現場でも目立ってきた。2002年の教師調査においてふだんの気分の状態（「いつも十ときどき」感じる割合）を尋ねた結果、「朝起きると学校の仕事が気になりだす」と答えた教師が59.2%にのぼった。次いで、「放課後になると気分がはれはれとする」と感じる割合は39.4%であった。現職の高校教師の半数近くは、教師としての仕事にユウウツさを感じているようである【vol.67 表3-5】。ちなみに教職を辞めたいと感じている教師（「いつもそう思っている」；「数回あった」）の割合は、1983年5.5%；22.7%→2002年6.4%；23.5%と増加傾向にある【vol.10 図Ⅵ-3・vol.67 表3-3】。教師の健康状態とバーンアウトの関連を分析した研究によれば、「高校の職場環境は生徒の成績やその他の要因で進学校と中間校と教育困難校の三層に分かれているのである。前二層をみている限り小・中学校と比較して教育の自由の理念が生きており、一定の余裕が感じられる側面もある。ところが教育困難校にあっては、リストラの波に洗われている一般社会の厳しい労働実態を踏まえても想像を超えた現実がある」という⁴⁾。

① 職場環境の変容

このような意識実態の背景要因を探ると、教師の多忙化がまずあげられる。完全学校週5日制や新学習指導要領の実施、入試選抜制度の改変などによる関連業務の増大、校内改革のための会議の増加や学校説明会の休日開催など、高校現場の多忙化要因は教育改革に伴うものが少なくない。とりわけこうした影響は、精神的にも肉体的にもベテラン教師に集中しがちである。また、少子化の影響によ

り新採用教員が抑えられ、職場の年齢構成を引き上げる結果、教員社会の高齢化現象が起きたことも手伝っている。

もう1つの大きな要因は、日々接する生徒の変化である。高校生に限らず日本の若い世代一般に通じる、他者や社会への無関心、フリーター志向やパラサイト・シングル増加などに象徴される「青年像」の変質がある。多くの高校教師にとって、自らの青年時代の体験がほとんど通じ合わないような、いわば異文化状況での教鞭である。そうした現代の混迷する高校教育にあって、vol.60「高校生の自我像」（2000年）では、教師一生徒関係について、『人の生き方について考えたり討論したりする授業』は『ない』89.7%（『あまり十ぜんぜん』）、『学校の授業は退屈である』77.2%（『とても十ややそう』）と高校の先生の授業には満足度は低い。しかし、『先生から人の生き方や人生について教えられること』が『ある』36.0%、『心底あこがれる先生との出会い』が『あった』37.4%とかなりの生徒が、先生から大きな影響を受けていると解析している【vol.60 p.80】。

② 求められる資質能力とは

変化する社会とともに、これからの高校教師に期待される資質能力は、いかなるものと考えられるか。教師は教員免許状を取得し任用され、教育経験を蓄積していけば、なんとか一人前になるという考えが根強い。教育の専門家＝専門職能人としてみれば、常に社会変化や子どもの変化、ニーズを的確に捉えて、自らの教育実践に組み込む専門的知識・技能が求められる。そのためには教師の職能成長こそが専門性を深め、時代の求める教育ニーズに応える力量を形成することになる。門脇はわが国の教師の社会力の乏しさを指摘し、その理由として「おとな嫌いの性向」と教師自身が学校教育を通して「自分で考える」訓練をしてこなかった2点をあげている⁵⁾。すなわち、「子どもが好き」という教員採用試験時の志望動機の定番の回答は、裏を返せば

「おとなが嫌い」「おとなとつきあうのがイヤだ」という意識が基底にあるという。まして教師自身に考える力がなければ、これからの時代に求められる「自ら考え、学び、課題解決能力」を有する「生きる力」などはとても育てられないということである。

では21世紀の新たな時代と教育状況の変化の中で、教師の専門性をどのように捉えたらよいであろうか。わが国の学校教育では、教師は教科の授業を核に、教科書を中心に教える＝知育・学習の指導者という観念が伝統的であった。教師は自らの獲得した知識と狭い経験の範囲で、子どもに何でも教えたがる傾向があった。つまり、教師中心の授業観や学校観が根強くある。しかし、ITが進む情報化社会ではもはや教師だけが知識、情報をもつ優位者ではなくなっている。教師自身が不断にイノベートする意欲と新たな知識技術を進取する努力がなければ、ますます「つまらない授業」が繰り返され、学習意欲を喪失した「授業嫌い」の子どもを作り出すしか学校教育は機能しなくなっていく。

一方、社会分化が進展することにより、一人ひとりの個性に即した教育のニーズはこれまで以上に増大し、しかも社会性や集団性の希薄化が深刻になる傾向はいなめない。学校教育や教師に期待されるのは、このように一人ひとりをケアしうる相談的（カウンセリング）能力であるとともに、社会文化との連帯や媒介を図れる社会参画能力である。教師自身の文化的教養と積極的な行動力、組織力が学校と地域をネットワークする力になる。

③ 教職の課題

最後に、このような教師の力量形成は、むしろ個人レベルでは限界がある。そこで専門的職能集団としての学校組織のあり方が問われてくる。日本の教員集団の特質に「同僚との調和」⁶⁾の規範化があげられたり家族制度の擬制としての学校組織の「である」論理⁷⁾こそが日本の職場組織の改善をはばむ問題点と指摘されたりしている。いずれにせよ日本

の教員組織が、横並びの、出る杭は打たれる集団規範を体質化していたことは確かであろう。教師の力量形成を支援する学校組織がうまく機能しない要因の1つでもある。教育改革の課題である学校評価や人事考課制度の導入も、そうした組織の停滞を競争原理の導入により打ち破ろうとする狙いがうかがわれる。臨教審以来の教育の自由化論、新自由主義の教育理念は、教育の規制緩和から競争原理の導入という手段・図式のもとに、学校選択や教員の評価制度の改革を推進してきた。全国に先駆けて2000年度から東京都は学校教職員の人事考課制度を導入し、「文部科学省は、これらの都の教員政策に触発されて、他の府県に類似の政策を策定させるべく、調査研究のために府県に交付する補助金の予算措置を講じている」⁸⁾という。

こうした人事考課制度にはらむ問題点として「①力量形成と業績査定（資質向上主義と成果主義）、②優秀性の報償と不適格者の摘出、③絶対評価と相対評価、といった具合に、両立しがたいベクトルの組み合わせを1つの制度の中に盛り込もうとしたものである」⁹⁾との重要な指摘がある。教師の実践に対し市場原理的な成果主義を適用することになれば、教師の業績評価が直接的かつ短期的な教育効果（成果）に向けられがちになることは否定できない。教師の専門性を高める現職研修が、そうした成果主義の一過程に位置づけられることも当然の結果である。「不適格」基準が曖昧なままに、“悪貨を良貨が駆逐する”ように期待して、教師の日常の教育活動全般に管理的な網掛けを図るような人事考課は、結局教員同士が自己規制をし、教員社会を萎縮させることに帰結する問題をはらんでいる。

むしろ教員の力量形成は、多様な資質能力の開発を要請される状況において、職場組織の職能分化を自律的に進める場がのぞまれる。職能分化の前提には、個別教員の職能成長と協業体制の構築が不可欠である。つまり教師自身が専門教科や学級担任などの縄張り意識と相互の無批判性から脱却する姿勢が必要で

ある。そうした中で、高校教師自らが、例えばカウンセリングの基本や、アクションリサーチやエスノグラフィーなどの調査・診断的な研究の理論や技術を身につけることが重要である。こうしたことは、これからの自己の教

育実践のみならず学校の組織経営などの教育活動全般に対しても積極的に参加し、客観的に分析点検し、課題発見が可能となるような資質能力を高めることになろう。

【注】

- 1) 文部省『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革—第14期中央教育審議会答申—』平成3年5月、p.17
- 2) 諏訪哲二「生徒の変容と高校教育改革」『月刊 高校教育』2002.5、学事出版、p.34
- 3) 『文部科学白書 21世紀の教育改革 平成13年度』、文部科学省、平成14年1月、p.190
- 4) 大前哲彦「教師と健康」日本教師教育学会編『教師として生きる』学文社、2002年、p.139
- 5) 門脇厚司『学校の社会力 チカラのある子どもの育て方』朝日新聞社、2002年、p.228—233
- 6) 永井聖二「現代の教員社会と教員文化」『日本教員社会史研究』亜紀書房、1981年、p.577—618
- 7) 由布佐和子「教員文化と学校改善」『日本の教育第4巻 学校改善と教職の未来』教育開発研究所、1990年、p.35—63 由布氏は、社会学者マッキーバーの集団類型論を下敷に、「わが国では学校は『する』論理をもつアソシエーションであるというよりは、『である』論理が支配するコミュニティである」(p.59)と述べる。つまり、属性重視の以心伝心のコミュニケーションが支配的なコミュニティ概念の特質を学校組織にみている。
- 8) 佐藤 全、松澤 杏「政策過程から見た教員評価制度の特質と課題」『教育社会学 研究第72集』日本教育社会学会編、2002年、p.102
- 9) 中田康彦「教師をどこまで『評価』できるか」日本教師教育学会編『教師として生きる』学文社、2002年、p.184

6

家族の変容とジェンダー

深谷和子・三枝恵子

1. 高校生の性意識と性行動

高校生の性意識や性行動などの問題は、身体上の発達加速に伴う生物学的性成熟が大きく前傾し、さらに性情報の氾濫や価値の多様化などの社会的変化への対応の遅れが関係していると指摘される。「モノグラフ・高校生」ではvol.26「高校生と性」〈1988年〉、vol.43「高校生の性とデート」〈1994年〉、vol.52「援助交際」〈1997年〉で高校生の性問題に視点をあて、性意識と性行動を探っている。

〈 〉内は調査実施年

マスコミで目にする資料や映像をみたり、また街で若者たちの姿を目にしたりすると、若い世代の性の風俗や性行動は、この10数年間でいっそう活発化してきた印象を受ける。しかし、vol.26「高校生と性」(1989年)の調査時点では、まだ「性」を大声で語ることはタブー視され陰の文化として扱われていた。高校生の場合も例外ではなく、異性とのつきあいもどこかコソコソとし、抑圧され歪められて受け取られがちで、その行動にはアメリカの高校生のような明るさとオープンさはなく、また、旧世代の親や教師も心のどこかで高校生の異性行動に不安を捨てきれなかった。ところが、1996年から1997年頃にかけて、いわゆる「援助交際」といわれる性風俗が世の注目を集め、さらに、携帯電話やインター

ネットの普及が、高校生の異性とのコミュニケーションスタイルを大きく変えてしまった。

そこで、高校生の性意識と性行動をvol.26「高校生と性」(1989年)、vol.43「高校生の性とデート」(1995年)、vol.52「援助交際」(1998年)から10数年の変化を追ってみた。

1) 高校生の性意識の変化

～セックスへの垣根が低くなった～

① 性体験の許容性

図6-1は、性体験の許容性を示した。「避妊さえ完全ならば、高校生どうしセックスしてもかまわない」に対する賛否である。女子の場合、1988年は57.5%と半数を超える高校生が性体験を許容しており、当時この数値はおとなたちを驚愕させたものだが、わずか6年後には、男子は61.9%から77.3%へと15.4ポイント増加し、女子では57.5%から76.7%にも達した。とりわけ女子の意識の変化が顕著である。しかも、つきあっている相手がいる高校生は相手のいない高校生に比べて、セックスの許容率が10～16ポイントほど高く、女子も男子も8割を超える許容率である【vol.43 表2-15】。

次に、未婚時代の性体験が結婚の障害にな

るか、それとも豊かな性の体験として評価されるのか、「結婚するまでに、何人かとセックスの体験をしておいた方がいい」とする意見での賛成の割合をみてみよう。1988年の数値を参考までに2002年の第54回日本教育社会学会研究発表（深谷和子・三枝恵子）の数値（以下*印は2002年日本教育社会学会研究発表）と比較すると、以下ようになる。

	1988年		2002年*
女性の場合……女子	39.4%	≪	75.2%
男子	36.5%	≪	73.2%
男性の場合……女子	69.3%	<	84.5%
男子	65.7%	<	83.1%

≪20ポイント <10ポイント以上の差

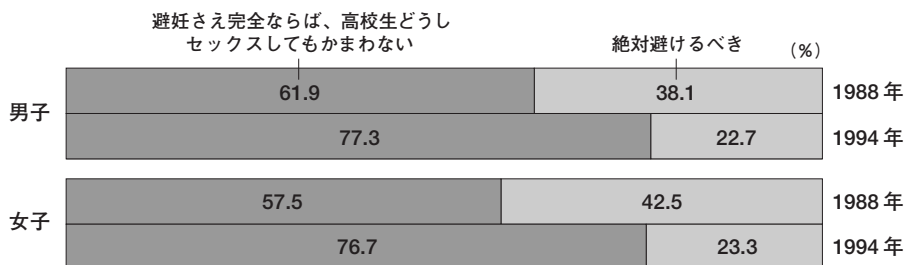
1988年では、男性の場合と女性の場合に、大きな数値の開きがみられる。「何人かとセックスの体験をしておいた方がいい」とする者は、女性については4割弱、男性については7割弱と差が大きく開いており、「婚前の性体験は男性に許容し女性には純潔を求める」という結婚に対する伝統的な価値観がみられ

た。しかし、2002年*の肯定率では、男性の場合も女性の場合も、その数値は大きく上昇し、特に女性の場合には「体験しておいた方がいい」と答えた者は男女とも7割を超え30ポイント以上増加している。すなわち、高校生は結婚相手以外との性体験は、結婚にあたって避けるべき行為や障害になる行為ではなく、むしろ愛し合っている男女の自然な行為と捉えているようである。

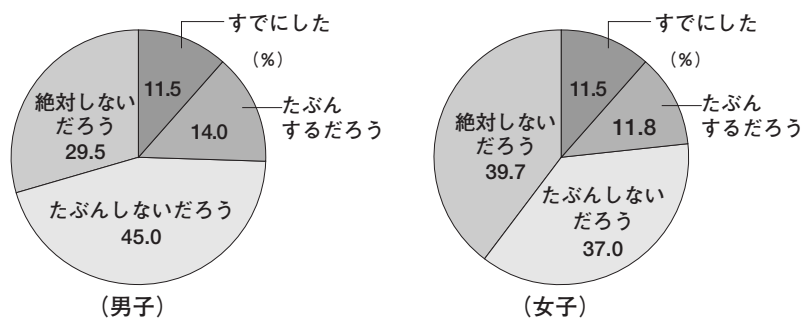
② 性体験とレディネス

次に図6-2は、現在のセックス体験と今後高校卒業までに自分がセックスを体験するかの予測を尋ねたものである。男女とも「すでにした」とする者は11.5%、「たぶんするだろう」を合わせるとほぼ4人に1人の割合で高校時代にセックス体験の可能性を推測できる。この変化を2002年*の結果でみると、男子で「すでにした」17.8%、女子では20.1%、「たぶんするだろう」を合わせると男子36.6%、女子38.2%と約4割となり、女子の

■図6-1 性体験の許容性 (vol.43 図A)



■図6-2 性体験とその予測 (vol.43 図3-7)



増加が著しく、性体験へのレディネスが十分整っていることがうかがえる(図表省略)。

関連して「恋人から性的な関係を求められた女子高校生について」してみると、以下のようになる。

	女子	男子
避妊さえしていれば、 応じてかまわない……………	44.8% (72.9%)	52.5% (76.9%)
拒否して恋人との関係が 崩れそうだったら、 しかたがない……………	20.9% (10.4%)	21.6% (11.8%)
恋人との間が崩れても、 拒否した方がよい…………… (拒否すべきである)	34.3% (16.7%)	25.9% (11.4%)
() の数値、項目は2002年*		

1988年には、「恋人との間が崩れても、拒否した方がよい(拒否すべきである)」と性体験に極めて否定的な者は女子の3人に1人、男子は4人に1人であったが、2002年*にはそれぞれ半減し、やはり性体験を許容する者(「避妊さえしていれば、応じてかまわない」＋「拒否して恋人との関係が崩れそうだったら、しかたがない」)は男子9割、女子では8割強となる。

③ 学業と異性とのつきあい

次に、表6-1、表6-2で、学業と性意識の関係をみてみる。つきあっている相手ができると成績はどうなるのか。表6-1によれば、「高校1、2年生につきあっている相手ができると成績が下がる」とする者は、「とても十少し」そう思う割合を合わせても3割しかないが、「むしろよく勉強するようになる」と思う者も1割にすぎず、大半は「ほとんど変わらないと思う」と考えている。また、表6-2で「大学受験を控えた時期(高校3年生)のつきあい」をみると、「できれば、受験まで、完全につきあいをやめた方がいい」は、女子3.8%、男子6.8%とごくわずかで、放課後につきあうのは多少制限するが、多くが「電話や登下校を一緒にする」までの行為を制限する必要がないと考えており、恋愛や異性とのつきあいを特別な非日常の出来事としては受け止めていない。

このように、高校生は恋愛や異性とのつきあいを日常性の中で捉えており、その背景には生徒の性意識が大きく変化し、とりわけ女子の性意識が男子に比べ積極的で活発化していることがあげられる。すなわち、高校生にとって、意識レベルではセックスの垣根が低くなり、とりわけ女子の意識の積極化は、セックスだけでなく、広くこれまでの伝統的な結婚観を越えようとする構えの増加をも意味すると考えられる。

■表6-1 高校1、2年生につきあっている相手ができると成績は下がるか (vol.43 表2-8)

	男子	女子
とてもそう思う	5.5	3.6
少しそう思う	25.3	26.2
ほとんど変わらないと思う	56.8	60.4
むしろよく勉強するようになる	12.4	9.8

■表6-2 相手のいる3年生のつきあいをどうすればいいか (vol.43 表2-9)

	男子	女子
できれば、受験まで、完全につきあいをやめた方がいい	6.8	3.8
電話くらいか、登下校を一緒にするくらいにしておいた方がいい	57.4	71.6
放課後もつきあって、あと勉強すればいい	35.8	24.6

2) 高校生の異性交友と性行動

～性行動の垣根も低くなった～

① 高校生の異性観

高校生の対異性行動の前に、その背景ともいうべき異性観を好みのファッションやタイプからみておきたい【vol.43 表2-1】。高校生が好むファッションをみると、男子が好感を持つ女の子は、「サラサラの髪の似合う子」「ふつうのセーターが似合う子」「紺のゆかたが似合う子」「洗いざらしのジーパンとシャツが似合う子」「ブレザーにチェックのスカートが似合う子」など自然で普段着のいわば女性性を感じさせない相手であり、逆に「DCブランドでかっこよくキメている子」「レースやフリルのたくさんついた服が似合う子」「スパッツコンシャスが似合う子」「超ミニスカートが似合う子」など女性性を強調した服装や成熟した女性を感じさせる服装はあまり好まれない。女子が男子に求める傾向もほぼ同様で「洗いざらしのジーパンとシャツが似合う子」や「ふつうのセーターが似合う子」「ネルシャツをルーズに着るのが似合う子」

「制服をきちんと着ている子」などである。

次に表6-3により、好みのタイプをみてみよう。男子が「好感を持つ異性のタイプ」として最も好感が持てるのは、「悩んでいるとき、さりげなく気をつかってくれる女の子」で母親のように支えてくれるイメージであり、以下、特に特性のない平凡ないわばノン・セックスで自分をしのぐ価値を持たないつきあって楽な子であり、社会的達成意欲が高い子や誇張された女性性やおとなっぽさを持つ子などはあまり好まれないようである。女子が「好感を持つ異性のタイプ」でも「気をつかわないですむ友だち感覚の男の子」「男どうしのつきあいを大切にする男の子」「スポーツが得意な男の子」「女の子にやさしい男の子」が上位としてあげられ、男子とほぼ同様に安全なノン・セックスな傾向がみられる。しかし、「キスの上手な男の子」「かっこよくキメている男の子」なども約5割の肯定率があり、女子は男子より危ないタイプへの関心の幅が広く、性的にはおとなっぽい子が多いといえる。

■表6-3 好感を持つ異性のタイプ (vol.43 表2-4 から)

(1) 男子 (%)					
	とても好き	わりと好き	小計	あまり好きでない	ぜんぜん好きでない
悩んでいるとき、さりげなく気をつかってくれる女の子	41.2	49.6	90.8	6.6	2.6
気をつかわないですむ友だち感覚の女の子	29.9	48.7	78.6	16.0	5.4
地味で目立たないが、やさしい女の子	18.3	54.3	72.6	21.3	6.1
おとなしい清楚な感じの女の子	25.6	42.3	67.9	25.1	7.0
勉強のできる女の子	11.2	43.4	54.6	34.6	10.8
流行のファッションでキメている女の子	6.5	34.6	41.1	43.3	15.6
キスの好きな女の子	9.9	25.6	35.5	44.7	19.8
お小遣いをたくさん持っている女の子	7.9	19.1	27.0	45.6	27.4

(2) 女子 (%)					
	とても好き	わりと好き	小計	あまり好きでない	ぜんぜん好きでない
気をつかわないですむ友だち感覚の男の子	54.6	40.9	95.5	3.8	0.7
男どうしのつきあいを大切にする男の子	43.6	50.9	94.5	4.6	0.9
スポーツが得意な男の子	54.3	39.3	93.6	5.1	1.3
女の子にやさしい男の子	49.6	40.3	89.9	8.8	1.3
勉強のできる男の子	8.5	48.9	57.4	32.3	10.3
かっこよくキメている男の子	6.0	43.1	49.1	41.2	9.7
キスの上手な男の子	11.9	36.9	48.8	38.7	12.5
お小遣いをたくさん持っている男の子	8.7	38.9	47.6	41.9	10.5

② 高校生の異性とのつきあい

それでは、高校生の異性行動の現状をみていきたい。高校生たちは、過去に異性に対して、いつ頃から交友関係を持ち始めたのか。これまでに異性に交際を求めたり求められたりした経験のある男子は50.3%、女子68.3%【vol.26 図Ⅳ－1】。そして異性との交際を求めたり求められたりした時期は、小学校時代が2割、最も活発になるのが中学時代で、3年間でほぼ6割弱の生徒がつきあいを求めたり求められたりしており、中学時代は異性への気持ちを具体的に表現する時期となっている【vol.26 巻末集計表】。異性との出会いのきっかけは「友だちに女の子（男の子）を紹介してと頼む」や「同じ部活動や委員会に入る」「他校の学園祭に行く」など、大多数が学校を中心に行動している【vol.43 表3－15】。

そうした経験を経て、表6－4より現在つきあっている相手のいる生徒をみると、1988

年では女子20.3%、男子15.0%、1994年や2002年*と数値を比較してもほとんど差がみられず、いずれの調査でもつきあっている生徒は女子20%、男子15%前後となる。そして、高校生のつきあう相手については「同級生」が圧倒的で、次いで「先輩・後輩」となり、女子では「社会人」がほぼ2割を占め学校外の異性とのかかわりが目を引くが【vol.26 巻末集計表】、多くの高校生にとっては、学校生活を中心として身近にいる異性と交友関係を築いている。

そうした異性とのつきあいをする高校生に、表6－5よりつきあっている相手への気持ちを尋ねると、「恋人として交際している」と答えた者は女子82.5%、男子77.1%と最も多い。さらに、「将来結婚しようと思って交際している」と答えている者も女子では33.3%、男子で34.8%いる。この結果を2002年*と比較すると、「ただの友だちとして交際している」割合は大幅に減少し、「恋人」「結婚」を意識

■表6－4 現在つきあっている人がいる割合

(%)

	1988年	1994年	2002年*
女 子	20.3	17.3	20.4
男 子	15.0	13.6	13.0

* 2002年 日本教育社会学会研究発表

■表6－5 つきあっている相手への気持ち

(%)

	女 子			男 子		
	1988年		2002年*	1988年		2002年*
ただの友だちとして交際している	36.5	>	17.4	40.9	»	20.0
恋人として交際している	82.5	<	94.8	77.1	<	94.6
将来結婚しようと思って交際している	33.3	<	46.8	34.8		43.8

「はい」の割合 <10ポイント <20ポイント以上の差

* 2002年 日本教育社会学会研究発表

■表6－6 その人とはいつ頃まで続きそうか

(%)

	女 子			男 子		
	1988年		2002年*	1988年		2002年*
卒業する以前に終わってしまうだろう	9.9		17.1	16.4		15.0
高校を卒業したら終わるだろう	8.5		3.9	10.9		3.0
結婚までいきそうだ	21.1		27.9	21.8		27.0
まったくわからない	60.5		51.2	50.9		55.0

* 2002年 日本教育社会学会研究発表

する生徒が増加しており、高校生は意識のうえではつきあっている相手は「恋人」であり、将来の「結婚相手」と考えていることがわかる。ところが表6-6で、つきあいが「いつ頃まで続きそうか」と尋ねると、「まったくわからない」と答えた生徒が男女とも5割を超え、その関係の持続性は不確定要素も含む危うい関係でもある。

このつきあっている相手への気持ちは性体験率と関連が高く、セックスの体験がある女子生徒ほど「将来の結婚相手」100%、「恋人」86.7%との気持ちが強く、「友だちとして交際」はわずか14.3%にすぎない【vol.26 図IV-4】。したがって、女子高校生がセックスまで関係を深めるのは、将来の「結婚」を意識する場合であり、一方男子では、「友だちとして交際」が4割、「将来の結婚相手」は5割強にとどまる。この意識の違いが「妊娠」「中絶」などで多くの場合、女性を被害者の立場に立たせるのである。

次に、現在相手のいる生徒の具体的なつきあい方を表6-7で示した。表の中に、□で囲んである項目は性行動の具体的な体験を示している。2002年*の調査では「キスをする」は、女子82.3%、男子76.8%と8割前後の生徒がつきあっている相手とキスをしている。そして、さらに深いつきあいの「ペッティングをする」では女子56.9%、男子54.9%、さらに進んで「セックスをする」は、女子が48.0%、男子が56.5%となる。現在つきあっている相手のいる生徒は2割前後と少ないものの、相手ができればキスをするのはごく自然の行為で、半数を超える者がセックスまで体験してしまうのが現状である。この結果を1988年と比較すると、「キスをする」「ペッティングをする」「セックスをする」などの性行動がより積極的で深い関係に進んでいることがわかる。特に、女子ではこうした性行動は2倍近く的大幅な増加になっており、性意識の垣根が低くなっているのと同様、性行動の

■表6-7 異性とのつきあい

	(%)			
	女子		男子	
	1988年	2002年*	1988年	2002年*
手紙や日記の交換をする	21.9	> 11.5	28.6	> 11.4
電話で話をする	88.4	91.4	79.6	81.9
同じ部活動や委員会に入る	12.3	4.6	12.5	15.4
登下校を一緒にする	40.0	33.1	29.2	≪ 49.5
ファミレスやバーガーショップでおしゃべり* (喫茶店でおしゃべりする 1988年調査)	67.2	> 55.4	67.3	59.8
誕生日のプレゼントをする	92.5	84.6	88.2	91.6
映画やコンサートへ行く	60.0	64.6	78.0	80.9
キスをする	42.9	≪ 82.3	53.3	≪ 76.8
ペッティングをする	33.3	≪ 56.9	39.1	< 54.9
セックスをする	30.2	< 48.0	44.4	< 56.5

<10ポイント ≪20ポイント以上の差

* 2002年 日本教育社会学会研究発表

垣根も低くなっていることがわかる。

このように高校生の性行動が活発で、セックスまでに発展していることは、当然、避妊が問題となってくる。表6-8で、現在相手とつきあっている生徒がその相手と初めてセックスしたとき、「避妊した」は、男子・女子とも6割台。さらにその後のセックスと避妊の関係をみてみると、セックスが「1度だけで終わった」は男女とも1割、「数回で終わった」が3割弱、「現在も続いている」のは女子・男子とも6割で、1988年と比較すると、「数回で終わった」が増加し、「現在も続いている」が10～20ポイント近く減少している。つきあっている相手を替えていることや、その場限りのセックスをしている生徒も増えていると推測できる。そこで、繰り返しセックスするときの避妊に対する対応をみると、女子では「いつも避妊している」が56.3%、「全く避妊していない」が14.6%、1988年と比較すると「いつも避妊している」は飛躍的

に増加し、「全く避妊していない」は約3分の1にと大幅に減少している。一方男子で、「いつも避妊している」は42.1%、「危ないときだけ避妊する」が47.4%と、1988年と比較すると女子と同様「全く避妊していない」が大幅に減少し、避妊の必要性は理解しているようである。しかし男子が「危ないとき」を適切に判断できるだけの性知識を持っているのだろうか。衝動的な性行動の言い訳や避妊を女子に依存したセックスをしているようで気になる結果である。

このように高校生の異性とのつきあいをみると、性意識の垣根が低くなっているのと同様、性行動の垣根も低くなっていることがわかる。とりわけ、女子の性行動が積極的になり、キスやセックスをすることに性差がみられなくなり、男性任せだった避妊を自分自身の手で積極的に行い、異性との対等な関係の中で性行動を主体的にコントロールしようとする印象を受ける。

■表6-8 セックスの体験と避妊

		(%)			
		女子		男子	
		1988年	2002年*	1988年	2002年*
初めてのセックスのとき					
	避妊した	63.2	68.0	60.0	65.6
その後のセックスと避妊					
セックスの体験	1度だけで終わった	10.0	10.0	12.5	12.7
	数回で終わった	10.0	< 26.7	16.7	< 27.0
	現在も続いている	80.0	> 63.3	70.8	> 60.3
避妊～現在も性関係が続いている場合～					
	いつも避妊している	33.3	≪ 56.3	41.2	42.1
	危ないときだけ避妊する	26.7	29.2	29.4	< 47.4
	全く避妊していない	40.0	≫ 14.6	29.4	> 10.5

<10ポイント ≪20ポイント以上の差
* 2002年 日本教育社会学会研究発表

3) 性非行と規範意識

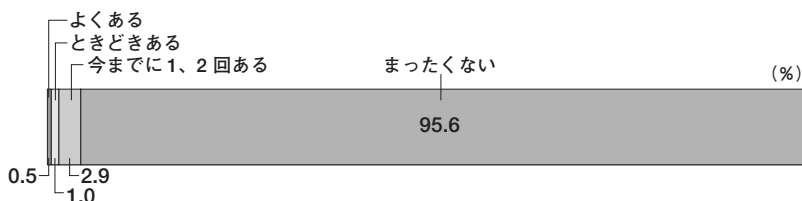
高校生は、本やビデオでの性情報へのアクセス、さらに双方向のメディアである携帯やEメールなどで知り合った相手を持つなどウェブ上でのやりとりも活発であり、学校にしながら社会に開かれる「見知らぬ異性」との交流も可能になっている。そうした時期の1996～1997年頃には「援助交際」と名づけられた性非行がマスコミに大々的に報じられた。「モノグラフ・高校生」では、「援助交際」の実態とそれを支える環境的、意識的要因を行為と感覚または意見や規範のレベルから探った。

① 高校生の性的環境と援助交際

まず、高校生を取り巻く性的環境をみるために、1997年東京都生活文化局が実施した青少年調査の「援助交際体験者が4%」の数値を示し、その数値の妥当性を尋ねたところ、半数が「この程度だと思う」と答え、4割が

「もっと多いと思う」と答えた。この判断には学校差が大きく、学校によって性的環境に大きな差違が認められる。さらに、「援助交際」を誘われた体験（女子）では、「何回もある」5.7%に「2、3回ある」10.6%と「1回だけ」8.9%を含めると25.2%と、4人に1人は誘われた体験を持っており、テレクラやデートクラブでの誘いやアルバイト体験も身近で、高校生の性的環境はおとなの性的欲求のターゲットとしてや社会の中の性産業と深くかかわっている。そうした性的環境の中で生活する高校生たちの「援助交際体験率（女子）」は4.4%（東京5.9%・埼玉3.3%）にすぎないが（図6-3）、図6-4で示したように援助交際を「絶対しない」と自信を持って言い切る者は7割、「もしかしたらするだろう（すでにした者も含めて）」6.7%、「たぶんしないだろう」22.9%と、全体の3割が経験を持っているか、多少ともその準備状態にあることがうかがえる。

■図6-3 援助交際の体験（女子）（vol.52 図1-5）



■図6-4 「援助交際をするかもしれない」と思うか（女子）（vol.52 図1-6）



② 逸脱行為と性の規範感覚

そこで、援助交際体験群と非体験群を援助交際予備軍（「もしかしたらするだろう群」・「たぶんしないだろう群」と「絶対しない群」の4分類し、高校生の逸脱行為との関係をみたのが、表6-9である。体験群と非体験群の逸脱行為とのかかわりには大きな差が見いだされ、体験群では他の逸脱行為にも深くかかわっているようである。

さらに、「援助交際は誰にも迷惑をかけていないし、本人も相手もいいのだから非難すべきではない」という意見の賛否から高校生の規範感覚をみると、4群の差は顕著で、当然とはいえ体験群に肯定率が極めて高い（図表省略）。

次に規範意識として表6-10の逸脱行為と合わせて罪悪感を尋ねた。体験群では「友

だち同士でお酒を飲む」「ナンパしたりされたりする」「アダルトビデオを見る」「パチンコをする」「テレクラでアルバイトをする」行為を「とても悪い」と答える者は6%以下にすぎず、「たばこを吸う」「無断で外泊する」「援助交際をする」が2割前後と、非体験群と比べ規範感覚の大きな崩れがみられる。さらに、性風俗への抵抗感も少なく、性の商品化への嫌悪感も低く、援助交際体験群は普通とはズレた性の規範感覚に支えられていることがわかる。

③ 性非行の抑止力

高校生を取り巻く性的環境は刺激的で、性意識や性行動の垣根は低くなり、規範感覚も希薄で特に性規範が低下している。そうした高校生たちにとって性非行の抑止力とは何か

■表6-9 逸脱行為の体験 × 援助交際の体験（vol.52 表3-9から）

		（％）		
	体験群	もしかしたら するだろう	非体験群 たぶんしない だろう	絶対しない
友だち同士でお酒を飲む	100.0	91.9	85.7	67.0
ナンパしたりされたりする	89.5	86.5	73.2	51.2
アダルトビデオを見る	78.9	67.6	41.2	25.8
たばこを吸う	81.1	56.8	40.7	21.5
パチンコをする	55.3	13.5	22.4	14.7
無断で外泊する	78.9	27.0	28.6	9.3
テレクラでアルバイトをする	21.6	5.4	2.7	0.0

「よく」＋「ときどき」＋「今までに1、2回」ある割合

■表6-10 高校生としてどのくらい悪いことか × 援助交際の体験
（vol.52 表3-10から）

		（％）		
	体験群	もしかしたら するだろう	非体験群 たぶんしない だろう	絶対しない
友だち同士でお酒を飲む	5.3	8.1	4.4	12.5
ナンパしたりされたりする	2.6	2.7	3.3	8.7
アダルトビデオを見る	2.6	0.0	4.9	12.2
たばこを吸う	18.4	32.4	30.6	51.8
パチンコをする	5.3	2.7	9.8	20.1
無断で外泊する	21.1	13.5	15.3	36.3
援助交際をする	21.1	32.4	51.6	79.5
テレクラでアルバイトをする	5.3	32.4	38.5	66.7

「とても悪い」割合

を探ってみたのが図6-5である。援助交際の体験群と非体験群から性非行を規定する要因を以下にまとめる。

㊐ 女子生徒全体にお金がかかるおとなのおしゃれや流行への強い関心と欲求がみられ、他方、授業や教師への満足感が低く、高校生活にも著しく満足感が低い。また、衝動性や孤立感など性格の不安定さもみられる。そうした中で満たされない高校生活への代償的満足を自己発揮できる異性交友に求め、自分の女性としての魅力を確認したい欲求が生じている。

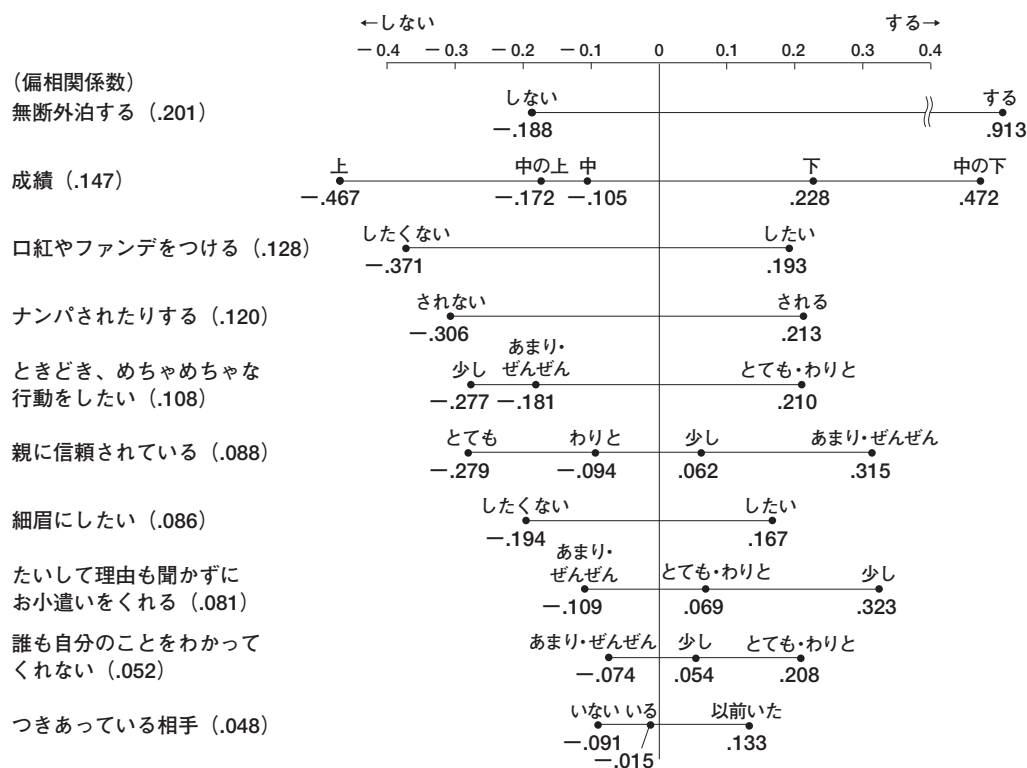
㊑ 高校生全体に規範感覚の崩れがみられるが、特に性の規範感覚に大きな逸脱がみられる。学校差・地域差で性的な刺激や性文化が異なり、性の規範感覚や性行動の逸脱はそうした環境の中で形成されている。

㊒ 親子関係も要因となり、親子関係がうまくいっていない、親のしつけが欠ける、金銭面でのルーズさや子どもへの無関心さがみられる。

㊓ 人間関係が希薄で私事には介入しない傾向が強く、本来ならば抑止力として働く条件が抑止要因として機能することが難しくなっているなどがあげられる。

したがって規範感覚、成績、逸脱行為、性格、親子関係、親のしつけなどの諸要因が複雑に絡み合って、引き金要因が働くと性非行が生みだされる。その背景には性意識や性行動の垣根が低くなったことや双方向メディアの浸透、過激な性産業があり、性非行は女子の現代的な非行の形で決して特別な現象ではないといえる。

■図6-5 援助交際をする子・しない子（数量化Ⅱ類）（vol.52 図3-8）



2. 家族意識の変化とジェンダー

女子生徒が元気になる、男子生徒が何となくおとなしくなったのはいつ頃だろうか。近年、高校生活の中では女子が生徒会長、クラス委員長、文化祭の企画、体育祭実行員長などでクラスを仕切り生き生きと自信に満ちたリーダー性を発揮し、男子はおとなしく黙々と役割を果たすが迫力に欠ける。服装にしても男性・女性の境目が曖昧でボーダレス化し、性差にこだわらない生徒が増えてきており、従来伝統的に信じられてきた男らしさや女らしさの性差の軸が変化している。そこで、vol.32「親（おや）性」（1991年）、vol.50「男らしさ・女らしさ」（1997年）、vol.66「日韓高校生の抱く家族像の対比」（2002年）から、高校生にとっての「男らしさ・女らしさ」の意識と形成を学校生活や家庭環境から明らかにし、将来の家族像をみていく。

1) 「男らしさ・女らしさ」の意識と形成

① 女子の元気・男子のおとなしさ

まず、高校生が抱く「男らしさ・女らしさ」のイメージをみると、「自分の意見をはっきり言い、困っている友人を助け、やさしく明るくて活発なリーダー」は男女に共通した“男らしさ”のイメージである。“女らしさ”は、「心がやさしく、困っている友人を助ける」は男女共通であるが、「自分の意見をはっきり言う」では女子が、「おとなしくてあまり目立たない」では男子の数値が高く、言い換えれば女子は男子より古い“女らしさ”から自由になろうと時代の変化に対応している。一方男子は伝統的な“男らしさ”を保とうとするとともに女子にやや古い“女らしさ”を求めている【vol.50 表2-1】。次に、高校生が従来の男女の特性をどのように捉えている

のか尋ねたところ（「絶対十どちらかといえど」の割合）、「手先の器用さ」「弱者への温かい気持ち」を女性の特徴とするのは4割前後にとどまり、「計算に強い」「感情的にならない」「チャレンジ精神」「全体からものを見る力」「その場の雰囲気ですぐなじめる」「他人のために尽くす」は男女共通した特性と考える者が6割前後で、やはり伝統的価値観から解放された傾向がみられる【vol.50 図5-1】。さらに、学校での性役割意識をみると、「パソコンの操作」「生徒会長」「生徒会副会長」「クラス委員長」「クラス副委員長」「部活動の部長」「修学旅行の班長」が、男女どちらに向いているか「特に決められない」と答えた者が5割を超え、性差に固定的にとらわれない傾向が著しい【vol.50 表2-2】。

それでは、表6-11で、生きていく上で必要な能力・資質をみでみる。男子は「政治・経済への興味」や「運動神経」で従来のイメージを残しつつも「やさしさ、細やかさ」が目立つ。女子も「子どもの面倒をみて料理に自信もあり、相手をいたわるやさしさ」を持っているが、「おおらかで度胸があり、周囲に慕われ頼りにされる」など、伝統的な価値観を保ちながらもたくましくしなやかな面もみられる。

したがって、女子は社会の変化に適応し、伝統的な男性気質や能力も着々と身につけ新しい女性へと一步一步変容し、一方、男子は社会変化のためこれまで独占してきた気質や能力を崩され、やさしさや細やかさに自分らしさを見いだしたものの、新しい男性像の軸がわからず、目標を見失った虚脱感が漂い戸惑う姿がみえてくる。そうした思いが元気な女子、おとなしい男子の姿と重なるのであろう。

② ジェンダー観の形成とその背景

高校生が自分の「性」で利益を得たことが「何度もある」と「数回ある」を合わせると男子 8 割、女子 9 割、逆に損をした（「何度も十数回」ある）ことは男子 6 割、女子は 9 割で、女子の方が女性であることで利益・不利益両方の体験を多くしている【vol.50 図

5－2・図 5－3】。学校では男女のイメージが崩れ、女子であることで不利益を被ることもあるが利益も同じくらい得るようになったからだろうか、性役割受容をみると、男子 8 割、女子 6 割が自分の「性」を肯定的に受け止めている【vol.50 巻末集計表】。

■表 6－11 生きていく上で必要な能力・資質 × 性 (vol.50 表 4－4)

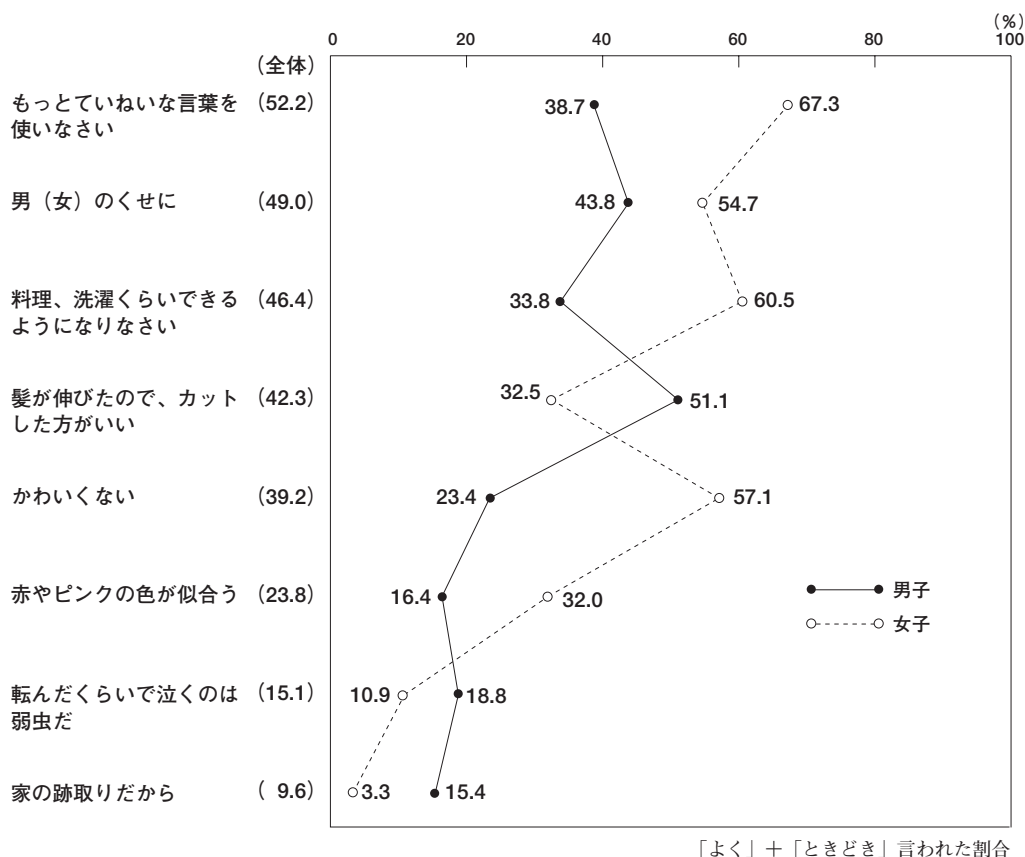
	(%)	
	男子	女子
相手の意見にうまく合わせることができる	54.8	≒ 56.2
少々のことではあきらめない粘り強さがある	52.4	≒ 54.7
相手の気持ちを考え、傷つけないやさしさがある	51.3	> 43.3
小さい子どもの面倒をみることができる	45.9	< 50.4
少々のことは気にしないおおらかさがある	40.3	< 47.5
料理がそれなりにできる	38.4	≒ 40.0
細やかな気配りができる	37.2	> 29.6
すすんで相手をいたわり、なぐさめるやさしさがある	36.2	≒ 35.2
政治・経済への関心・知識がある	34.1	> 17.7
少々のことではビビらない度胸がある	34.1	≒ 35.8
困った場面ですばやく決断できる	33.9	> 26.1
体力・スタミナがある	33.6	> 27.6
運動神経がよい	32.8	> 19.9
相手のためなら言いにくいとも言える厳しさがある	32.3	≒ 33.8
お金をもうける才能がある	26.9	> 13.1
まわりの人から慕われたり、頼りにされたりする	23.5	< 29.4
相手や仲間を引っばっていく力がある	22.0	≒ 23.5
仲間をまとめていく力がある	20.1	≒ 19.8
おしゃれがうまい	13.9	> 10.7
ルックスがよい	12.0	> 5.9

「とても」＋「わりと」あてはまる割合

一方では、図6-6に示したように、高校生たちは周囲から、女子には「もっとていねいな言葉を使いなさい」「女のくせに」「料理、洗濯くらいできるようになりなさい」「かわいくない」「赤やピンクの色が似合う」など、男子には「髪が伸びたので、カットした方がいい」「転んだくらいで泣くのは弱虫だ」「家の跡取りだから」と、伝統的な女性像・男性像を求める働きかけがなされる。しかし、高校生の家庭生活をみると、母親が専業主婦な

のは3割にすぎず、7割の母親が何らかの職業を持ち【vol.50 図1-3】、父親も休日は家事参加を視野に入れたライフスタイルをしている【vol.50 表5-6】。すなわち、高校生の親世代がすでに性役割分担がかなり崩れており、しかも高校生たちはこのような性役割の崩れた親たちに好感を抱いている。こうした家庭環境が性役割受容に影響し、新しいジェンダー意識を形成する背景として認められる。

■図6-6 まわりから言われたこと×性 (vol.50 図5-5から)



2) 家族像の変化と親性

～日韓の高校生を比較して～

高校生のジェンダー意識の変化は将来の家庭像にどのような変化をもたらすのだろうか。東京とソウルで比較してみた。

理想の夫婦像は、夫と妻が「お互いに頼り合っている夫婦」であり、東京とソウルに共通しているが、東京では6割で、男子は「どちらかというと夫がしっかりリードする夫婦」、女子では「それぞれが独立した生き方を尊重している夫婦」の数値が高い。伝統的な性役割を女子に求める男子と、伝統的な性役割とともにたくましさや強さを合わせ持った新しい女性の姿が垣間見える。ソウルでは8割が「お互いに頼り合っている夫婦」を求めており、特に男子の方がそれを望んでいる【vol.66 表15】。

次に理想とする家庭像をみると【vol.66 表14】、東京の高校生は、恋愛結婚をして、新婚旅行は海外に行き、いずれ東京近郊に一戸建ての家を建て、老後は子どもの世話になりたい気持ちが強い。「モノグラフ・小学生ナ

ウ」の母親を対象とした調査(vol.21-1「小学生の親子関係—母親調査から—」(2001年)では、ショッピングや家族旅行、お祝い事など楽しい行事は一緒に、そして老後はなるべく子どもの世話にならずに暮らしたいとの結果を得たが、現在の高校生は若い頃は親に依存し、老後は子に依存したいのだろうか。実際に2段・3段の豪華なお弁当を作ってもらい、「自分の存在自体が親孝行です」などという高校生を身近にみるとうなずける数値である。一方、ソウルの高校生は年をとっても子どもの世話にならず老人ホームが8割近くになり、儒教意識が薄れた感もある。

次に、表6-12で理想の家事分担をみると、東京・ソウルともに多くの男子は結婚したら妻に朝食を作ってもらいたいと願っている。そして東京の女子は朝食を作ろうと思っているが、ソウルの女子は妻だけが作ることに否定的である。さらに、東京では、朝食以外の項目でも、男子は妻に家事を頼みたい、女子は妻が家事をしたいと考える傾向が強い。

ソウルの高校生は予想以上にジェンダーに

■表6-12 理想の家事・育児の分担(要約)(vol.66 表17)

			(%)	
		全体	男子	女子
朝食作り	東 京	61.4	61.4	61.4
	ソウル	43.1	55.0	36.6
夕食後の片づけ	東 京	30.1	31.1	29.5
	ソウル	14.9	22.9	10.6
部屋の掃除	東 京	32.9	28.7	35.3
	ソウル	12.7	22.6	7.3
おむつの取り替え	東 京	24.8	32.1	20.6
	ソウル	33.7	45.8	27.0
子どもをお風呂に入れる	東 京	4.9	8.8	2.7
	ソウル	21.3	31.1	15.9
子どもを寝かしつける	東 京	24.1	29.0	21.4
	ソウル	21.5	30.2	16.8

「妻が半分以上」+「妻がほとんど」する割合
 Vは女子の10ポイント以上開いた項目

とらわれない生き方を志向している。一方、東京の高校生は、穏健なかたちで伝統的な性差が定着している様子が見えてくる。前述したように、日本の高校生のジェンダー観は、男子は伝統的なイメージを残しつつもやさしさや細やかさを獲得し、女子も子どもの面倒をみて料理に自信もあり、相手をいたわるやさしさなど伝統的な価値観を保ちながら、お

おらかで度胸があり、周囲に慕われ頼りにされ、たくましくしなやかな面がみられたのだから、穏健なかたちで伝統的な性差が定着していることになるのは当然といえば当然である。しかし、高校時代に性差を意識せず社会の変化に適応し生き生き活躍し社会的達成意欲の高かった女子が、将来像では伝統的な性役割志向であることに少し違和感も覚える。

3. まとめに代えて

高校生の性意識と性行動の変化は著しく、とりわけ女子が男子に比べ積極的になってきている。すなわち、高校生にとって、意識と行動レベルでセックスの垣根が低くなり、とりわけ女子の意識の積極化は、セックスだけでなく広くこれまでの伝統的な女性役割を超えようとする構えの増加をも意味している。それは性・異性関係に限らず、元気さや生活の充実感の上昇が、ジェンダー・フリーな時代への流れの中で生み出されている可能性が推測される。

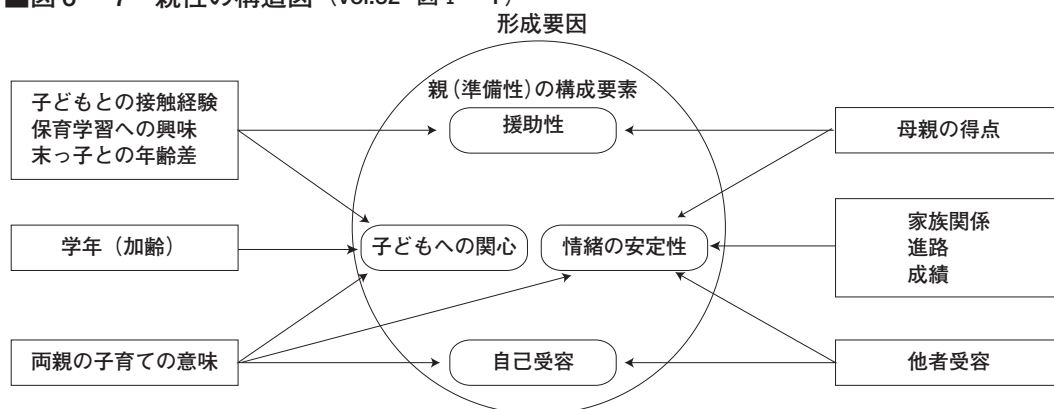
ところが、将来像をみると、女子には伝統的な性役割志向が強く、男子は女子に依存する傾向がみられる。老後も子どもに世話を期待するなど依存傾向も強い。性差の少ない学校生活に対し性差が強く残っている実社会での厳しい現実からだろうか、伝統的な性役割志向が強くなる女子や目標を見失っている男子は、変化する社会の中でその“男性らしさ”“女性らしさ”の原点をどこに求めたらよいか戸惑っているようだ。

このような価値観の多様化と社会の変化の中で揺れる高校生たちが、やがて結婚し親になるのも遠い日ではない。そこで最後に、「親性」「親準備性」について考察し、まとめに代えたいと思う。「親性」とは、狭義には子どもを育てるときに必要な心的態度であり、広義には人と人とのかわり合

いに必要な“暖かさ”までを含み、狭義の「親性」に限定してもその構成要素は多岐に絡み合いながら1つのまとまりを示している(図6-7)。この「親性」の中心にあるものは、いわば自分と他人を含めた「人間への関心」であり、他人から引きこもったり、他人との関係から逃げようとするのではなく、他人の人生にも自分ができうる範囲で何らかの貢献を果たそうとする。それが人生における「生きる意味」となり、自分を支えることになる。すなわち、セルフ・エスティームの確立につながる生き方になる。その意味では、表6-13・表6-14で、自分を「たいていの知人から好かれている」「役に立たない人間だとは思わない」と把握する態度は、両親や家族や自分に対する好意的な評価と密接な関連を持つ。そうした人間観と他人への態度の中でこそ、人は子育てに積極的にかかわり、父親も、母親も、そして他の人々もが、それを自分のライフ・ワークの重要な一部として位置づけることができ、健全な性・異性観を養うことができるのではないだろうか。

したがって、高校生には、子どもに愛情と関心を持ち、幼い者や弱い立場の者を援助し、子どもにとって自分がその精神的なよりどころや支えの役割を果たすことのできるような心的態度の形成が必要と考える。

■図6-7 親性の構造図 (vol.32 図I-1)

■表6-13 人間への感情 × たいていの知人から好かれている (社会的安定感)
(vol.32 表Ⅳ-1)

人間への感情	社会的安定感			(%)
	とてもそう	少しそう	あまりそうでない ぜんぜんそうでない	
1. 父親と母親は仲がよかったか	54.1 (50.0)	40.6 (36.4)	29.8 (29.5)	
2. 家族に思いやりがあったか	60.3 (52.4)	39.0 (45.5)	27.7 (32.2)	
3. 子ども好きか	75.0 (72.3)	56.9 (64.5)	35.3 (51.6)	
4. 父親が好きか	57.1 (64.7)	44.5 (52.7)	34.1 (44.1)	
5. 母親が好きか	74.7 (67.4)	62.2 (57.3)	35.9 (48.3)	
6. 夫が好きか	36.1 (45.3)	15.8 (18.7)	4.6 (16.4)	
7. 自分が好きか	60.3 (52.4)	55.3 (50.2)	32.9 (33.9)	

※上段=高校生の母親

() 内=幼稚園・小学校低学年の母親

1～2は「とても少しそうだった」の割合

3～7は「とても十かなり好き」の割合

■表6-14 人間への感情 × 自分が役に立たない人間だと思う (心理的不安定感)
(vol.32 表Ⅳ-2)

人間への感情	心理的不安定感			(%)
	とてもそう 少しそう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない	
1. 父親と母親は仲がよかったか	31.1 (27.5)	41.0 (37.8)	45.0 (41.0)	
2. 子ども好きか	43.0 (55.0)	58.1 (60.2)	61.3 (70.7)	
3. 母親が好きか	57.3 (49.3)	58.5 (56.2)	69.0 (61.7)	
4. 自分が好きか	3.2 (13.0)	11.3 (17.0)	34.6 (34.4)	

※上段=高校生の母親

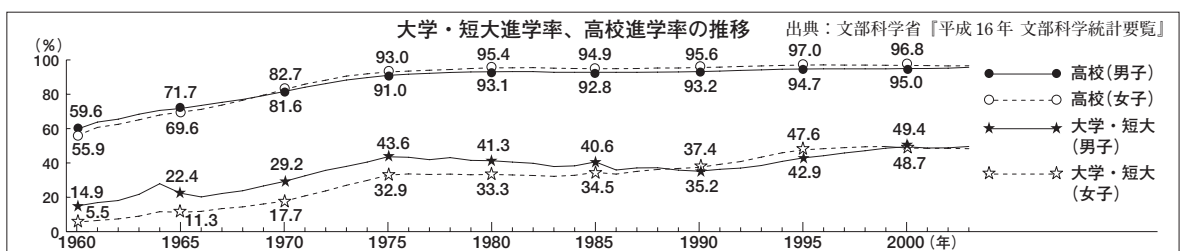
() 内=幼稚園・小学校低学年の母親

1は「とても少しそうだった」の割合

2～4は「とても十かなり好き」の割合

モノグラフの子どもたちの時代環境

	S35 1960～	S40 1965～	S45 1970～	S50 1975～
社会一般 経済・産業	東海道新幹線開業 (64) 東京オリンピック (64)	いざなぎ景気 (65) 三億円強奪事件 (68)	万国博覧会 (70) 「よど号」ハイジャック事件 (70) 浅間山荘事件 (72) 沖縄返還 (72) 札幌オリンピック (72) 日本列島改造論 (72) オイルショック (73)	ロッキード事件 (76) 日本赤軍日航機乗っ取り (77) 日中平和友好条約 (78) 第2次オイルショック (79)
教 育	高学習指導要領告示 (60) 文部省全国一斉学力テスト (61) 教科書無償制 (63)	教科書裁判提訴 (65) 小学習指導要領告示 (68) 大学紛争 (68～69) 中学習指導要領告示 (69)	高学習指導要領告示 (70) 中教審四六答申 (71)	主任制度化 (75) 小・中学習指導要領告示 (77) 高学習指導要領告示 (78) 教育委員準公選制度 (東京・中野区) (78) 国立大学共通一次試験実施 (79)
食生活・健康		初のレトルト食品 ボンカレー発売 (68)	カップヌードル発売 (71) マクドナルド第一号店開店 (71) 日本初のコンビニ開店 (74)	ファミリーレストラン (78)
電化製品・生活用品など	カラーテレビ放送開始 (60)	電子レンジ初登場 (66) 3 C (カー・カラーテレビ・クーラー) (66)		ウォークマン (79) パソコン、PC8001 発売 (79)
流行・遊び・ アミューズメント	ダッコちゃん流行 (60) ツイスト (62)	スーパーボール (65) 電子ブロック (65) リカちゃん人形 (67) 人生ゲーム (68) グループサウンズ	ボーリングブーム (71) オセロ (73) 超能力・オカルトブーム	「およげ! たいやきくん」(75) スケートボード (76) ピンクレディー旋風 (77) キャンディーズ解散 (78) インベーダーゲーム (78) 竹の子族 (79) ディスコブーム
テレビ・映画	「ロンパールーム」(63) 「鉄腕アトム」(63)	「ウルトラマン」(66) 「魔法使いサリー」(66) 「巨人の星」(68) 「ひみつのアッコちゃん」(69) 「サザエさん」(69) 「8時だヨ! 全員集合」(69)	「あしたのジョー」(70) 「ルパン三世」(71) 「仮面ライダー」(71) 「太陽にほえろ!」(72) 「ひらけ! ボンキッキ」(73)	「ザ・ベストテン」(78) 「3年B組金八先生」(79) 「西部警察」(79) 「ドラえもん」(79) 「機動戦士ガンダム」(79)
雑誌・マンガ	「おそ松くん」(62) 「少女フレンド」(63) 「マーガレット」(63)	「天才バカボン」(67) 「少年ジャンプ」(68)	「an・an」(70) 「non・no」(71) 「びあ」(72) 「ベルサイユのばら」(72) 「花とゆめ」(74) 「宇宙戦艦ヤマト」(74)	「コロコロコミック」(77) 「キン肉マン」(79)
子ども関連の事件				落ちこぼれ問題浮上 家庭内暴力顕在化



大学・短大進学率…大学(学部)・短大(本科)への進学率(浪人を含む)
高校進学率…高校の通信制課程(本科)への進学者除く

S55 1980～	S60 1985～	H2 1990～	H7 1995～	H12 2000～
東北・上越新幹線開業 (82) グリコ森永脅迫事件 (84)	日航ジャンボ機墜落事故 (85) 男女雇用機会均等法施行 (86) 地価高騰 (86) 国鉄民営化 (87) エイズ社会問題化 (87) 消費税実施 (89) セクハラ問題化 (89)	湾岸戦争 (91) バブル崩壊 (91) 育児休業法 (91) Jリーグ開幕 (93)	阪神淡路大震災 (95) 地下鉄サリン事件 (95) 大手金融機関の破綻相次ぐ (97) 長野オリンピック (98) 東海村臨界事故 (99)	九州・沖縄サミット (00) えひめ丸沈没 (01) 同時多発テロ (01) 完全失業率、初めて5%まで上昇 (01) 住民基本台帳ネットワーク開始 (02) 日韓共催W杯 (02)
放送大学開学 (83) 臨教審発足 (84)	単位制高校制度化 (88) 初任者研修制度 (88) 小・中・高学習指導要領告示 (89)	大学入試センター試験実施 (90) 学校週5日制(毎月第2土曜日が休日) (92) 業者テスト廃止 (93)	学校週5日制が月2回に (95) 小・中学習指導要領告示 (98) 高学習指導要領告示 (99)	大学・大学院への飛び入学の促進 (01) 「学びのすすめ」(02) 完全学校週5日制 (02) 小・中学習指導要領実施 (02) 国立大学法人化 (04)
ボカリスエット発売 (80)			O-157 猛威を奮う (96)	SARS、鳥インフルエンザ流行 (03)
CD (82)		ポケベル流行 ノートパソコン カーナビ 液晶テレビ	Windows95 (95) 携帯電話 MD プレーヤー デジカメ	カメラ付き携帯電話 (00)
ルービックキューブ (80) チョコQ発売 (80) なめ猫 (81) 東京ディズニーランド開園 (83) ファミリーコンピュータ (83) エリマキトカゲ (84)	スーパーマリオブラザーズ (85) おニャン子クラブ (85) ビックリマンチョコ (86) ドラゴンクエスト (86) ミニ四駆 (86) バンドブーム (89) ゲームボーイ (89)	UFOキャッチャー流行 (92) カラオケBox (92) ジュリアナ (93)	コギャル・ルーズソックス・顔黒・茶髪 (95) プリクラ (96) たまごっち (97) ハイパー・ヨーヨー (97) ダンスダンスレボリューション (98) 遊戯王 (98) キックボード (99)	東京ディズニーシー開園 (01) USJ開園 (01) お笑いブーム 韓流ドラマブーム
「オレたちひょうきん族」(81) 「Dr. スランプアラレちゃん」(81) 「E・T」(82) 「おしん」(83) 「スクール☆ウォーズ」(84) 「風の谷のナウシカ」(84)	「となりのトトロ」(88)	「ちびまるこちゃん」(90) 「クレヨンしんちゃん」(92) 「セーラームーン」(92) 「家なき子」(94)	「名探偵コナン」(96) 「ポケットモンスター」(97)	「ハリー・ポッター」(00) 「千と千尋の神隠し」(01) 「ロード・オブ・ザ・リング」(01)
「CanCam」(81) 「北斗の拳」(83) 「DRAGON BALL」(84)		「SLAM DUNK」(90)	「犬夜叉」(96) 「ニコラ」(97) 「ONE PIECE」(97) 「NARUTO」(99)	
校内暴力・いじめ・登校拒否が社会問題化	中野区中学生いじめを苦に自殺 (86) 幼女連続誘拐殺人事件容疑者逮捕 (89)	校門圧死事件 (90) 山形マット死事件 (93) いじめ自殺多発 (94)	学級崩壊問題化 (97) 神戸連続児童殺傷事件 (97) 黒磯市教師刺殺事件 (98)	新潟少女監禁事件 (00) 出会い系サイト関連事件頻発 (01) 大教大附属池田小学校児童殺傷事件 (01) 長崎県幼児誘拐殺人事件 (03) 佐世保小6女児殺害事件 (04)

